
転生した格闘家の世界探訪

ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した格闘家の世界探訪

【Nコード】

N31780

【作者名】

ジュン

【あらすじ】

俺は、神の気紛れにより殺され、そして転生させられてしまった。転生先は……何？色々回る？

そんな感じで俺の世界探訪の旅が始まるのだった…。

キャラ紹介

キャラ説明します。

名前 みかげじん
神影迅

身長 178?

体重 65?

見た目 紅髪の左側に流すアシメ。襟足は首の少し下まである。瞳の色も紅色で、つり目気味。顔立ちには中性的な感じのイケメン。

特技 料理、剣術、拳術、銃器の扱い、暗器

年齢 24歳

(転生後) 16歳

生前は21歳まで自衛隊として活動し、その後二年間は紛争地域を転々とし、自らの強さに磨きをかけ、23歳になってからは自己の道場を開設する。

……が、マンガやアニメが大好きだったりする。

生前から既にその強さは人間離れしているまでに強く、転生してからは更に拍車がかかり強くなった。
レベルで言えば、生前が多少弱くなった範馬勇次郎レベル。転生してから、人外レベルのバグキャラとなった。

転生して最初に付与された能力は『限界突破』と『吸血鬼の真祖』、『特技レベル上昇』の三つ。

説明

『特技レベル上昇』

自らの生前に特技としていたモノを異常なくらいまであげる。
簡単に言えば、料理は食べただけで天にも昇れるくらいまでとなり、暗器は大きさが何であろうと大量に入る。

Fate的ステータス

筋力	A++ (100~150)
魔力	EX
耐久	A++ (100~150)
幸運	C (30)
敏捷	A++ (100~150)
宝具	× (無し)

対魔力 A+(50~100)：対魔法攻撃にとっても強く、A+ランク以上の魔法は受け付けない。大体の魔法は聞くことが無い。

フラグ建築士 EX：一級フラグ建築士の称号を取れる程に誰彼構わずフラグを立てる。そのフラグ建築士としての力は某幻想殺し並み。

暗器使い EX：何処にでも暗器が入っており、ナイフから始まり、スナイパーライフルや、鉄球等も収納できる。

直感 A(50)：戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はや未来予知に近い。

魔力操作 E(0)：魔力が多くても、ソレを扱う才能がない。只の魔力タンクだが、魔力銃などで打ち出す場合は可能

気の扱い EX：大体が気合いで出来る程に気の扱いは天才的。一を聞き、十を覚える。

と、こんな感じで次から本編ですね。

プロローグ

俺が目を覚ますと、目の前におよそ20歳くらいの男がいた。

「起きたか」

「誰だ貴様は？俺は貴様など知らん」

「いや、だろうな。会った事あるわけねえし」

そう言って目の前の男はやれやれといった感じに手を広げていた。
俺はその間に周りを見渡すが……白い。
そうとしか言えない空間だった。

「ここは何処だ……？」

「此処は神の間。お前は死んだんだよ…神影迅」

「……………！？何故俺の名を知っている！？」

俺は即座にその男から離れ、拳を構える。

「まあ、そう身構えるな。何故かと言えば、俺が神だからお前の名を知っているのだ」

「神だと？……妄想狂か…」

「違うに決まっているだろう。神影迅。貴様を殺し、連れてきたのはこの俺なのだからな」

その後、その男は俺の生まれや、行ってきた事等を話し出した。

「……成る程。確かにここまで知っているのはおかしい事だ。信じてやろう」

「信じたか」

「しかし……なら殺すのみだ！」

俺は即座に近付き、暗器として隠し持っていたナイフを取り出し、男の体を切り裂いた。

伊達に紛争地域をその身一つで生きて来たワケではないということだ。

「……………かなり痛いな…」

しかし、その男はその身に一つも傷をつけず立っていた。

「……………バカな……………。確かに手応えが…」

「俺が神だと信じたか？」

「……………なら、死ぬまで殺すのみだ！」

そう言って、袖からやズボン、靴から暗器を出し、その男を刺し続ける。

「痛いな…」

「これでも死なないだ？……………ならこれならどうか？」

俺は更に襟から銃を取り出し、延々とその男の脳天を撃ち続ける。

「チッ！弾切れか……」

「……くそ痛いな……。生きてる心地がしねえぜ……」

その男は首を鳴らしながら、体をさする。

「クソ……。俺が殺せねえヤツがいるとはな……。自信無くすぜ……」

「そう言うな。お前は確かにあの世界では惑う事なき最強だ。なんせ、大国では無いと言え、紛争地域の紛争をたった一人で抑えられるのだからな」

確かにその覚えはあった。

「……けど現に勝てねえヤツがいるじゃねえか」

「いや、正確に言うなら俺は三千六百八十二回死んだんだ。ただ、俺は不死兼超速再生を持つ神だからな。死ぬことはねえんだよ」

「……そうかよ。で、神が何のようだ？」

「お前には世界を回ってもらいたい。転生してな？」

状況から判断して、俺は何を言おうとも転生する事になるだろう。
相手は不死の神。

反抗する事は出来ても、勝つ事は出来ないだろう。

「致し方無い。良いだろう。貴様の気紛れか？」

「そうだ。神にもなると、娯楽に飢えてしまつてな。お前は今まで
見た人間の中では最高に気に入っている。だから、願いを叶えてや
ろう」

「はあ……しかたねえか……。願いか？」

「ああ。何だって叶えてやるぞ！最強にするも良し！神の力を得る
も良し！マンガやアニメの力を得るも良し！世界を治めるのも良し
！さあ、願いは何だ！」

（願いが何でも叶うのか？……何にしようかな……）

「……やはり楽しんで手に入れた力など俺には必要ない。力の限界を

無くし、不老不死、それに俺の特技を上げてくれ」

「…変わったヤツだな。まあ良い。なら、『限界突破』と『吸血鬼の真祖』、『特技レベル上昇』の三つで良いな？」

「ああ。それでいい」

そう言った瞬間、神の手が淡く発光する。

「……終わったぞ。ま、楽な力だし、速攻で終わるからな」

「ああ。早いな。で、俺は最初に何処に行くんだ？」

「……………そうだな。お前の部屋にあるマンガの……………魔法先生ネギま！の世界で良いか？」

……………あんまバカみたいに強いヤツ少なくないか？

「大丈夫だ。大戦期だからな」

「心を読むな！……………なら、良い。齒応えのあるヤツがいるのは最高

だ！」

「……戦闘狂が」

「違うわっ!!」

そんな感じで話し……………。

「なら、頑張れよ」

「まあ程々に暴れるさ。最強になる為にな」

「ああ。ならじゃあな」

その瞬間、急に地面が開く。

「ハアッ!? 何しやがんじゃボケエッ!?」

「残念。アッハッハ! バイ!」

「ふざけんなポケエツ!?!?!?!のあああああ!?!」

そうして俺は地面に開いた穴の中に落ちていった…。

プロローグ（後書き）

ジュン「さて、今回は神に会ったな」

迅「誰だよお前？」

ジュン「ハッハッハー！決まってるじゃないかね？作者だよ作者」

迅「テンション高くてウザいな」

ジュン「そう言わないでくれよー」

迅「まあどうでも良いけどさ」

ジュン「無視が一番酷い！！」

迅「さて、詰問だ」

ジュン「質問じゃないの!？」

迅「何故俺に特技を上げさせた？」

ジュン「いや、元々苦勞して手に入れた力なんだし良いじゃん？」

迅「そんなもんか？」

ジュン「そんなもんだよ。ま! 気にすんな! っと、時間だな」

迅「ああ、そうか。締めはするぞ。次回も見えてくると有り難い！」

ジュン&迅「それでは次回！」

ネギま!・大戦編EP1 悪魔って初見じゃなんか分からん(前書き)

ネギま！・大戦編EP1 悪魔って初見じゃなんか分からん

俺が目を醒ますと、其処は森の中だった……。

「いや、なんでだよ……」

俺は事態の把握が出来ずに、周りをゆっくり見渡した。

「……誰もいないし……。ってか、現在地何処だよ……」

取り敢えず俺は歩き出した。

「……あ。暗器の中身の確認しよ」

そう言って俺は身体中から暗器を取り出した。

ナイフに、日本刀、西洋剣、鉄糸、鉄針、槍、拳銃、リボルバー式の拳銃、サブマシンガン、マシンガン、スナイパーライフル、18口径のリボルバー式の拳銃。

（……18口径とか大きすぎないか？）

自分で入れながら、割と中身を把握していないのにも驚きを隠せなかった。

それから約八時間後……………。

「終わったな……………」

俺は暗器の整備を終え、また服に暗器を隠していく。

「…………やはり、装備はいつもきれいにしておかないとな……………」

そう言いながら最後のリボルバー式の拳銃を収納し、また歩き始めた。

「…………街が見えない……………」

正直急に一人になると、どうでも良い事を考えてしまう。

（…………はぁ…。師範代から八ヶ月で降りる事となるとはな…………。門下生達はなんと思ったかな…）

そんな事を考えながら、俺は歩いていった。

それから歩くこと四時間……。

夜になったため、俺は警戒しつつも睡眠をとるのだった。

そして次の日……。

朝起きると直ぐに俺は歩き出した。

「今日こそ街に着きたい……………」

そう思いながらも、俺は歩き詰めた。
そして、四時間の時間が経ち…………

「やっと街が見えた……………」

俺はやっと見えた街に感動していた。
だがその刹那、街から煙が上がった。

「……何だ?…急ぐか…」

俺はその街に向け、全力で走り出した。

「穏やかじゃあねえな…」

俺が走る間にも、更に煙の量は増えていた。

「……更に飛ばすか!」

俺は、縮地バりに速度を早め、現地へと足を早めた。

そして、街に着くと……

其処は火の海になっていた。

「此処も戦地となったのか?……生き残りを探そう」

『キャアアアアア!?!』

「ッ!生存者がいるのか!……あっちか!」

俺は、声のした方向に向け、全力で走り出した。

「此処を曲がったところで聞こ……え？」

曲がった先で見たのは、なにか黒い生物が女性を襲ってる姿だった。

（この殺気……助けた方が良さそうだな）

俺は即座に女性と黒い生物の間に割り込み、相手の腕を掴む。

「キサマ何者ダ？」

「さあ。……名も無き武道家だよ！」

そう言ってソイツの頭を殴ると、鈍い声と共にソイツの頭が一回転して崩れ落ちた。

「さて、お前ら。俺が相手をしよう。……さあ……掛かってくるが
良い」

俺は構えて敵を促すと、黒い生物達は同時に四方から襲い掛かってきた。

「成る程。定石だ……だが、遅い！」

俺は前と右にいたヤツを蹴り、そのまま左のヤツの腕を持ち、回転しながら後ろのヤツに叩き付けた。

「それにしても数が多いな……」

そう言いつつも俺は片っ端から敵を殴り続け、十分程たった頃には二、三人しか残っていなかった。

「……キサマ人間か？」

「愚問だな。俺が人間ではなく何に見えるのだ？」

「グギッ!？」

話ながらも俺は三人のうち二人の首を捻りきる。

「あとは、お前のみだが？」

「…気も魔法も使わぬ人間にこれ程追い詰められるとは想像もしていなかったな……。良いだろう。俺の名はイクシード・ガラムドバルだ。誉れ高き伯爵級悪魔が一人！いざ参らん！」

そう言って、イクシードは瞬間で俺の前に近付いてきた。
が、俺は反射的にイクシードを殴った。

「なにっ!？」

「反射的に殴っちまったか。まあ良い。俺は素手しか使わんからな。
心おきなく来い。強いやつなら大歓迎だ！」

「ヌウオオオオオオ!!」

イクシードは更に速度を上げ近付くが、その度に反射的に俺に殴られる。

「なら、これならどうだ！」

「うおっ!?!あぶねっ!?!」

イクシードの口から虚閃（セ〇）的モノが放たれ、俺はそれをギリギリ避けた。

：避けた先は、当たった瞬間に爆発を起こし、消し飛んでいた。

「マジかよ…」

「怖じ気づいたか？」

「ハッ！誰が怖じ気付くって？怖じ気付くワケねえだろうが！最高に盛り上がって来やがったぜエ！」

俺はそのままイクシードに近付き、殴りかかる。

「ウオラアアアアア！！」

「ツヌウツ！？」

俺はそのままイクシードに反撃させないように連打で攻撃を食らわしていく。

[illegible]

某世界のス○ンドを使う人みたいな声を出しながら、延々とイクシードを殴り続け、止めと言わんばかりに両手を組み、ハンマーのようにイクシードの頭を叩き殴る。

「グアツ！ キ、キサマアアアアア！ ブ、ブチ殺してやるぞ オオオオ！！」

その瞬間、イクシードの体がぶれ、殴り飛ばされた。

「なっ！？早さが増した！？」

その後、俺は二十発くらいくったくらいで、目が慣れ、敵の一撃を止める。

「ようつやく目が慣れたぜ！行くぞ！ずっと俺のターン！」

バーカーソウルを使う感じで攻撃をしまくる。

「グアアアアア!」

イクシードは攻撃を返そうとするが、俺はソレを避け、イクシードの頭を捻り切る。

「勝ったな…。この世界には、更に強いヤツがいて、良いな。更なる高みを目指せる……」

そう言い、空を見ていたら、ふと思い出しさっきの女性に向き返る。

「大丈夫か？」

「……………ありがとうございます」

その女性は余程ひどい事があったのか、虚ろな目をしながら礼をしてきた。

「家族はどうした？」

「……………もう……」

そう言って、女性は俯いた。

「…そうか。俺はまた旅に出るが、君はどうする？」

「……連れて…行って……」

虚ろながらも、意志の籠った目でそうしっかりと告げた。

「…分かった。名前は？」

「……レイナ……レイナ・ルナアーク……。あなたの…名前は…」

「俺は神影迅だ。よろしく。呼び方はどうすれば良い？」

「……よろしく……。好きに呼べば…良い…」

かなりの無口か、それともショックで立ち直れないのか、口数が少ないみたいだ。

「じゃあ、ルナ。これからよろしく！」

「……よろしく……迅……」

そうして俺は、ルナを新たに仲間に取り入れ、次の街に足を進めるのだった…。

ネギま!・大戦編EP1 悪魔って初見じゃなんか分からん(後書き)

ジュン「さて、今回も始まったぞ！」

迅「そうかよ」

ルナ「……誰……ですか」

ジュン「はじめましてルナちゃん！」

ルナ「………」迅の後ろに移動

迅「ルナが引いてんじゃねえかよアホ作者」

ジュン「アホは酷いぞ！」

迅「なんだ？違うのかよ？」

ジュン「酷いイツ!! キャラ紹介しようと思ったただけなのにっ！」

迅「ならさっさとしろよ」

ジュン「……分かったよ。ルナちゃんの見た目は、濃い紫色の腰まであるストレートで、目の色は紫色で目は少しつり目気味の美人さんです！」

迅「……もう紹介とやらは終わったのか？」

ジュン「いや、ルナちゃんから言ってもらわないと！」

迅「まあ、ルナが良いつつーなら良いんじゃない？」

ルナ「……………レイナ・ルナアーク……………よろしく……………」

ジュン「あ！もう終わった！」

迅「名前だけか。まあ良いけどさ」

ジュン「あ！時間だ。締めよろしくね！」

迅「分かった！次回を見てくれると有難い！」

ルナ「……………それじゃ……………」

ネギま!・大戦編EP2 龍って何気に超強いよね(前書き)

取り敢えず龍を出してみました。

次の話で紅き翼に会えるかな…。

ネギま！・大戦編EP2 龍って何気に超強いよね

それから幾つかの町に足を運び、次に着いた町で俺は自らがなんと呼ばれてるか初めて聞いた。

……なんでも、『武神』『修羅』『戦鬼』等その他色々武闘系の通り名で呼ばれてるらしい。

「そんなに色々やったか？なあルナ？」

「……………分からない……………」

ルナは相変わらず無口に近いままだ。
ちなみに近くの村でした事は、適度な難易度の依頼をサクサクとこなしていただけだ。

「とりあえず依頼でも受けるか」

「……………分かった……………」

そうしてクエストボード？のもとに移動する。

「ふむ。今回はなんの依頼にするかな」

俺は上から順に依頼を確認していく。

商車護衛

村の警護

悪魔討伐

薬草採取

龍種一体討伐

悪魔軍勢討伐

ダンジョン探索

龍種軍勢討伐

……よし、これにするか。

そう思い、俺は龍種軍勢討伐の依頼をとる。

「……大…丈夫？」

俺の顔を多少ながら心配そうにルナが見る。

多少でもルナのいつもの態度からしたらすぐくになるだろう。

「大丈夫だ。気にしてくれてありがとうな？」

そう言い、ルナの頭を撫でる。

ルナは少しだけ目を細め、少し気持ち良さそうにしていた。

「……良い。待ってる…」

そんな事をルナが言ったところで、俺は依頼主に会いに行き、依頼場所へと出向いた。

「これは中々に……盛大…だな」

依頼場所へと着くと其処には、黒龍や翼龍、火龍や祖龍等色々な龍共が蠢いていた。

「しかし、相手にとって不足はなし！向かうぞ！」

俺は即座に龍共のところに向かい、まず目の前にいた黒龍に右ストレートを放つ。

「グガアアアアア！！」

黒龍に対し、ストレートは効いたようだが、即座に尾で横殴りに叩

き付けられる。

「ガッ!？」

(何だこの重さは!?!……まあいい。自らの力試しとこのうか…)

俺は黒龍の尾の一撃で、壁に叩き付けられる。

依頼場所は溪谷のため、壁と面しているため、追加ダメージが極めて食らいやすいのだ。

「カハッ……!」

壁に叩き付けられた衝撃で、肺に溜まっていた空気が吐き出され、簡易的な酸欠状態に陥る。

それを追撃するかのように黒龍が俺に向け、突進を食らわす。

「グオッ……!」

俺の体が更に壁にめり込む。

「グルルル……」

「グアアアアアア!?」

炎弾が俺の体を包み、俺は壁に叩き付けられた。

「グウツ…!」

皮膚の焦げた臭いがする。

肋骨から違和感を感じる。

俺の体は多大なダメージを負っていた。

俺は口に溜まった血を吐き出し、胸に開いた傷に手をつ込み、折れた肋骨を取り出す。

「痛ツ…!」

傷から血が溢れる。

……が、その十秒後血が止まる。

俺は生前から常人の数十倍……いや、数百倍の自然治癒能力を持っており、骨折ぐらいでも三十秒足らずで治る。

火傷の方もいつの間にか治っていた。

「仕方ねえ…。拳のみで行く気だったが、多少暗器を使わせてもらおう」

その瞬間俺は鉄糸を取り出し、黒龍、祖龍の二体に絡ませ、力を入れる。

「グギヤアアアアアアア！」

黒龍と祖龍の悲痛な叫びが鳴り響く。

二頭の体はブチブチと肉を裁つ音と同時に千切れていく。

「まずは二頭」

そう言い、力を込めると、二頭は只の肉塊へと変化した。

「三頭」

武器を西洋剣へと取り換え、火龍の首を落とす。

「グオオオオオ！」

その瞬間、翼龍が大口を開けて突撃してきたが、十八口径のリボルバー拳銃を取り出し、口の中に三発撃ち込む。
流石に十八口径は威力が高く、多少手が痺れた。

「四頭」

翼龍は口の内側から脳髓を狙撃され、そのまま沈黙した。

「さて、此処からは素手でいかせてもらおう」

暗器の血を振り払い、また収納する。

残りは、皇龍、轟龍、死龍、白龍程度だった。

死龍や皇龍に関しては、最早伝説級のハイデイルイトウオーカーだろう。

二個前くらいに寄った村の宝物庫にあった文献に書いてあったくらいだ。

強さ的には、エヴァンジェリンを凌駕するかも知れない。

「ラアアアアアア！」

取り敢えず、白龍に右手の全力ストレートの次に全力の左回し蹴りを放つ。

さっきまでの一撃よりも更に威力が高く、重い一撃だった。

この世界に来てから、力の上がり方が目まぐるしく、実践の度に強くなっている感触がある。

「グオオオオオ!!」

白龍は横の壁に叩き付けられ、その一撃で溪谷の一部が崩れ、白龍に雪崩れ込んだ。

その間、死龍、皇龍の二頭は我関せずと言わんばかりに立っていた。……が、轟龍が俺に襲い掛かってきた。

「グオオオオオ!!」

轟龍が口を開け、俺に食らい付こうと飛び込んでくる。

「ハアッ…!!」

俺はそれを轟龍の上顎と下顎を右手と左手で持つことで止め、徐々に広げていく。

「グギヤアアアアアア!!」

ミシミシと轟龍の顎が悲鳴を上げる。

ゴキッ!

その音と共に轟龍の顎は砕けちり、轟龍は絶命した。

「やるな人間」

ふと声が聞こえそちらを向くと、死龍か皇龍。どちらかが声を出しているみたいだった。

「そりゃどうも。どちらが話している？」

「俺だ」

死龍が吼える。

その叫びは、溪谷を揺るがし、溪谷の壁を削り取った。
俺もその音の衝撃波のような一撃をくらい、肉が裂ける。

「我も貴様を認めよう。人間。名は？」

「…神影迅だ」

「そうか。迅よ。我等を見事に満足させてみよ!!」

その瞬間、皇龍の叫びが鳴り響く。

その皇龍の雄叫びにより、溪谷は削れ、只の平地へと成り果てた。
先程よりも更に激しい衝撃波により、体がズタズタに切り裂かれた。

「グアッ…！」

「行くぞッ！」

皇龍の巨大な図体からは考えられない、尋常ない迄の早さを誇る一撃が俺の四肢を捉える。

「チィッ！」

俺はそれに対し、右腕で迎え撃ち、殴りかかる。

「ッ！？」

皇龍の一撃は尋常ないもので、俺はその一撃に耐えきれず、かなりの距離を飛ばされた。

「グオッ！流石だな」

そう言いながら、俺はまた皇龍に突撃する。

そのまま近づいた瞬間、全力の右ストレートを叩き込むが皇龍も右腕で仕掛け、拮抗状態になった。

「グオオオオオオ!!」

腕に全身全霊を込め、皇龍を迎え撃ち、その内押し始めた。

「なにっ!？」

「ヌウオオオオ!!」

「グオッ!？」

皇龍を殴り飛ばし、追撃と言わんばかりに、皇龍を全身全霊で殴る。

「ぬうッ! 戦いの中で成長しているのか!？」

「全身全霊で叩き潰させてもらおうぞ!」

皇龍に対し、油断を見せず、ラッシュで押していく。
格ゲーでいったら、多分99コンボまでいったところで、ムーンサルトで皇龍の下顎を蹴り抜いた。

「ぬ、ぬう……」

「次は俺がいかせてもらおう人間」

次は死龍が出てきた。

「戦いやすくしてやろう」

そう言うと、死龍の体が光輝き……発光を終えると、其処には白髪の男が立っていた。

「こちらの方が戦いやすいだろう?」

「あ、ああ。そりゃまあな」

死龍が龍人化した事に驚きつつ、構えをとる。
龍人化しても、死龍の後ろからは立派な尻尾が生えていた。

「行くぞ！」

声がした瞬間、俺は既に殴られていた。

俺は、飛ばされそうなのを踏ん張り耐え、死龍を殴る。ソレを受け、死龍もまた殴ってくる。

そうして、ソレを翌日の朝まで続け続けた。

「はぁ…はぁ……」

「此処まで踏ん張るとは思わなかったぞ人間」

「デメエも…な！」

そう言いつつも、殴り続ける。

しかし、しばらくすると死龍は殴るのをやめた。

「まあ良い。俺もコイツも人間。貴様の事を気に入ったようだ。迅とか言ったか？また何れかこの続きをしましょう。それまでに強くなっておく事だな」

そう言って、皇龍と死龍は割と仲良く去っていった。

残された俺は、微妙な気持ちになりつつ、村へと帰っていった。

「龍って喋れんだな……」

さっきまでの事を思いながらそう呟いた。

ネギま!・大戦編EP2 龍って何気に超強いよね(後書き)

ちなみに、死龍、皇龍の名称は、タナトスとバハムートです。

皇龍のイメージは言わずもがなFFのバハムートで、死龍は……ゾンビな感じ？

と、次も見てくれるとありがたいです！

ネギま!・大戦編EP3 結構強くなってて驚いちゃったね(前書き)

やっと紅き翼に接触できた…。

ネギま！・大戦編EP3 結構強くなってるって驚いちゃったね

村に着くと、すぐ目に入っただのは村の入り口で絡まれてるルナの姿だった。

「ねー、君可愛いねー。なにしてんの？」

「……………待ってる…」

近付きながら話し声を聞いていると、ルナはどうやら俺が帰るのを待っていてくれたらしい。

なんだか、色々感慨深いな。

「誰を？まあ、ソイツもそんなに早く帰ってこないだろうし、俺達と遊ぼうぜ！」

「…………いや…。…どっか…行って…」

「ギャハハハハ！断られてやんの！ダッセー！」

「う、うるせえ！取り敢えず連れていく！」

そう言って男はルナの腕を掴む。

「…い、いや。…やめて…」

こういう状況でもやはり寡黙気味なルナに苦笑いしつつ、俺はルナを掴んだガキの肩を掴む。

「おいクソガキ。テメエその穢きたないい手を離しやがれ」

「なんだよ……ッッ！？グアアアア！？」

ガキの肩がミシミシと音を立てる。

その痛みに耐えられず、ガキはルナを掴んでいた腕を離した。

「クソガキ共。ルナになんか用か。ルナにちよっかい出そうってんなら……チリニカエスゾ？」

黒い笑みを浮かべ、ガキ共を見ると、ガキ共は「ヒ、ヒイツ！」とか「あ、あああ」とか言って、腰抜かしたあと走って逃げていった。

「まったく、油断も隙もねえ…。あんな輩はどこにでも居やがるんだな…」

ガキ共が尻尾巻いて逃げるのを見たあと、ルナに向き返る。

「ルナ？大丈夫だったか？」

「……大丈夫……ありがとう……」

そのあと、俺は依頼報告をし、身支度と食料を整え、次の村へと出発した。

死龍と皇龍の二頭を討伐しなかったため、報酬が下がってしまったので、軽く泣けたりもした。

「さて、どっちに向かうか？」

「……あっち」

ルナが北北西の方角を指差して言ったので、取り敢えずそれに従い、北北西の方角に向かうと……見事に迷った。

「なあルナ？この森ってさ……迷いの森？」

「……分からない」

そのあと、4時間程歩き続けたが、一向に出られず日も落ちかけてたので、取り敢えず野宿をすることにした。

「飯作るからちつと待っててな？」

「……うん……迅の料理……楽しみ……」

（嬉しい事言ってくれるじゃあ無いですかい？腕によりをかけて作らせてもらうぜ！）

思えば、この世界に来てから料理を作るのは初めてだったりする。腕が訛らないように頑張らないとな……。

……で、腕によりをかけて料理を作り作ったんだが……。

「これは……」

この世界で初めて作った料理は……なんというかヤバイ。
悪い意味じゃなくて良い意味でヤバイ。

「……すごい…」

ルナの口からも感嘆の声が漏れる。

「取り敢えず……いただきます」

「……?……いただき……ます……?」

俺が箸を合わせ、「いただきます」と言うと、ルナも見真似で「いただきます」といって、箸をとった。
そして、料理を口に運び……。

「……!!!!……スゴく美味しい」

なんだか食べた瞬間、ルナの目がトロリとしていた。
あまり表情が変わらないルナだったけど、料理を食べた瞬間……微笑んだ。
それに思わずドッキリしてしまった。

（そんなに美味しいのか？……よし、食べてみよう）

料理を口に運ぶと、もはやこの世のモノとは思えない天にも登れるかのような（良い意味で）味が口に広がる。

（こ、これ……。俺が作ったのか？）

そんな事を思ってしまうくらいその料理は美味かった。

そして、飯を食い終わり……

「……美味しかった…」

「お粗末様でした。褒めてくれて嬉しいよ」

とか言っていたら、急に殺気が現れた。

「……！悪魔か？…少し行ってくる」

「……うん……待ってる…」

向こうに走る事約一分……。

目的地に着くと、そこには数多の悪魔が犇めいていた。

(……誰が召喚したんだ?)

そんな事を思いつつ、拳を構える。

「誰ダキサマ？」

「神影迅だ。……行くぞ！」

取り敢えず近くの悪魔の頭を掴み、その横にいた悪魔に叩き付ける。
……最初の時よりだいぶ一撃が強くなってるのは気のせいだろう。
多分。

「グギヤアアアアアア!？」

悪魔の断末魔が鳴り響く。

俺は、悪魔共を一方的に駆逐していった…。

「???? side」

飯を食い終わり、焚き火を煽ってたら、急に悪魔が現れた気配がしやがった。

「…ナギ」

「分かってるっつーのアル。行くぞ!」

俺を呼んだコイツはアルビレオ・イマ……まあ変態だな。

そうして、悪魔共のところに向かったら、ビックリするような光景を見た。

「……なんだアイツ…」

「あやつ…みたところ、気も魔力も何も使っておらぬ様じゃな」

この爺臭いしゃべり方をしているのは、俺のお師匠のゼクトで、その言葉に耳を疑った。

「はあっ!?! アイツ素であんな戦闘力持ってたのかよ!?! 化け物かよオイ!?!」

そんな事を言いながらも、俺は目の前にいるあの男と戦ってみたくなった。

……ってか、さっきまでいた悪魔もう全然いねえし……。
まあ良いか。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻。千の雷!」

「ちよっ!?! ナギ!?!」

アルが何か言ってるが関係ねえ。

アイツと戦ってみてえんだからな!

……って、コレって不意打ちか?

………やっちまったアァア!!

大丈夫だよなオイ!?!

～end～

俺が悪魔を倒し終わって、一息ついてたら、横から声が聞こえてきた。

「千の雷！」

……………へ？

大呪文の名前が聞こえた気がしたんだが？

ゆっくりそちらに振り向くと、目の前には既に千の雷が……………。

「ちょっ！？何事っ！？」

いきなりの事で避けきれず着弾した。

……………が、

（あれ？全く痛くねえ…）

つてな感じに思うくらい拍子抜けな感じに蚊が刺した程度の痛みしかなかった。

ってか、煙が超煙い……………。

「ケホッ…ケホッ…。煙いなオイ……………」

「つはあっ!?! 無傷とかマジかよ!?!」

赤髪……あれ? あれってサウザンドマスター達でね?
原作キャラに初めて会ったよオイ!

「俺とやらねえか!」

「えええー。まあ、良いぜ。フルボッコにしてやるぞ、コノヤロー」

とか言っただけで挑発してみたら、殴りかかってきた。

(……へえ。割と重いな。だがしかし! 出力が圧倒的に足りんな!)

取り敢えず全力で腕でハンマーを作り、下に叩き付ける。
障壁があったみたいだけど、紙みたいに速攻で破れて、俺のハンマーが頭に当たったみたいだった。

「グベエツ!?!」

サウザンドマスター……ナギはその一撃を受け、地面に顔も出ないくらいに埋まった。

回りには巨大なクレーターが出来、それだけで威力の高さが分かる

程だった。

「おろ？一撃粉碎ッスか？……生きてるかーい？」

ツンツンと頭をつついてたら、横から話し掛けられた。

「あなたは一体何者ですか？」

「……人に名を聞く場合は自らから名乗るのが一般教養だと思うがね」

「これはすいませんでした。私はアルビレオ・イマです」

「ワシはゼクトじゃ」

「俺は青山詠春だ。よろしく」

わー、アラルブラ紅き翼の面々じゃん。
まだラカンいねえんだー。

「お初にお目にかかる。私の名は神影迅。俗世では『武神』や『修

羅』、『戦鬼』等と呼ばれている。以後お見知りおきを」

そう言って、左足を一步下げ、右手を前に出し、頭を下げ礼をする。

「あの『武神』がこんなに礼儀正しいとは驚いたの……」

「もっと乱暴そうな性格だと思ってましたよ……」

「意外だな……」

上からゼクト、アル、詠春の順だ。

「挨拶くらいは礼儀正しくすんのが礼儀じゃね？ま、よろしくな。つと、引っこ抜くか」

そう言って、ナギを引っこ抜く。

「ぶはっ！死ぬかと思った……」

「ワリイワリイ」

「お前つええな。そうだ！お前俺たちの仲間にならねえか？」

「いいよ」

サラッと許可する。

……軽かったかな？

「軽くないかの！？」

「良いんですか！？」

「即決かよ！？」

上からゼクト、アル、詠春の順だ。

あれ？さっきと言ってる順番変わらねえ。

「ただし。連れいるから連れてくんぞ？」

「もちろん良いぜ！」

「じゃ、ちと行ってくる」

そう言って、ルナのところに戻り……

「……大丈夫……？」

なぜだか早々不安そうにされた。

服を見ると……あ、服ボロボロじゃん。

「大丈夫だよルナ。今からさっきできた仲間を紹介するから来てくれないか？」

「……分かった……」

で、ルナを連れていき……。

「右から、ナギ、アル、ゼクト、詠春だ。ルナ。挨拶してくれるか？」

「……うん……レイナ・ルナアーク……よろしく……」

「よろしくの」

「よろしくな！」

「よろしくお願いしますね」

「よろしく頼む」

と、こんな感じで挨拶をかわし、俺とルナは紅き翼の一員となったのだった。

ネギま!・大戦編EP3 結構強くなってるって驚いちゃったね(後書き)

ジュン「久しぶりだな、迅さんやーい」

迅「ああ? って作者か」

ジュン「おひさ! ってか、君ルナちゃん好きすぎじゃね?」

迅「いや、身内が好きただけだ! ……まあ、ルナは可愛いが……」

ジュン「ルナちゃん、種族的に人間じゃねえが?」

迅「じゃあ、何属なんだよ?」

ジュン「それはお楽しみ。まあ、いつか言うだろう?」

迅「そんなもんか?」

ジュン「そんなもんなの! 第一そんなに力あったら迅も人間じゃね

え！ってかマジックキャンセラー（弱）みたいな効果持ってるな！
あ！そっか。吸血鬼の真祖だったなWW」

迅「人間だボケ。ぶん殴るぞ」

バキッ！

ジュン「だいぶいてえ……。って、時間じゃん」

迅「じゃ、次回もよろしく！」

ジュン「あ！あと、次から違うキャラも出すから！」

迅「なんだそりゃ！？聞いてねえ！」

ジュン「だって今言ったばっかだし」

迅「チッ………次回も見えてくれるとありがたいです！」

ネギま！・大戦編EP4 魔力があっても使えない……コレって何の虐めだ？

えっと、予定では大戦編終了後、一度か二度違う世界に移動し、そのあとネギまの原作編に移行する気です。

ってか、薬味ボーイがラッキースケベっつー事は、その親のナギもラッキースケベだと思っただ俺は。

あと、違う世界で何処が良いか意見とかありますか？

別に、極端に戦闘系じゃなくても、ほのぼの系でも大丈夫です。

ネギま！・大戦編EP4 魔力があっても使えない……コレって何の虐めだ？

次の日……。

俺は紅き翼御一行と行動する事になったんだが……。

「……………ナギ……。…太平洋に臓物をぶちまけ、肉は肥料とする覚悟は出来たか……」

「ちよっ！？わ、悪気は無かった！頼む！許してくれエエエ！！」

「謝罪ごときですんだら、法治国家なんぞ必要ねエンじゃアアアアアア！！！」

俺は絶賛お怒り中だ。

理由は朝起きたら、アホのナギがルナを泣かしてた。よって死刑。

異論も反論もなにもかも認めない。

「ギャアアアアアア！！！」

「待てゴラアアアア！！二度と二本足でたてなくしてやるぞオオオ

オオ！！！！」

「詠春！アル！お師匠！助けてくれえええ！！」

アル、詠春、ゼクトはナギに向かい、合掌していた。
味方はいなくなったな。

さて、地獄を見せてやる……………。

「薄情者おおおお！！」

「絶ッ対抹殺！！！！」

「ピギヤアアアアアアアア！！？」

ナギの頭を掴み、体を地面に押し込んで埋める。

「…………さて…………遺言…………あるか……………」

「弁論じゃないのか！？そ、その…起きたらあんな事になってたんだ！ご、誤解だから許してくれ！！！」

「許さん。血祭り確定。晒し首だ」

まだルナ泣いてるみたいだし。

「ウワアアアアアア!?」

取り敢えず、全力で右ストレートを撃ちおろし、その後袖から十八口径の銃と鉄糸とナイフを取り出す。

「解体分解射殺刺殺……さて、どれが良い？」

「ど、どれも嫌だッ!!」

「完全抹殺。異論はさせん。塵もなにもかも残さん。女性を泣かすカスはヒトと同類の立ち位置に立たす事すら憚れる」

「そこまで言うのは酷くないか!? そ、その起きたら、レイナに覆い被さるように寝てたんだ!」

その瞬間、沈黙が走る…。

アルもゼクトも詠春も何故ルナが泣いてるかは知らなかったみたいだ。

「よし迅。協力するぞ」

「ワシもじゃ」

「私も協力させてもらいますよ」

「よし、このカスを消し尽くすぞ」

上から詠春、ゼクト、アルの順で参加表明してきた。
詠春の後ろからは阿修羅みたいなのが見えた。
そうとうキレてんな…。
不届き者は許さんって事か。

「う…うわ…ウワアアアアアアア！！！」

そして、ナギは塵となり、死に絶えた。

「死んでねえッ！！！！」

「まだ生きてたか……クロス…」

「ギャアアアアアア!?」

そしてナギは肉塊となった。

「扱い酷いぞッ!!」

そんな事言ってるナギは完全に無視し……………。

「ルナ…大丈夫か?」

「…うう…うあああ……………」

はい、まだ泣いてますね。

チクソウ変態ナギめ…。

再度処刑したるか……………。

「怖かったな…。あの変態には罰を与えたからもう大丈夫だ」

「変態じゃねえ!!」

ナギがなんか言ってるけど完全無視。

「……迅……」

ルナに抱きつかれた。

「怖かったのか？」

コクりと頷く。

「よし、ナギ。もう一回処刑………いい」…そうか？なら、いいか」

「何だよその扱いの差っ!？」

そんな事があって、しばらく経ち………。

因みに、ナギにはルナの前で土下座させた。

カ○ジ的に鉄板の上で土下座させようかと思ったが、鉄板が用意出来なかったから諦めた。

「そういえばなんで迅は気も魔力も使わないんだ？」

「あ！それは俺も気になったぜ！」

詠春が聞くのにナギが乗っかる。

「やり方知らねえから」

「は！？」

ナギに盛大にビックリされた。

「そうだ。魔法とかやり方教えてくんね？」

「ああ！良いぜ！」

と、ナギの安請け合い。

魔力使えるようになったらもしかしたらビームが！
う、撃ちてえ！

「気は詠春が教えてくんね？」

「俺か？…まあ、良いぞ」

と、詠春も快諾。

結果的には、アル、ナギ、ゼクトの三人が魔法を教える側。
詠春が気を教える側になった。

…で、魔力を計ったんだが…

「迅はバケモンか!？」

「霊長類ヒト科じゃボケ」

「き、規格外ですね……。魔力量ならナギが数千人いても歯が立ちませんよ」

なにっ!？

俺はそんなに魔力量多いのか!？
こ、これは……。ビームが撃てる！
そう思ったのに練習したら……。

「ダメだなこりゃ。才能ねーわ」

とのナギのアホの一言。

「才能が全くもってありませんね」

「ただの魔力タンクじゃな。ウドの大木じゃ」

アルには、才能皆無と貶され、ゼクトに至っては、魔力が役立たず扱い。
マジ泣くよ？

「お前ら、つええ魔法使いだろうが！！なんとかしろや！」

「才能無いからぜってー無理」

「ワシにもどうにも出来ぬな」

「無理ですね」

と、貶され俺はorzのポーズをとる。

「……迅……大……丈夫……？」

練習を見てたルナが慰めてくれた。

「ありがとうルナ……。そうだ。ルナ、魔法教えてもらったら？」

「……良いの？」

「全然良いですよ」

と、アルも言ってくれた事だし、俺は詠春のところに向かった。

「詠春！ 気を教えてー！」

「早いな。魔法はどうだったんだ？」

「き、聞かないでくれ……」

Orzのポーズを取りながら詠春に言ったら、苦笑いされた後、気を教えてもらうことになった。

「ともかくは気を感じる事だな」

「どうやって感じるんだ？」

「こ、こう……勘だ！」

随分適当なこって。

「いやいや、違うだろ。もっと違う感じの……」

「じゃあ……流れを感じるんだ。体内に流れる微弱な気や、世界の流れを」

こっち先に言えや……。

「分かった」

そう言って、取り敢えず流れを感じてみると……

（わ、分かるぞ！流れが！）

ってな感じに余裕で感じれた。

（流れを操ってみるか…）

世界の流れをいじくって手元に集めてみた。

「気弾が出来た!!」

「何だっ!?!」

って、めっちゃ詠春にビックリされた。

（気を自在に……）

って、やってたら内気功も気合いで出来た。
ま、まさか……

「かめ〇め波アア!!」

もはや伏せ字いらないんじゃないかね？
な技名をいったらかめ〇め波が撃てた。

「グハアッ!？」

……詠春に。

「殺す気か!？」

「まさか出来るとは思わなくて……てへっ♪」

「殺す!!」

お気に召さなかったのか詠春がめっちゃキレて切りかかってきた。

「ビルドアップ!!」

とか言って両手を強化したら、腕の筋肉が盛り上がって詠春の剣を
通さないくらい固くなった。

「何だとっ!？」

とか、やってまたしばらく気の練習をした後、ナギのところに戻った……。

「迅！レイナのヤツ、魔法の才能がハンパねえぞ！」

「マジで？」

「うむ。先ほど各属性の大魔法を一発で放っておったからの」

し、死にてえ……。

「気はどうだったんだ詠春？」

「ああ、適当に一回言ったらビーム撃てるくらい出来るようになった」

「存外チートですね…」

とかアルに言われた。
てか、詠春！

お前適当にやってたのか!?

とか、そんな感じで日が落ちていった。

その夜、俺は何と無く詠春の鍋の予定を変更して、俺が飯を作り、全員に配っていた。
真ん中には、料理が二三点並んでいた。

「…………えへへ…」

ルナは微かに笑っていた。
で、そのまま食べ始める。
なんか食べてる時にモキュモキュって擬音が聞こえてきそうだ。

ついでに言うと、えらく幸せそう。

「そんなに美味しいのか？」

ナギがそう聞く。

その間に、ゼクトと詠春、アルは食い始めていた。

「う、美味すぎるぞ!?!」

「う、美味いぞ!?!」

「こ、この美味しさは……」

とか言っていたら、向こうで気配がした。
……が、無視する。

「なにっ!! そんなにうめえのか!!」

そう言って真ん中の料理にナギが手を伸ばそうとした瞬間……
大剣が真ん中に置いた料理を真っ二つにした。

「なにっ!?!」

「……迅の……ご飯……」

ルナが涙目でプルプル震える。
そんなに食いたかったのか……。

その時の俺と言えば……

「お、俺が作った飯が……」

Orzなポーズを取っていた。
作った飯やられるとか……。
そうだ。敵を潰そう。

とか、思っ
て顔を上げたら詠春がやられてた。
……ルナは涙目で落ちたご飯を見てた。

「よし、殺すか」

とかいって、ソイツ……ラカンなんだがに近付き、右腕に気を全力で通し超強化する。
殴った拳からは、ビーム的モノが発せられた。

「死ねエエエエエ!!」

「ぬおっ!?!」

ラカンがいた筈だった大地は俺の一撃で半径50m程の大穴を開けていた。

「抹殺だアアアア!!」

「うおっ!?!あぶなっ!?!」

「飯の恨みだアアアア!!」

次々と繰り出される一撃により、その近くの大地は穴だらけとなっていた。

それからしばらくたち……

「もう良いか……。後はナギに任すぞ」

「ああ、分かったぜ」

とか言って、バカVSバカの戦いが始まる。

「……………ご飯……………」

観戦してたら、ルナに服の裾を引っ張られた。

「じゃあ、軽く作るか？ゼクト、詠春、アルもどうだ？」

「「是非とも！！」」

とか言って飯を四人にもう一回作り、食い終わる頃にもう一回見に行ったら、戦いは終わっていた。

「引き分けか…」

「まあ、ナギと引き分けるなんて中々彼もチートみたいですね」

「俺は？」

「あなたはバグですよ？」

アルにそう言われ、俺はorzのポーズをとる。
チートじゃなくてバグって……。

くそしてところ変わってく

俺は今、本国首都まで来ている。

ガトウというダンディーなヤツと若いタカミチ。いつかはダンディーになるんだよね？

も一緒に来ている。

「ルナ。なんだろうな？」

知ってるけどね？

アリカ王女……ナギの嫁に会うんだよね？

「……分からない。何だろうね？」

ルナは割と寡黙が治り、表情も柔らかくなってきていた。

「主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

マクギル元老院議員？が話し、アリカ王女が出てきた。

わー、キリッ！としてんな。

「俺はラカンだ！よろしくな！」

「気安く話しかけるな下衆が」

と、速攻で切り捨てられた。

「アリカ王女。お初にお目にかかる。私の名は神影迅。俗世では「武神」や「戦鬼」等と呼ばれている。以後、お見知りおきを」

「お主が最近噂の「武神」か。よろしく頼む……ぞ」

俺の横にいたルナを見て一瞬固まる。
が、すぐに元通りに治った。

（……………知り合いか？）

そんなこんなで話を終え、その後……。

「アイツラ元気だよねえ。スツゲエ仲良いじゃん」

「そうだよな」

とか、ナギとラカンの二人を遠目で見るとった。

ネギま!・大戦編EP4 魔力があっても使えない……コレって何の虐めだ？

ジュン「迅、君はルナちゃんの事になると暴走するね」

迅「ち、違うっ!」

ジュン「何処が違うのか全く分からん!」

迅「アレは多分女性なら誰でもなる!………多分」

ジュン「まあ、安心したまえ。次はルナちゃんの正体を含めたルナちゃん回にする気だからな」

迅「何を安心すんだよ……」

ジュン「さあ? まあ、気にすんな! それにしても……魔法の才能皆無だねえ……」

迅「う、うるせえっ!」

ジュン「何しても無理だったのか？」

迅「『火よ灯れ』すら出来なかった……orz」

ジュン「か、可哀想すぎる……」

迅「良いんだよ！ 気でビーム撃てんだから！！」

ジュン「バグだね」

迅「バグ言うな……orz」

ジュン「あ、そろそろ締め頼むよ」

迅「分かった。それでは、次回もよろしく頼む！」

迅&ジュン「それではさらばっ！」

ネギま!・大戦編EP5

ルナの本名が意外と長くてビックリした。

(前書き

今回は、ちょっとした閑話休題みたいな感じです。

ルナは人間以外にする事は確定だったんですが、種族が決まらず…
…結果的に家にあったデビメと忍者外伝で考えました。

まだ、次の世界の意見お待ちしてます。

一応、今の候補はFateです。
ステイナイトかエクストラ

ネギま！・大戦編EP5

ルナの本名が意外と長くてビックリした。

あれから少し経ち……

俺たちは休暇をしていた。

……と言っても休憩してたのは、武道家チームのみだが。

オレ、ラカン、ナギの三人とアリカ王女とルナで合計五人。

後の奴らは、頑張って調査中だ。

アイツラに「俺は隠密も得意だぜ？」って言ったのに、信じてくれず俺は待機になってしまった。

「……はぁ………」

「………どうしたの？」

今はルナと買い物に来ていたりする。

前世では俺は小学生くらいの時から既に武道一筋だったため、女性と何処かに行ったのは初めてだったりする。

「いや、何でもない」

「………そう？」

「取り敢えず買い物に行こうか？」

「……うん」

と、こんな感じで、買い物をしていた。

多分ナギ達の方は今頃ナギは連れ回されてるだろうな。

「……あそこに行きたい」

「はいはい、分かったよー」

ま、楽しんでるだろ。

……それなりに。

……で、その帰り…

「……………話が…あるの」

と、ルナに呼び止められた。

真剣な顔付きだったので、取り敢えず話を聞くことにした。

「分かった」

振り返りルナの顔を見る。

その顔は、何処か悲しそうで、それでいて不安そうな顔だった。

「……………私は…人間じゃ無いの」

「……………ああ、龍人とかそういった系統ってことか？」

なら、別にそこまでな話では無いような……………。

「……………そう。私は魔神の皇位なの」

「魔神？魔界の神の一つーことか？」

「……………そうじゃなくて、種族としてあるの。私の正式名はレイナ・ルシフェル・イルミナス・ルナアーク。数少ない魔神の中でも皇位にあたるルシファアの血族の末女。簡単に言えば不死の化け物なの」

自分の事を化け物と呼ぶルナに多少ビククリした。

「叫んでたのは？」

「……初めて外に出たばかりなのに、襲われて動揺しちゃったから……」

「戦いは？」

「……習ってないから出来ない。頑張って覚えれば、多分出来るようになるかな……」

と、聞く度にルナは不安さを濃くしていく。

「へえ。まあ、やっぱりルナはルナだろ。別に種族とかどうでも良いし。その点でいったら、俺なんて人間なのにバグ並の力を持った化け物だぜ？」

「……ありがとう」

「ま、当たり前だ。って、あの時の「もう……」ってアレは？」

「……もう戻らないってこと」

マジで？

……じゃあ、アレは何でだ？

「目が虚ろだったのは？」

「…………その…………見惚れてて…………」

フラグか！？

まさかフラグが立ってたのか！？

「じゃあ、ちょっと溜めが入るのは？」

「…………緊張…………しちゃって…………」

「今でも？」

「…………うん」

微笑ましいなあ。

って感じで、笑顔で見ていた。

「……………」

笑顔で見てたら、ゆでダコみたいに顔が赤くなった。

「……………見ないで…」

「ハハハ！まあ、良いでは無いか。アツハツハ！」

って、笑っというた。

「…あ、あと、外見も違うの」

そう言って、側頭部から前方に向け角を生やし、背中から黒い翼を生やす。

「へえ。似合っててビックリだ」

「……………反応薄い…」

何故だかorzなポーズを取られた。

「綺麗だなー」

って、抱き着きながら棒読みで言うと…

「……ありがとう」

と、返された。

若干不機嫌そうだったけど。

「そうだ！特殊能力みたいなの無いのか？」

「……ある。契約者の魔力を自在に操れる」

ス、スゲーー！！

俺の無駄な魔力使えんじゃん！

「よし！俺と契約しよう！！」

「……えっ！？……でも……契約って……キス………／＼」

……やっちゃった…。

某薬味ボーイのラッキースケベみたいな事になっちゃったじゃねえか。

「仮契約か。俺とするのは嫌か？」

「……嫌じゃ……ない」

そう上目遣いで俺を見てくる。

身長が俺の方が高いから必然的になるんだが、破壊力が高過ぎた。

「……我が生涯に一边の悔い無しィ!!」

とか言って吐血してみた。

「…えっ!？」

ルナの目が点になった。

「ゴフツ……! 凄まじい破壊力だった……」

端から見たら、完全なバカ発言をする俺。

「……迅って…こんな人だったっけ……？」

「イエス！ただ単に女の子に対して極端に免疫が足りないだけなのデス！」

「……迅が壊れたっ！？」

とか言って、ルナは焦ってた。

そんなに心配する必要なんて無いNO☆NI☆

……ダメだ。

自分でも心配だ。

「フー……ハー……。落ち着いた。今のは見なかった事にしてくれ」

「……うん」

（女性に慣れないと……）

とか、当面の目標を考えていた。

「じゃあ…よろしく頼む」

「……うん」

「…ってか、仮契約のキットある？」

「……ある」

「あるのかよっ！？何で常備してんのっ！？」

普通にポケットから二回分の簡易仮契約のキットを出したので、つい突っ込んでしまった。

「……準備してない。今日だけ……」

「お。そうなのか。どっちが主？」

「……二回やる」

「へえー。……………ってマジで!?!」

一歩遅れて反応してしまうくらいにビックリした。

「……………じゃあ」

って言って、仮契約キットを展開する。

「これは……………緊張するな」

「ん……………」

ルナは目を閉じ、上を見ていた。

「……………いくぞ」

ルナの後頭部を後ろから手で支え、キスをした。

「……………次は私……………」

ってな感じで、また仮契約をした。
ってか、男の俺より、ルナの方が積極的だったんだが？

「……………」

自分の仮契約のカードを見て、ルナは悦に入ってた。
何故かカードの複製はルナが出来てた。
カード表記は……

名前 J I N M I K A G E

称号 誇り高き武神

色調 金

徳性 秩序

方位 中央

星辰性 彗星

アーティファクト 偉大なる神々の記憶
マグナ・デウス・メモリア

と、俺はこんな感じで…。
ルナは……

名前 R e i n a ・ L ・ I ・ L u n a A r c

称号 恋する魔神

色調 紫

徳性 愛

方位 西

星辰性 冥王星

アーティファクト

シンボル・デーモンデイ
魔神之証

というカードが出てきた。

「俺の魔力は別にガンガン使えば良いからな？」

「……うん、分かった」

と、こんな感じで俺たちは帰っていった。

……このアーティファクトどんな効果だろ？

ジュン「さて、皆々様こんばんわー!」

迅「こ、こんばんわー!」

ルナ「……えと…その…こんばんわ」

ジュン「別に真似して挨拶しなくていいのに」

迅「急だったからしょうがないだろ!」

ルナ「…………焦った」

ジュン「いやあ、申し訳無い!アツハツハツハ!」

迅「謝る気無いな」

ジュン「そう言えば前話ではゲストを出すのを忘れててねー。今回

はルナちゃんにしてみたよ。次は誰にしようかなー」

迅「もう次の話かつ!？」

ジュン「ウソウソ。あつ。ちょっとルナちゃん聞きたいんだけど」

ルナ「……………なに？」

ジュン「あれはいつから計画してたの? (ボソツ)」

ルナ「……………実は…………魔法教えてもらった時から…………。…………コピーの仕方も…………教えてもらった (ボソツ)」

迅「何言ってるんだ?」

ジュン「いやいや、気にすんな!」

ルナ「……………その通り」

迅「?……………まあ、良いか」

ジュン「あ、時間だ。締めようしくー」

迅「毎回だな。次回も見えてくれるとありがたいと思う」

ルナ「……また見てね」

ネギま!・大戦編EP6 アーティファクトが神の力でチートになっちゃった

アーティファクトは強さを調整するためです。

物理的じゃダメージ与えられないヤツとか来た時の為の。

候補が増えて、今のところは

F a t e / e x t r a ↓ F a t e / s t a y n i g h t

真恋姫

です。

F a t e / e x t r a はサーヴァントとしてか、マスターとしてか
どちらか？

あと、真恋姫だったら、√はどれか。
希望教えてくれると有り難いです。

あと、まだ違う候補募集してます！

P S . あと俺、詠春は巫女さん好きだと思っんです。(どうでもいい)

帰って次の日……。ナギが詠春に怒られていた。

「元氣だねえ…」

「まあ、アリカ王女になにかしら起きたらと詠春は不安になっているのでしょう」

アルが詠春を見て笑いながら言う。

すると、タカミチとゼクトが入ってきた。

「あのコワイ冷血お姫様が今、廊下で僕に向かってニッコリ……。僕ビックリしちゃって……。あ！なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。確かに笑いましたよねっ！」

「うむ、驚いたのじゃ」

「冷血ではないだろ……」

そんな事を頭を押さえながら言ってたら、ナギが変なオッサンの映
ってる紙を取り出した。

「誰だアレ？」

「…アレは…今の執務官」

説明をしてくれたルナはまだ仮契約カードバクティオーを見て、微笑んできた。

「へえー。詰まるところ、戦争を止める為の鍵という認識で良いよ
な？」

「……………うん」

（……………確かこの後って反逆者にされちゃったような…）

そんな事を考えていたら、ルナがアルに話し掛けられてた。

「おや、レイナさん。そのカードは何ですか？」

「……………迅との…仮契約カード…」

と言って、何故だか俺の仮契約カードを渡す。

因みに俺の仮契約カードの見た目は、赤い着物を着崩し、内側には薄目の黒い着物を着ているという格好だ。

因みに拳には布を巻き、袖からはナイフや剣を飛び出させてもいた。

「ほお、仮契約したんですか。どうでした？」

「……………良かった」

「何がっ!？」

ついルナにツツコんでしまった。

「どんなアーティファクトなんですか？」

「あー。そう言えば、見てなかったな。よし、アデアット」

すると、手首にブレスレットが出てきた。

見た目は、十字架の回りに蛇が渦巻いている……所謂ヘルメスが持つケリーリュケイオンの中身が十字架に変わったバージョンだ。

（ヘルメスということは、商業系のアーティファクトか？………いや、それは無いか。だとすれば、錬金術の方か……？）

「……………武器じゃないんですか？」

「知らねえよ！」

とか言ってたら、ナギとラカン、詠春も来た。

「お、なんだそりゃ」

「俺のアーティファクト」

「ああ、レイナとか」

と、ナギに速攻で納得された。

「で、何の能力なんだ？」

ナギに聞かれ困っていると、急に念話が入った。

『久しぶりだな。神影迅。そのアーティファクトの説明をしよう』

（助かる。何のアーティファクトなんだ？）

『それは、再生と必衰、誕生と消滅、創造と破壊を司るアーティファクトだ。簡単に言えば、自動再生兼武器創造兼宝具等創造のアーティファクトだ。因みに、武器はアーティファクト消しても消えん。宝具は消えるがな』

（なにそのチートさ……。ってか、予想と違った……）

念話で更に困ることになり驚いた。

『感謝するがいい。俺自らお前専用で暇潰しに作ってやったのだ。あと、魔力勝手に消費するから』

（暇潰しかよッ！！）

ツツコミを入れた瞬間念話を切られた。
話を聞く気が全く無いようなんだが？

「で、何のアーティファクトなんだ？」

念話が終わった瞬間、ナギに直ぐに聞かれ、とりあえず実践する事にした。

「ゼクト。最強防御よろ」

「う、うむ。なにかは分からぬが良いぞ」

っていつて、最強防御を発動してくれた。

（えーと……、エクスカリバーっつと）

想像したら、直ぐに手元にセイバーが持ってたあの剣が出てきた。ご丁寧に風王結界まで付いていた。

「じゃあ行きまーす。…約束された勝利の剣」
エクスカリバー

で、ゼクトの最強防御は脆く碎け散った。

「「「「はい?」」」」

ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春の五人は意味不明と言った感じに見て、タカミチとルナはポカーンとしていた。

「…何やったんだ?」

「エクスカリバー創った」

「「「「はあっ!?!」」」」

五人とも突っ掛かってきた。

……特にナギ。

アルとゼクトは呆れてた。

「なんだよそのアーティファクト!?!」

「……………バグ過ぎます」

「バグじゃな…………」

俺はorzのポーズを取った。
理由は、バグってまともや言われたからだ。

「なんか再生と必衰、誕生と消滅、創造と破壊を司るアーティファクトらしいんだけど」

「「「「バグだ……………」」」」」

五人に言われ、俺は隅でいじけ始めた。

「……………大丈夫迅？」

「ルナー。アイツラひでえ」

と言って、抱き着く。

あ、良い匂い…。

……………じゃなくて！

「つと、復活。まあ、中身の暗器を増やしますかね」

「暗器なんか持ってたか？」

「持ってるよ」

そう言って、裾やら袖やら、靴やら色んな所から武器を取り出す。

「……………一体何処に入ってるんだ？」

「色々」

「その服は四次元に繋がってるのか？」

「ドラ○もんじゃないんだから繋がってるワケ無いだろ？」

とか言いつつ、武器をどんどんアーティファクトを使って造り出す。
しばらくたち……

「これくらいで良いかな」

「いや、多すぎだろ」

目の前には、俺の数倍のサイズの武器の山が三つほど出来ていた。

「入れますか」

と、入れ始めた。
で、入れ終わり……

「なんで入るんだよ…」

とナギにツツコミされた。

「自分でもわかんね」

「世界の不思議じゃ…」

とゼクトにポカーンとしながら言われた。

「どんな不思議だよ」

因みに、アルと詠春には俺がバグだからという理由で諦められた。
……バグじゃねエエエエ！！

ってか、それにしても武器の量が増えたから体が重いんだがコレ如何に？

「体が重いんだが？」

「『重いんだが？』じゃなくて、あんだけ入れたらフツーなにも出来なくなるぞ？」

詠春のツツコミが入る。

「いや、お前らとは根本的に鍛え方が違うから。鍛え過ぎてもう化け物の域だから」

「ああ。それは良く分かる」

「分かるなよオオオオオ！！」

自分で言っときながらつい叫んでしまった。

「いや、あなたバグだから考えてもしようがないじゃないですか」

「バ、バグじゃない…………orz」

orzして跪いた。

もうメンタル的にダメだ……………。

「いや、否定してもあなたはバグですから」

と、アルに言われ、俺は撃沈したのだった…………。

そしてしばらく経ち、アリカ王女が第三皇女に会いに行く事になった。

「よろしくな」

「分かっておる」

と、それだけでアリカ王女との話しは終わった。

その後、ナギがアリカ王女にビンタされてた。

…………もうちょいアリカ王女に優しくしろよナギ…………。

どうせ嫁にするんだから素直になっちまえよな。

それともあれか？

小学生的恋愛思考を持った人間なのかナギは？

とか、そんな事を考えるのだった。

ジュン「さて、今回はゲスト呼んでいます」

迅「急だなオイ」

ジュン「今回のゲストはアルだ!」

アル「どうもこんにちは」

迅「アルか。何でアルなんだ?」

ジュン「アルのロリコン性は個人的には面白い」

アル「ほう……。仲間ですか」

ジュン「NOT仲間!俺はロリコンじゃ無い!」

アル「…残念ですね。私は詠春も同類のような気がするんです」

ジュン「それって巫女さん好きって事か？」

アル「そうなんですか？フッフ……。仲間に来ますね…。」

ジュン「アルこえエエ！！」

アル「おや、私はあなたも仲間に来れると思っていますよ？」

ジュン「た、た、た、助けてくれエエエ！！」

アル「フッフ……。逃がしませんよ」

ダダダダダダ……………

迅「いっちゃったか……。まあ、良い。締めをするかな」

迅「次回も見えてくれると有り難いです！それでは！」

ネギま！・大戦編EP7　なんか皇女になつかれた。……ああ、髪が痛い（前巻

あと三話か四話で、大戦編終了になります。

……あんまバトってない。

武道家なのに……。

まだ次の世界募集してます！

ネギま！・大戦編EP7 **なんか皇女になつかれた。……ああ、髪が痛い**

しばらく経ち……。

今回ナギ達はマクギル議員（偽）のところに向かっていった。

俺と言えば、残った方でアーティファクトによる結界を創り、侵入者が入ってきたら感知されるようにしていた。

（そろそろか……）

壁に寄りかかり、感を澄ましていると、誰か…総数はおよそ500
近くが結界内に足を踏み入れた。

「お前ら！侵入者だ！とりあえず脱出するぞ！」

「え！？侵入者ですか？」

タカミチが疑問そうに聞く。

「ああ、俺の出した結界に侵入者が感知された」

「…結界なんて作れたんですか？」

アルが疑問そうに聞く。

「アーティファクトの力でな」

「……そのアーティファクト何でも出来ますね」

とか、アルが軽口を叩いてる間に、タカミチ達は準備を終えていた。

「迅さん！準備が出来ました！」

「よし、行くぞ！」

「……………へ！？」

「うわっ！？」

準備が終わったと聞き、即座にタカミチとルナを担ぎ、窓から飛び出す。

「アルも早く来い!!」

「やれやれ……。分かりました」

アルも俺に続く。

「全く……何へマしやがったんだよ……」

「大方敵の罠に嵌められたんでしょうね」

とか、サラツと言うアルに溜め息を漏らしつつ、俺たちはナギの下に向かっていった……。そして、合流し……。

「早かったな」

「まあ、感知使って速攻で逃げたからな」

「戦わなかったのか？」

「元仲間をボコボコにするのはどうも倫理的にな」

一応ついさっきまでは仲間だったヤツをボコるのはな……。まあ、相手がやるっつーならやるがな。

「取り敢えず姫さんのトコに向かうぜ！」

「オッケー。迂回しながらって事だなナギ？」

「そういうこった」

それから暫くたち……。

ようやく夜の迷宮に辿り着いた。

「此処にアリカ王女と第三皇女がいるのか？」

「そうだ」

「オッケーオッケー。じゃあナギ、行くか！」

「おう！」

で、俺らは夜の迷宮で暴れまわった。
そして、壁を叩き壊し…。

「よお来たぜ、姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

ナギの言葉をアリカ姫が返す。

…後ろにいるのが第三皇女か？

「初めましてお姫様」

「なんじゃ貴様は」

因みに言うと、ルナはラカンのトコにいる。

「俺は神影迅。君の名は？」

「妾はテオドラじゃ」

「分かった。よろしく。テオで良いか？」

テオドラって呼ぶのが面倒臭いからとは言えない。

「構わぬ。貴様も紅き翼の一員なのか？」

「ああ。紅き翼メンバー、『武神』の神影迅だ。よろしく」

「貴様があの『武神』じゃと！？あ、有り得ぬ…。コレがあのだ…。『本気の一撃は地を別ち、風圧は天を裂く』とまで噂されておる男なのか？」

それは何処の化け物ですか？

パンチ一発で地面パツカリ、風圧で空に切れ目が入るとか何処の天災級の化け物？

「噂が誇大なだけだと思うけど？流石に天は裂けないし、大地にも大穴開ける程度しか出来ないよ」

「大穴は開けられるんじゃない……」

と、何故だか呆れられた。

「取り敢えず我等の住み処にご案内だ」

「うむ。よろしく頼むぞ」

と、何故だか肩車させられた。

「あ、あの……何故乗ってるんでせう？」

「乗り心地が良いからじゃな」

「……………もう勝手にしろ」

と、諦め俺らは住み処に戻ってった。

ラカンにからかわれたが、回し蹴りを食らわしといた。

「なんだ迅！紅き翼の住み処と聞き、どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺らは逃亡者なんだからそこまでデカイ家には住めんよ」

「む……そうなのか？」

「当たり前だこのジャリが」

とラカンが言い返す。

ってか、いつの間に横にいたんだ？

「この無礼者がー！」

とか言っただけ俺の髪を引っ張る。

「イテテテテ！毛髪がア！毛髪が抜けるウウ！」

「むう……。あの筋肉男を倒すのじゃ！」

「何故にっ！？」

「やるのじゃー！」

「ギヤアアアア!?! 髪がアアアア!?!」

髪をガンガン引かれ、俺の毛根がガンガン削られる。

「ラカンテメエエ!?! 髪の敵イイ!?!」

数本髪が抜けた為、ラカンを生け簪にする事にした。

「うおっ!?! あぶなっ!?! …… って、グベラアッ!?!」

ラカンの首元に回し蹴りが当たり、数十回転しながら飛んでいった。

「よくやったのじゃ!?! それにしても…… 酔ってしもうたわ」

そりゃ、かなりの速度で回し蹴りしたからね。

「ゴメンゴメン。…もう髪引っ張らないでくれよ、テオ?」

「む……。分かったのじゃ」

とか言ってたら、ナギ達が話し始めてた。

「連合に帝国……そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

（改めて考えるとそうだな。全く……世界に敵売るって……）

「じゃが……主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

まあ、最強のメンバーが集まってはいるよな……。
俺は魔法雑魚だけど。

「世界全てが敵——良いではないか。こちらの兵はたったの8人。だが最強の8人じゃ」

あ、ルナは数えないんだな。

まあ、戦闘は出来ないから当たり前と言えば当たり前か。

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士、ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

そういうナギは笑ってて、どこか楽しそうだった。

「いいぜ。俺の杖と翼。あんたに預けよう」

そう言って、騎士の礼？をしていた。

「うーん。強いヤツどんぐらいいるかなー……」

顎に手を添えながら、考えるのだった。

ネギま！・大戦編EP7 なんか皇女になつかれた。……ああ、髪が痛い（後妻

ジュン「どうも遅れてすいませんでした！」

迅「遅れたの一時間だろ？第一待ってるヤツなんていない」

ジュン「うつ……。そうだよねえ……orz。……………取り敢えず今回のゲストはテオでゝす……」

テオ「うむ。……………何だか空気が重いんじやが何でじゃ？」

ジュン「……………シャキーン！……………復活！」

迅「擬音を口で喋るな」

ドゴツー！

ジュン「そぼろっー！……………取り敢えず、呼んだんだから質問しまーす」

迅「超即再生!？」

ジュン「なんでテオは迅の肩に乗ったの？」

テオ「何と無く乗ってみたかったからじゃ！」

ジュン「何故に!？」

テオ「雰囲気的にこう……和んだのじゃ」

ジュン「恐るべし一級フラグ建築士！」

迅「何だその呼び名はアアアア!！」

バキッ!!

ジュン「あべしっ!!！」

バタッ……………。

テオ「やりすぎではないか？なんか色々変な方向に向いておるぞ？」

迅「大丈夫。さっきもすぐ治ったし」

ジュン「……………復活！」

迅、テオ「はやつ!？」

ジュン「驚いてないで取り敢えず締めよろしく」

迅「……………分かった。次回も見えてくれるとありがたい」

テオ「次もよろしくなのじゃ！」

ネギま!・大戦編EP8 ご都合主義って相当な力だと思っんだ。まあ……良い

今の候補は

真恋姫・董卓ルート

マジ恋

ゲームやってから

ゲットバ（マンガ読んでから）

Fate／extra↓Fate／stay nightで凜のサーヴァントorキャス狐のマスター

って感じです。

まだ候補を募集してます！

あと、今回は色々ご都合主義（悪い意味で）です。

それから6ヶ月が立った。

その間俺は、敵ボコったり、ルナと遊んだり、テオと遊んだり、タカミチの訓練と表しタカミチをいたぶったり、クルトの訓練と表しクルトをいたぶったり、二人とも訓練と表し二人ともいたぶったり、憂さ晴らしにラカンをボコったり、その仕返しでボコられたり（仕返しした）、アルにロリの素晴らしさを説かれたり、何と無く槍術の腕を上げたりしていた。

……で、現在は墓守り人の宮殿に来ている。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「嵐の前の静けさ…か、膝抱えてガチガチ震えてんじゃね？」

「後者だろ。ウハハハハ！」

ラカンが笑う。

ってか、流石にそれはねえだろ……。

（……………ん？　そういえば、俺が介入した事で何か変わるのか？……………
まあ、流れに身を任すか……………）

「ナギ殿！　帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

アリアドネーの人が言いに来た。

名前は……………えーと……………何だっけ？

……………いかな。

どうにも前世の知識が曖昧になってきた。

流れしか分からなくなってしまったな、この世界の知識は。

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

ナギがそう言った瞬間、念話が入った。

『神影迅。貴様に言っておくことがある』

（なんだ？）

『くれぐれも……………くれぐれもだ。あの造物主と闘おう等という気は起こすな。アレと戦うと言うのなら、俺は貴様の力を著しく下げなくてはいけなくなる』

（何故だ？）

『今の造物主は、こちらの世界のそこにいるナギ・スプリングフィールドが倒さなくてはいけない存在だ。……故に、貴様が闘うと言うのなら、造物主に勝てぬ程に貴様の力を抑えなくてはならない。話はそれだけだ。馬鹿な考えは起こすなよ』

そう言うだけ言ったら、即座に念話を切られた。

（全く……強いヤツと闘いたかったんだがな……）

そう考えに耽つてると……。

「おい！ 迅聞いてんのか？」

ナギに呼ばれ、意識が現実へと戻った。

「ん？ どうした？ 少し考えに耽っててな」

「迅でも考えんのか？」

ラカンが激しく酷いことを言う。

「当たり前だバカ。敵と一緒にうつかり……ナブリコロスゾ？」

「ヌツ……！？わ、悪かった」

笑顔でラカンのみに向けどす黒い殺気を放つとラカンは一瞬たじろぎ、その後謝った。

「で、何のようだったんだ？」

「こっちの嬢ちゃんがサインくれってよ。俺も書いたし、迅も書けよな？」

サイン？

「まあ、良いぞ？」

俺なんかのいるのか？
とか思いつつサインを書く。

「これで良いかな？」

「はっ、ハイ！ありがとうございます！」

と言ってサインを持って去っていった。

「迅って意外と達筆だな」

とかナギが字を見て感想を言っていた。
この間にアルや詠春がガトウと話してた。

「っと、とりあえず俺が狼煙の役を務めさせて貰うぜ」

「ああ、派手なの頼むぜ？」

とナギの要望。

……………難易度タケエ…………。

「とりあえず全力でやるさ。……………ハアアアアアア……………」

腕に気を溜め、それを圧縮し、更に気を溜めていく。
そして、溜め終わったソレを敵の中央に向けて放った。

「へっ！きたねえ花火だ」

某生え際がM字のサイヤ人の一言を言う。
威力は……真ん中の敵と右の敵が全部消し飛んだ。

「半年前まで気が使えなかったヤツとは思えないな……」

詠春が呆然としながら言う。

「と、とりあえず野郎ども！行くぜっ！！」

ナギは意外と早く復活し、そう言った。
ってか、『野郎ども』ってなんだか盗賊とか山賊とか海賊とかが使いそうだな。

で、とりあえず墓守り人の宮殿内に入り……

「やあ「千の呪文の男」「武神」また会ったね。これで何度目だい？僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

そう言うアーウィルンクスのお仲間の面々を見る。

イレギュラーのヤツは………いた。

なんか拳法家みたいなヤツがいる。

「俺はアイツをやる！」

ちなみに言うと、ルナは戦闘には参加出来ないため、テオの所にタカミチと共にいる。

「分かったぜ！」

ソイツは、気配を汲み取ったのか、場所を変える為に移動を始めた。

「初めまして「武神」殿。噂は予々（かねがね）聞いている。私は
リーハイミン 李海明。手合わせ願おう」

「何故そちら側にお前はいるんだ？」

コイツは、感覚的にどうにもアーウィルクス達のような感覚がない。

「おやおや。なんだ不躰に。俺がコチラにいる理由。ソレはただ一つ。「武神」と呼ばれし者と拳を交えて見たかったからだ」

「…………全く酔狂なヤツだ。良いぞ。拳を交えおうじゃないか。久しぶりに心の臓が煮えたぎるようだ。俺を退屈させるなよ？」

ソイツの言葉を聞き、俺はただ純粹にコイツと殴り合いたくなった。

「無論！」

目の前にいた李海明が一步踏み出すと同時に喉元近くに迄来る。俺はそれに肘蹴りを食らわせに掛かるが、李海明は後ろに退き、攻撃をよけた。

「縮地か。成程、その身のこなしに、先程の完璧な縮地。中々に強き武人だな」

「お褒めに預かり光栄だな」

「だが、その程度の人間なら幾人と倒した。まさかその程度とは言わないよな？」

そう言いながら近付き掌底を気を使わず撃ち込む。

「グッ……。流石「武神」。気が読めんとは」

「気は今は使っていない」

「嘗めておるのか？」

屈辱だと言わんばかりに俺を見る。

「なら、俺に気を使わせてみる。李海明」

「良いだろう。これならどうかかな？」

その瞬間、ヤツの気配が、姿が、気の流れが消え去る。

「……………これは…自然に溶け込んだか」

「左様。ならば、行かせてもらう」

「やれやれ。見えない相手と闘うなんて一体いつぶりだ？」

昔やったのはスナイパーだったが、今は武人。

遠くて見えない訳ではなく、近くだが存在を周りと同一化させている。

俺は、静かに目を閉じ、五感を最大限に張り詰める。

「……ふう………」

全ての音が止む。

周りでは戦闘が起きているのに、その場所のみがまるで隔離された空間のように音が無かった。

「……」

何分…いや何時間かもしれない。

ふと、何処からか風が吹き込んだ。

その音でさえ、この空間には異物のようで、雑音のように聞こえた。風が止まった瞬間、その瞬間僅かに風を切るかのような微弱な音が

聞こえた。

俺は、其処に回し蹴りを食らわす。
……が、その一撃は空を切る。

「もらった!」

李海明の声が響く。

その攻撃の結果……飛ばされたのは、李海明の方だった。

「……………フン……………」

「グッ……………何が起きた……………」

全く解せないという表情を顔に張り付け、李海明は膝を着いていた。

「解せないという顔をしているな。教えてやろう。確かに俺の回し蹴りは空を切った」

「ならば何故……………」

「簡単だ。お前には俺の二撃目が見えなかった。ただそれだけだ」

俺は回し蹴りの後、空中に足場を作り、そのまま、李海明の脇腹に蹴りを食らわしていた。

「クソ……勝てなかったのか……」

「そう言うな。お前が言った通り、俺は氣を使わされたよ。その点で言えば、俺の負けやも知れぬな」

「だが、負けは負けだ。さあ………殺れ」

そう言うが、俺はナギ達の元に向かい出す。

戦闘中、敵に背を見せる行為は危険と言わざるを得ないが、俺はヤツが攻撃してくると思えなかった。

ソレは、何と無くだがヤツが誇り高き武人であると感じ取ったからだろう。

「俺に情けをかける気か！」

「フン……。貴様とはもう一度戦いたい。ただ気まぐれにそう思っただけだ。俺を倒したければ、更に強くなり、且つ個人として来い。俺はいつでもお前の相手をしよう」

そうとだけ言い、俺は更に歩を進めた。
そして、ナギの所に着くと、アーウィルクスと共に撃ち抜かれた
丁度その瞬間だった。

「チッ…！ナギッ！」

ナギの下に即座に向かうと、造物主のあの一撃が来た。

「チッ…！間に合わん…！」

アーティファクトを出すにも、時間があまりに短く、俺は手で止め
に入った。

「クッ……！ぬおおっ…！」

何とか受け止めきれたが、俺の右腕全部と、右足の膝から下が消し
飛んだ。

「チィッ……！」

血がダクダクと流れる。
流石に手で抑えるのは無理があったか…………。

「待てコラてめえっ！」

ラカンが造物主に言う。
「ってか、アイツ両腕ねえじゃねえか…………。」

「任せなジャック」

「い、いけませんナギ！その身体では！」

ナギが立ち上がり、造物主に立ち向かおうとする。
…………勝てるのは分かってるが、なんだか痛々しくて出したくない
な…………。
仕方ない。

「アデアット。創造…………アスクレピオスの杖」

ギリシャ神話の医神の杖を創り出す。

「彼の者を癒せ『死者をも治す医神の杖（アスクレピオスの杖）』」

「迅なにを……って、迅大丈夫かよ!？」

「さっさと行け。治した意味が無いだろうが」

「ッ……!! 分かった。行ってくるぜ!」

そうして、ナギとゼクトは造物主の元に向かっていった。

「チッ……!! 目眩がしやがる…」

「出血し過ぎです迅!」

俺の周りは血の海と化しており、俺は血液不足で意識が保てなくなってきた。

「不味い……。全てを癒せ『死者をも治す医神の杖（アスクレピオスの杖）』」

と、また医神の宝具を発動させ、ラカンの腕を治し、アルの怪我を

治し、詠春の怪我を治し、俺の右腕、右足を治し、更に血液を補充させる。

「コレで……何とか大……丈夫……か………」

視界が歪む。

どうやら、血液を補充するには、あまりに遅すぎたみたいだ。

「「迅!?!」」

「オイ大丈夫か!?!」

「なさけ……ねえなあ……。つたく……。平……。和ボケだよ……。全
く………」

昔ならこんな事は無かったと思いながら、俺は薄れゆく意識を手放した。

意識を失う前の三人は、死に別れる者を見るかのようにだった。

(……………ああ、俺は死ぬのか……………?)

そんな事を思うのだった。

ネギま!・大戦編EP8 ご都合主義って相当な力だと思うんだ。まあ……良い

ジュン「よし終わった!次の世界に行くか」

迅「オイ待てコラ」

ジュン「何故今回倒れた人間がいるんだ?」

迅「ご都合主義だ」

ジュン「さいですか……」

迅「あんな後味悪い終わらせ方するつもりか?」

ジュン「アツハツハ。ダメ?」

迅「ダメに決まってるわボケが!!」

バキッ!!

ジュン「グヘッ！？……………しょうがない。後日談的に早回しで二話ほど入れるかね。その方が原作時に入りやすいし、エヴァとかと会ったときたいし」

迅「エヴァ？……………ああ、あのロリ吸血鬼か。お前ロリコンか？」

ジュン「ロリコンでは無いけど、エヴァは割と好きだぞ？テオは大人数の方が好きだけど」

迅「まさかテオを出したのは……………」

ジュン「そうだよ。ネギま編でのヒロインの一人だよ！」

迅「そうなのか」

ジュン「あ、割とフツ―。」

迅「聞きたいんだが、何故対魔力と自動再生がなかったんだ？」

ジュン「対魔力は俺から見てアレはA＋ランクぐらいあんじゃね？」

って思ったのと、自動再生はご都合主義だ！」

迅「死ねよお前」

ジュン「毎度だけど当たり方が酷いな!!」

迅「諦めろ」

ジュン「うう……。まあ、取り敢えず締めよろしく」

迅「……ああ、まだネギま編は少しでも続け。見苦しいトコが多いかも知れないが、見てくれると有難い」

ジュン「結構貶された……」

迅「それでは、次回もよろしく願いします！」

ネギま!・大戦編EP9 生きてた。けど、色んな意味で死んだ(前書き)

今の候補は

〽三票〽

Fate／extra↓Fate／staynight

〽二票〽

マジ恋

真恋姫、董卓ルート

〽一票〽

ゲットバ

ケンイチ

です。

まだ候補募集してます!

あと二話で終わらせるつもりなんでかなりグダグダかもしれません
……。

ネギま！・大戦編EP9 生きてた。けど、色んな意味で死んだ

俺が目を醒ますと其処は、あの神がいる場所……ではなく、ベッドの上だった。

「……は………」

俺は自分の体を見る。

腕………ある。足………ある。

異常は無いみたいだな。

「気を失ってたのか？ 全く……紛らわしいなアイツラ」

アル、詠春、ラカンの三人の顔を思い浮かべる。

（……………うん。殴りたくなってきた。よし殴ろう。殴らないとこの怒りは治まらない）

とか、思っていたら扉が開いた。

「看病しにきてやった……………ぞ」

テオだった。

テオは俺を見た後、固まった。

そりやもう其処だけ世界のスタンド使った並みに時が止まった。

「ザ・ワールド！時よ止まれ！」

何と無くデ○オ風に言ってみた。

あ、ちゃんと立って言ってる。

割ともう元気で立てたし。

「……………」

ぶわっ！

そんな擬音が聞こえんばかりに涙が出てきた。

で、それを見た俺は……

「え！？え！？ちょっ！？何事っ！？何事っ！？」

と、滅茶苦茶に狼狽していた。

俺はやはり女性に対する耐性が異様に低いようだ。

……………特に緊急時。

「な、何でも無いのじゃっ！」

「え！？じゃあ何で泣いてるの？」

「な、泣いてなんかおらぬ！！コレは心の汗じゃっ！！」

き、厳しい言い訳だ……。

でもそのおかげで、平常心を取り戻せた。

まあ、心配させてしまったと考えれば良いのかな？

「そうか。テオ。心配かけてすまなかったね」

テオの小さい体を抱き寄せる。

……………あれ？俺ってもしかして今、見た目的にロリコン？
……………ないない。ロリコンではない。多分きつとメイビー…………。

（あれ！？なんかロリコンな気がしてきたぞ！？どうした！？俺どうした！？）

アルのロリコン演説が俺の心の一部を蝕んでいたようで、俺は自分がロリコンか否か分からなくなっていた。

「迅は自分の事をもっと大事にするのじゃ！心配したのじゃぞ！」

「うん、すまなかったね。俺は戦場にただ一人でたった時の事を忘れていたよ。もう大丈夫。俺は油断も慢心も何もない」

その為には、昔の感覚を取り戻さないとな……………。
と、考えてたらまた戸が開いた。

「…………テオ。どうした……………の」

まさかの二度目、世界のスタンド使った並みに時間が止まった。
入ってきたのは…………ルナだ。

アハハハハ。

どうやら、両手に花というのになりそうだねー。

アッハッハッハッハ。

とか程よく壊れてきた俺は、そのままルナも抱き寄せた。

いやぁ、コレで誰か入ってきたら俺が泣かせたみたいだねえ。

いやいやアッハッハッハッハ。

流石にそれは無いさー。

と、思ってたのだが…………。

「迅！起きたのか！！………」

空気が凍る。

もうそのレベルは絶対零度並みだ。

半端無く空気が重い。

「よ、よおナギ。コレは色々あってこうなっちまって……」

「……………そうか」

ちよっ！？

何で無口なのナギ！？

君誤解してるよね！？

状況だけ見たよな！？

なあおい喋れゴラ！

誤解してたら八つ裂きにすんぞ！！

「なんだ。まあその……………ごゆっくり」

「ナギテメエエエエ！！」

全力で壊れてきた俺はナギに向かい全力で叫んだ。

叫んだら必ずアイツラも来ると分かっていたのに……。

因みに、二人はまだ俺の両腕のトコにいる。

両手に花だね。いや、状況的に笑い事じゃない。

……………治ってきた。

笑い事じゃないよこの状況。

死亡フラグな気がするよ（精神的な意味で）

「「迅！！大丈夫か（ですか）！！」」

はい来ちゃったよ。

終わった。もう俺の人生（弄られる的意味で）終わった……………。

「よ、よお。元気そうで何よりだな三人とも」

いつのまにか三人を殴るといふ気合いは何処かに消えていた。

「死んじまったかと思ったぜ。まあ、見たところ元気そうで何よりだなww」

「目が醒めてすぐその状況とは……ww。まあ、元気そうで良かったぞ」

二人とも俺を見て笑ってやがる。
やっぱりあの二人ぶん殴る。
……………ってアルは？

「……………」

無言で近付いてくるアル。
なにそれ怖い…………。

「あなたもようやく少女の素晴らしさが分かってくれましたか…」

手を置き、笑いながらそう言ってきた。

「…なんでさ」

つい某正義の味方の言葉を口にしてしまった。
周りの奴らは揃って合掌してやがる。

そうして、俺の人生（弄られる的意味で）は終わった。

……その後、俺は式典みたいなヤツに出させられた。
そこでテオに小声で「後で妾の所に来い」って言われた。
一体なんぞ？

…で、今は酒場で色々やってる。

「アル。なんで式典出なかったんだ？」

「私上がり症なもので……」

「いや、嘘だろ。大方出るの面倒くさいとかそんなのだろ？」

「全く私をどんな扱いしてるんですか……」

なんかアルに溜め息を疲れた。
違うのか？

「……そういえば、あなたのファンクラブがあるみたいですよ？」

「なんだそりゃ。俺なんぞのファンとか随分物好きなヤツがいるんだな」

「ならその物好きがこの世界に8万人もいることになりますね」

………はい？

耳を疑った。

8万？ いやいや無いって。

「いやいや、冗談キツイぜアル」

「いえ、なんでも発足一週間にして8万人を越えたらいいですよ。さっき8万台の会員証を見ましたから。それにまだ増えてるらしいですね」

………社会的にも死んでた……。

あ、鬱になりそう。

「会員一番って誰だ？ ちょっとお灸据えてくるわ」

もう即座に解体させるしか無いだろ！

「……レイナさんですよ」

……無理だ。

お灸なんて据えられない……。

「に、二番は？」

二番を殺れば解体が……

「第三皇女…テオドラですよ」

無理だった……。

あの二人はアレか？

俺を社会的に抹消したいのか？

「ダ、ダメだ……」

orzのポーズをとり、この先の未来を絶望していると、異常が起きた。

俺らは即時に色々しながら移動し、船に乗り逃げ出した。

「魔力消失現象……か……」

船の中で俺は外を見ながら呟いた。

「なあ、アルよ。魔力を使わなきゃ移動は出来るよな」

「ええ。まあ、そうですね。何でそんな事聞くんです？」

「ま、俺はこういうのは見逃せなくてな」

と言い、俺は被害を減らす為に外に飛び出した。

「迅!？」

アルが珍しく狼狽えていたが、それも聞こえないかのように、外に飛び出した。

それから俺は、岩を消し飛ばしたり、貧民島を下から支え、被害が無いように降ろしたりしていた。

そのお陰か、どうやら原作よりも犠牲者が圧倒的に減り、人口の0.1%を下回ったらしい。

更に、俺は休まず働き、土地を開拓し、難民の数十万人をその土地に住ませたりもした。

「貴方には感謝していますよ」

俺は今、元老院議事堂にいる。

「だが犠牲者が出た。元はと言えば、下らない理由で戦争を始めた貴様等に原因の一端があると考えるが？」

前の世界でもそうだ。

本当に下らない原因を元に人は争いを始める。
全く上の奴等は何を考えてるかは分からない。

「確かにそうですね。真に申し訳無い気持ちですよ」

「なら、言葉ではなく行動で示せ。難民の数十万人は此方が開拓した土地に居住した。他の民はそちらの方で難民を受け入れろ」

「……………検討しますよ。もう帰っても結構ですよ」

「フン……。言われなくても帰る」

そう言って元老院議事堂から出た。

（……………次は……………京都にでも行こうかなー……………）

久しぶりに日本に帰りたくなった為、俺は日本に帰る事に決めるのだった。

ネギま!・大戦編EP9 生きてた。けど、色んな意味で死んだ(後書き)

ジュン「ぴ、PVが50000を超えた……」

迅「なにっ!？」

ジュン「意外だ……」

迅「確かに……」

ジュン「まともに連載してから約一週間……。PVが50000行くととは思わなかったよ」

迅「他にやってるヤツはどんくらいなんだ？」

ジュン「え?……内緒です♪」

迅「キモいからくたばれ!」

バキッ!

ジュン「だいなむっ!?……復活!」

迅「言えゴラ」

ジュン「……………はい。えっと……………○○○ーと○○○○ーです」伏せ字
すいません

迅「な、なんだとっ!?!」

ジュン「あ!で、でもアレは24部門やってるからだし、もう一つは18部門やってるし……。いつかはそんぐらい行ってくて!」

迅「そうかよ」

ジュン「あ!そうだ!次そのお二人連れてくつか?」

迅「他作のヤツを呼び出すのか?」

ジュン「そゆことゝ。一人は危険かもねゝ」

迅「危険なヤツを呼ぶのかよ……」

ジュン「YES! ……あ! 絞めよろしく」

迅「これか？」

ジュン「ちよっ……。ギブギブ。チョーキングじゃないって。締め
！」

迅「あつ。そっちか。次でネギま編は一度終わりだが、見てくれる
と有難い。次回もよろしくお願いします！」

ジュン「……ちよっ、チョーキング止めて……」ガクツ…

ネギま!・大戦編END 金髪ロリ吸血鬼がプチストーカーとなった!それと、

今の候補は

〽四票〽

マジ恋

〽三票〽

Fate／extra↓Fate／staynight

真恋姫、董卓ルート

〽二票〽

ゲットバ

〽一票〽

ケンイチ

です。

まだ候補募集してます!

……………さっきネットで見たマジ恋の値段に絶望した!

俺の財布の中の英世さんが逆立ちしても敵わねえ!

フフフ…。財布の中の英世さん達が咽び泣く情景が思い浮かんでしまったぜ……………。

ネギま!・大戦編END 金髪ロリ吸血鬼がプチストーカーとなった!それと、

く約一年と七ヶ月後く

アリカ姫が収監されてからもう一年と七ヶ月も経った。

その間、俺は最初の一年はテオのところに、七ヶ月は戦いの勘を完全に元通りにするために紛争地域を渡り続け、その後、ずっと行きたかった京都に行き、その後ブラブラしていた。

ブラブラしていたのは良いんだが……。

「いつまでついてくんの?」

「貴様が私のモノになるまでだ」

「じゃあ半永久的だな」

「そうか……って何故だ!?!」

何故だか俺は、原作キャラのエヴァに軽くストーカーされてた。

ってか、この役はナギだろ…………。

「だって俺、真祖の吸血鬼だし。不老不死だから半永久的にストーカーしねえとな」

「ストーカーじゃない!!……………って貴様もか!?!」

ストーカーを否定した後、真祖の吸血鬼という事実には驚いてた。ってか、それじゃあの時俺、死ぬワケ無かったんじゃないか？

「そっそ。同類なんだな」

とか言っただけでまた歩き出す。

くそれから四ヶ月く

「もう四ヶ月だぜくエヴァく?」

「貴様が私のモノになるまで私は諦めん!!」

最初の頃から比べて、エヴァは更に積極的になってた。

現在も意気揚々と力説してるし。
身体大きくしてるし。
服装がえらく前衛的だし。

「えゝ。何で俺なんでせう？」

「それは私が貴様を気に入ったからだ！」

眼前まで顔を近付けてくる。
ちょっ！近っ！？

「俺『武神』だぞ？善人の英雄様は嫌いじゃないのかね？」

「それとこれでは話は別だ！！」

ちょっ！更に近っ！？

取り敢えず、距離を取る。

「もうそろアリカ姫助けにいかないといけないんだけどさゝ」

「無視すれば良い」

酷くないかソレ？

念話とかルナから来てたんだが？

あと、十五日で行かなきゃいけないから、今のうちにいかないと間に合わないんだよ。

……まあ本気で行けば三時間くらいで行けるだろうけどさ。

「無視はない」

「むっ……！なら終わったら直ぐに来い」

「俺がいつエヴァのモノになるつつった？」

「ならないのか！？」

何でか驚きを隠しきれないエヴァ。

ちょうどその時に例の神から念話が入った。

『神影迅。お前がこの世界にいられる猶予は後十五日だ』

（それはアリカ姫を救ったら直ぐに俺は消えると言うことか？）

『そういうことになるな』

（はぁ……。まあ元から俺は色々な世界を回る約束だったからな。
悲しいが受け入れよう）

『話はそれだけだ。残り十五日楽しむが良い』

そうとだけ言うと言話を切られた。
毎回一方的だな……。

「どうした？」

念話を終えると、すぐ目の前にエヴァの顔があった。
俺は即座に体を後ろに退く。

「エヴァ！ 毎度だが近いぞ！」

「良いだろう？」

「……はぁ……」

思わず溜め息を吐いてしまった。

「どうしたんだ」

「取り敢えず俺はもうアリカ姫助けに行くからな」

「なっ！？ちょっと待て！」

そう言うのを無視して、俺は即座にその場から離れた。

因みにいうと、戦いの勘を取り戻したら、移動も効率的に更に移動が手早くなった。

やっぱり生涯現役でないといけないな。

〵アリカ姫救出当日〵

俺は今、この前敵が使ってた周りと同化するヤツを使って、静観している。

アリカ姫はナギが助けるんだそうだ。

「ま、最後ぐらいはアイツラに花を添えねえとな」

何というか……別れ行く前の礼儀と言うヤツか。

アイツラを祝福してやろうと思った。

アイツラってのは、勿論アリカ姫とナギの二人だ。

少し感慨に浸っている間に、ラカンや詠春、アルにガトウが出ていた。

……俺も出るか。

「お前ら覚悟は出来たか」

「なっ！？武神、神影迅！？」

久しぶりの戦いだ……。

悪いが本気で行かせてもらおう。

「お前らの武力がいくらあろうとも……肩慣らし程度だ」

「ぐっ……ほざきおって！反逆者を捕らえよ！」

「おおっとやるのか？いいのかよその程度の戦力で」

ラカンが言う。

まあ、全然足りないのは確かだよな。

「フフ……その程度の戦力だと？ 愚か者が。このイベントの警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを……」

「だからその程度の戦力で良いのかって聞いてんだよ」

全員臨戦態勢になりながら言う。
勿論俺もだ。

「なっ…なにっ!？」

「行くぞ!」

俺は、前列の奴らに蹴りを食らわす。
そのまま蹴った足で地面を踏み抜き、全力の後ろ回し蹴りを放つ。

「…………マジか…」

俺がやった回し蹴りは真空波を作り、一気に後ろのヤツも飛ばされた。

真空波って事は音の速度を越えたのか、俺の足は。

「さて……開幕だ」

全身からあらゆる暗器を四方八方に飛ばす。

その数は今や数百万を軽く凌駕しているだろう。

圧倒的質量が、まるで弾幕のように飛ぶ。

どこにこれだけの量が入るのか、本当に疑問だ。

で、俺が暗器を四方八方に放ったので、ラカン達は速攻で飛び退いた。

………ついでに言うと、銃は放ってない。

「あぶねえだろうが迅!!」

「ワリイワリイ。久し振りの戦いで加減が出来なくてな」

今の暗器の一撃で、数十キロにいるらしき精鋭部隊は全部倒れてしまった。

「お? もう終わりかよ」

「迅は一人で軍隊以上の火力がありますね」

「お？褒めてくれてありがとうよ」

「皮肉で言ったのですが……」

と、アルに苦笑されてると、アリカ姫とナギが戻ってきた。

「よ。お二人さん。おめでとう。お前らのガキの顔が見れねえのは残念だが、まあ幸せになってくれや」

「？ありがとうよ。って何でそんな事を言うんだ？」

とか言っていると、何故だかルナとテオが来た。

「……迅」

「迅！」

「は？何でお前らも来たんだ？」

別れ無しで去ろうと思ったんだが……。

「…………嫌な…予感がした」

「ははっ。そんな理由で来たのか」

軽口で笑いながら言うが、内心驚きまくっている。

「そうそう。ナギにそんな事言った理由だが……こういう事だ」

俺はいつの間にか消えていた右腕を前に出す。

「「「「！？」」」」」

全員がその光景に驚く。

「ま、この世界に今いれる期限が今までってワケだ」

もう足の先も消えてきていた。

「ナギ、アリカ姫。苦しい事もあるかも知れねえが幸せになれよ?」

「あ、ああ」

「う、うむ」

ナギとアリカ姫の二人が動揺しながらも頷く。

「アル、ラカン、詠春、ガトウ。ありがとう」

「はい。それでは」

「ああ。またな」

とか、口々に言う。

「タカミチ、クルト。強くなれ。心も身体もな」

「…はい！」

「良い返事だ」

タカミチとクルトの二人には少し涙が見えた。

「ルナ、テオ。二人とも元気にな」

「「……」」

無言で泣いてる二人。

「せめて……笑ってくれ」

二人の頭を撫でながら言う。

「……分かった」

「……またの」

最後に二人は笑顔で返してくれた。

「よし、良い笑顔だ」

もう俺の身体は残りは胴体とあと少しになっていた。

「みんな……ホントにありがとう。いずれまた会おう」

最後に俺もできる限りの笑顔でみんなを見る。
そして、俺はこの世界から消えた……。

ネギま!・大戦編END 金髪ロリ吸血鬼がプチストーカーとなった!それと、

ジュン「ヤッホー。今回は前回の有言実行さあ」

迅「マジで連れてきたのか？」

ジュン「おうよ!挨拶よろ!」

ルーク「ネギまのアレから来たルーク・バルクだ。まあよろしくー」

識「龍郷識だ」

帝「俺様は神埼帝だ!」

ジュン「ちなみに、上の二人は、めだかボックスの世界の人達です」

ルーク「ま、迅は割と仲間っぽいな。ついでだから通り名的モン教えてくんね?」

迅「俺か？俺は『武神』だが？」

ルーク「いいなー。俺なんか『破壊神』だぜ？」

迅「色々可哀想だな」

ルーク「そう言うなって。どうだ？お前女の子周りにいる？」

迅「んー。周りには、ルナやらテオがいるかな」

ルーク「あゝ。あのお転婆姫ねー。ちなみに俺は原作キャラでは、武道四天王とエヴァ&茶々丸と仮契約してるぜ！」

迅「…………ハーレムだな」

ルーク「フッフッフ！素晴らしからう」

帝「俺様を呼んだ理由はなんだ？下らぬ用事なら、俺様も用事があるから帰るぞ？」

識「下らねエ事なンかに参加させてンじゃねエよこのゴミが」

ジュン「お前は激しく口ワリイな！」

識「うッせエ視界に入ンなこのクズ」

ジュン「なら帰ればオツケー！」

識「じゃあな」

帝「俺様も退散させてもらおうとしよう」

ジュン「あちゃー。二人帰っちゃったよ。ルークは……迅と談笑してっし」

ルーク「ん？時間なのか？」

ジュン「おう」

ルーク「そうか。なら帰るぞ？じゃあな、迅」

迅「おう。またな、
ルーク」

ジュン「締めよう」

迅「オツケー！次回もよろしく
お願いします！」

ネギま編終了時ステータス（前書き）

今の候補は

〽七票〽

真恋姫、董卓ルート

〽四票〽

マジ恋

F a t e / e x t r a ↓ F a t e / s t a y n i g h t

〽二票〽

ゲットバ

ケンイチ

と、こんな感じになりました。

恋姫の追い上げハンパねえ……。

一回やった事ありますけど、結構キャラ崩壊したんで挫折したんですよねー…。

まあ、やるんだったらそこそこに頑張ります。

あと、まだ一応募集してます。

今日中なら受け付けますんで、書いてくれると有難いです。

ネギま編終了時ステータス

とりあえず、ネギま編が終わったので、現状をステータスで表します。

〔F a t e風ステータス〕

名前 神影迅

身長 184?

体重 71?

年齢 16歳(半永久的)

特技 料理、剣術、拳術、銃器の扱い、暗器

好きなもの 動物、手合わせ、調理

嫌いなもの なんだかいけ好かないヤツ、自分が作った料理を残すアホ

筋力 E X

魔力 E X

幸運 C (30)

耐久 A ++ (100 ~ 150)

敏捷 E X

宝具 × (無し)

保有スキル

対魔力 A + (50 ~ 100) : 対魔法攻撃にとっても強く、A + ランク以上の魔法は受け付けない。大体の魔法は聞くことが無い。

フラグ建築士 E X : 一級フラグ建築士の称号を取れる程に誰彼構わずフラグを立てる。そのフラグ建築士としての力は某幻想殺し並み。

魔法才能 F (0) : 魔法を扱う才能が皆無。魔法と魔術は別物で、魔術の方の才能はやったことが無いので不明。

対女性・子供 F (0) : 女性・子供に対しての免疫が皆無で、異様に甘い。女性や子供と戦う場合は、大体が4ランクほどパラメーターが下がる。逆に、女性の為に戦う場合は、パラメーターが上がる。ただ、知り合いの子供には厳しい場合がある。

ご都合主義 C(30) : 物語の展開上、能力に多大な制限等がかかる。いくら強くても、ご都合主義の力によって負ける場合がある。たまにだが、良い方向に働く場合がある。

気配 A++(100~150) : 気配が和やかな度合い。此処まで来ると、異様に動物になつかれたり、近くにいただけでリラックス効果があったり、男嫌いにも嫌われない。稀に一目惚れという特殊イベントが発生する。

自主再生 EX : 勝手に傷を回復し、元通りになる力。このレベルまでくると、致命傷をおっても、一瞬で無傷になる。真性の化物。

気孔系 EX : 気の扱いが天才的。気を扱う関連なら、見るだけで自分も出来るようになる。

料理人 EX : 有り得ない程に料理が上手い。それを食べた者は、食べただけで天にも昇れる程の至福を感じる。

（ご都合主義発生時ステータス）

筋力 D(20)

魔力 F(0)

幸運 F(0)

耐久 E(10)

敏捷 E (10)

宝具 × (無し)

〔対女性・子供発生時〕

筋力 A (50)

魔力 EX

幸運 F (0)

耐久 B (30)

敏捷 A (40)

宝具 × (無し)

と、今はこんな感じです。
……弱点増えたな……。……。

ネギま編終了時ステータス（後書き）

ジュン「お前ステータス可哀想だな」

迅「書いたテメエが言うな」

ジュン「スキル発動時、幸運Fだしな。幸運Fとか、戦ってる時に転んだりしてポックリ逝ったり、攻撃が何故か当たらないだろ」

迅「スキル発動したら、俺死んだな……」

ジュン「大丈夫。近くに女性いたらステータス下がらねえから」

迅「常に女性を侍らせろと？」

ジュン「そっそ」

迅「いや、無理だろ」

ジュン「大丈夫！何せお前は一級フラグ建築士だから！」

迅「また言うか貴様はアアアア！！」

バキィッ！

ジュン「ぴげばっ！？」

迅「ご都合主義の方はどうすんだ？」

ジュン「……チーン……」

迅「起きろ」

ガスッ！

ジュン「そどむっ！？……回避不可……まあ、彼処まで下がんのは稀だって」

迅「チッ……」

ジュン「その舌打ちなんだっ!？」

迅「ああん？」

ジュン「す、すいませんでした……」

迅「チツ……」

ジュン「機嫌悪くてコワイ……」

迅「ってか、気配なんていつついた？」

ジュン「いや、元からあったぜ? 現に最初ルナちゃんが一目惚れしたじゃん」

迅「は? そうなのか？」

ジュン「そうじゃねえと見知らぬ男になんか付いてかねえって」

迅「ほお。そうなのか」

ジュン「ま、とりあえず今回は終いだ。締め頼むよ」

迅「オッケー。次回からは第二章だ。見てくれると有難い。それでは次回また会おう」

恋姫編・第壱章 来て早々原作破壊！それが俺クオリティー！（前書き）

書いたのは良いけど……こんな感じで良いかなー……。結構久し振りに書いたので、キャラが合ってるか分からない……。

ああ。パワーバランス崩れまくりだ。どうしょ。

迅のパワーは大軍兵器以上なんだが……。

恋姫編・第壹章 来て早々原作破壊！それが俺クオリティー！

俺は空間の狭間……なんだか見た目が歪んだよく分からない場所に漂っていた。

「うう……。吐きそう……」

空間酔いと言っても言うべきか。

それが俺の今の状況だ。

車でも飛行機でも酔った事は無かったが、流石に未知なモノへの耐性は無かったらしい。

「まだ神のトコにつかねえのかよ……」

そう愚痴を言っていると、少しの光が見えた。

「や、やっとか……。うえ……」

気分が優れない状況になりつつも、俺は光が見えた事に嬉しさを覚えた。
が………

「ぬおっ！？吐く！吐くから！？なんだこりやアアアアア！？」

何故だか急に横に引っ張られた俺は、そのままかなりの速さで横に引っ張られた。

そして、引っ張られるのが止まると……。

「どこだ此処……………」

視界が晴れた其処は戦場だった。

『神影迅。どうやら、世界の引力に引っ張られたようだな』

（此処は何処の世界だ？）

『其処は……恋姫無双というゲームの世界だ』

恋姫無双……………。

三国志の武将達が女性化しているというギャルゲ。

真名という変わった設定があり、その真名を許してない者が喋るならば、それは万死に値する。

また、張角や董卓が史実とは違う世界。

コレは俺も何度かやったことがある。

蜀ルートや、呉ルート、魏ルートを行った。

主人公の一刀が現代から来たにも関わらず、その知識を遺憾無く完璧に使わない事に苛立ったものだ。

それに、一刀が弱くて腹がたった。

俺ならば、賊程度の敵など雑作もないと本気で思ったものだ。

（理解した。では、俺はこの世界でしばらく楽しませてもらおう）

『では、楽しむがいい。刻限時にまた呼ぼう』

そう言って、念話は切られた。

とりあえず、辺りを見渡すことにした。

周りには黄色い布を被った兵や、魏と思わしき兵隊が多数……。

真ん中ら辺には本拠地らしき場所が見える。

（……………ああ、コレって黄巾党殲滅戦だ。仕方無い。今回は、張三姉妹を救う事としようか）

どっちにしろ曹操達が、張三姉妹を救うのだが、それでは原作通りでつまらない。

よって、流れを変える為に俺は俺自らの手で張三姉妹を救う事に決めた。

「さて、仮契約カードは使えるかな？」

カードを見ると、どうやら変化も無く使えるようだった。
ネギまの世界ともきっちりリンクは繋がっているようだ。

「アデアット。偉大なる神々の記憶」
マグナ・デウス・メモリア

前回、俺は大体の暗器を惜しみ無く使ってしまった。

だから、今回はコレを使って戦う事に決めた。

拳だけでいくのでも構わないが、アレでは流石に被害が大きすぎる。
下手したら、この場で曹操を倒してしまいかねない。

それは非常に不味い。

どれぐらい不味いかって言われれば、とりあえず不味いと言いかない
様がない。

「ま、とりあえず行きますか」

周りの奴らは何故か呆けていたが（二刀的現れ方をしたのか？）と
りあえず高く飛び上がった。

「創造……木槌」

今回は殺傷能力の無い（威力的に何でも殺傷能力満載だが）木槌を創り出す。

「一発粉碎！」

とか、気分で掛け声？をし、敵の密集地に撃ち込む。
因みに、死傷者はいないようにしてある。
……………多分。

「粉碎！玉砕！大喝采！」

どっかの某社長殿の掛け声をパクる。
ってか、人が面白いくらいに飛んでく。
ハッハッハ！人がまるでゴミのようだ！（ム〇カ風）

「……あ。そういえば、一刀は何処にいるのか？……ま、その内分
かるかな？」

とか、人を飛ばしながら思った。

（一刀side）

俺は、華琳に連れられ黄巾党討伐の戦に来ていた。
なんか、華琳が俺に自分の軍の強さを見せてくれるらしい。
その筈だったんだが……。

「華琳様！！」

秋蘭が慌てて走ってきた。

珍しいな。秋蘭がこんなに慌てるなんて…。

「どうしたのかしら秋蘭？」

「大変です！外を見てください！」

「分かったわ」

俺も華琳の後に着いていつてみた。
すると……

『粉碎！玉砕！大喝采！』

何故だか、某社長的叫びをしながら、木製の棒を殴ってるヤツが空中にいた。

って、何で遊○王!？

アイツ現代から来たのか!？

「なんなのよこれは…」

華琳が呆然と言っていた。

ソイツが殴った棒が地面に当たると、その風で人がどんどん飛んできた。

敵味方関係無しらしい。

「いやいや、どんだけチートなんだよ……」

ついそんな事を呆れ気味に言ってしまった……。

～END～

「あ、張三姉妹を救いに行くんだった」

そう思い出して、俺は速攻で黄巾党の本拠地？に向かった。

で、着くとやっぱり張三姉妹がいた。

「こんにちはー」

「こんにちは」

軽く挨拶したら張角に普通に挨拶し返された。

あ、この子状況判断出来てないや。

「ちょっと天和姉さん！誰か分からない人と喋るより早く逃げないと！……って、え？」

自分で言って固まる張梁。

「……………敵!？」

「違う違う。君らを助けに来たんだ」

「ありがとう」

張角が笑いながら言う。

……緊迫感ねえ……。

って張宝は……？

固まっていた。何故に？

「ってワケで、取り敢えず俺に掴まってくんない？」

「……何で？」

張梁が冷静さを取り戻し、聞いてきた。

「蹴り飛んでくから」

「……え？」

なに言ってるのこの人？

みたいな顔で張梁は俺を見てきた。

ハッハッハ……。

ああ、精神的に来るわコレは……。

「ええい！強行だ！」

「きゃっ！？」

「えっ！？」

固まっていた張宝と張角と張梁を脇に抱え、俺は地面を踏み抜いた。

「「「きゃあああああ！？」」」

実に女の子らしい悲鳴が鳴り響く。

まあそりゃ空中跳んでたら驚くよな？

「一気に戦線離脱すんぞ？」

そう言いながら、気で足場を作ってぴよんぴよん飛ぶ。

「な」

「な？」

「何で跳んでんのよー!？」

さっきまで固まっていた張宝がいきなりの状況?に驚き、叫んでいた。

「わっ! ちょっ! 暴れんなって!」

張宝がバタバタと手を動かし、暴れた。

「あ…」

スルツと張宝の体が俺の脇から落ちる。

「きゃあああああ!」

「ちいちゃん!？」

「ちい姉さん!？」

「しまった!」

俺は即座に降下し、張宝の腕を掴む。
因みに、張角と張梁はとっさに片方に纏めておいた。

「危な……。大丈夫だったか張宝？」

「う、うん。大丈夫……」

怖かったからか若干半泣き状態で、勢いも無くなった張宝を見て少し……。いや、かなり罪悪感を覚えた。

「まあ、あと少しだけじっとしててな？もうすぐ戦線離脱するからさ」

と、言いながらも気で足場を作って、一気に踏み抜いて飛ぶ。

「「「きゃああああ！」「」」

速さ的には、大体ジェットコースターよりも速いので、三人とも悲鳴を上げる。

「も、もうちょっと遅く……」

誰が言ってるかは分からないけど、三人のうちの誰かが小声で言う。

「うーん。あと五秒待ってな？すぐ着くからさ」

とか言って更にスピードを上げる。
もう三人とも叫びっぱなしだ。

……で、五秒経ちようやく戦場から離脱した。

「着いたぞ？」

返事無しで三人ともぐったりしていた。

「やり過ぎた……」

とか言いながら、俺は取り敢えず暗器の在庫を貯める事にした。

くそれから一時間く

暗器を延々と貯め続けていると、ようやく張角達が起きた気配がした。

「ようやく起きたみたいだな。気分はどうだ？」

「大丈夫ね」

「そうか。で、これからどうするんだ？どっちにしろ一定期間は身を隠さないと駄目だと思うぞ？」

「確かにほとぼりが冷めるまで活動は休止しないといけないわね…」

張梁が残念そうな顔をする。

「まあ、ある程度ほとぼりが冷めたら、また活動出来るはずだよ。て、君達はこれからどうするんだ？」

「あなたはどうするの？」

「俺か？俺は……洛陽かな？まあ、場所分かんないから当てずっぽうになるだろうけど」

董卓が負ける運命を打破してやるぜ！

とか思いながらも、道が分からないことに気付いて少し項垂れた。

「場所分かんないの？」

横にいた張宝が聞いてきた。

「いやー、この世界に来たばかりかだね。右も左も分かんないんだー」

そう言ったら、張宝と張梁に変なヤツを見る目で見られた。

張角は……「そうなんだあ」とか言ってる。

「いや、本当だって！俺は元々いた世界から此方に来たんだよ！」

「証拠とかありますか？」

張梁に聞かれた。

うーん。

証拠……。アレかな？

「アベアット」

俺の手元に自分のカードが現れる。

「なにこれー？」

いつの間にか張角が俺の仮契約カードが見に来た。

「どうやって出したのよ？」

「いや、普通に？……アデアット」

「わ！消えたよちいちゃん！」

とか言って、張角ははしゃいでいた。

「……で、理解できたかな？」

「分かりました」

どうやら、二人とも認めてくれたらしい。

「アベアット」

「わぁー。また出てきたー！」

なんか目を輝かせている張角。
端から見たらコレって手品みたいなのか？

「んじゃ、取り敢えず自己紹介するよ。俺は神影迅。真名とかは無
いんだ」

「真名がない？」

「さっきも言ったけど、違う世界から来たからねー」

「そうなのー。私は張梁。真名は人和です」

「ちいは張宝。真名は地和だよー」

「張角で真名は天和だよー！」

全員麻雀の役の名前だー！

とか、そんな事を思いながら俺は名前を覚えた。

「真名いいのか？」

「良いんですよ。命の恩人なんですから」

「んじゃ、よろしく天和、地和、人和」

と、挨拶すると一言ずつ返してくれた。

……あ、本題。

「で、天和達はどうするんだ？」

「私も迅についてく」

「あ！ちいも行く！」

「なら、私も行きます」

と、結果的に三人とも行くことになった。

「よし、なら洛陽に行くぞー！」

と、意気揚々と歩き始めたんだけど……。

「もう歩けな〜い！」

「ちいも疲れたー！」

との二人の我が儘お嬢様の言葉。

「そうだー！ 迅おぶって〜」

天和がビツクリ発言を繰り返す。

「いやいや、流石にそれは出来ねえって……。……仕方無いな
ー……」

そう言ったら、二人は目を輝かせた。

「アデアット。創造……ヴィマーナ」

俺は仕方無く偉大なる神々の記憶マダナ・デウス・メモリアを使って、空中移動宝具を創り出す。

このヴィマーナは某金ぴか王のとは違って、船ではない。
デルタ翼型の飛行船みたいな感じだ。

「ほら、我が儘お嬢様達。乗りんしゃい」

「うゝいまーなって言うの？」

かなり発音が違う気がするが、ここは穏便に無視しよう。

「そっそ。空を飛ぶやつだから」

「あんなに速くはない？」

…………俺の移動のこと？

「ああ。ゆっくりだからさ」

「じゃあ乗るー!」

とか言っただけで二人とも乗った。

「よし、行こうか。人和も行くぞ?」

「ええ」

って感じで乗り、俺たちは移動を始めた。
……で、しばらく経ち……。

「偽名を考えよう!!」

「え?」

俺が急に言い出した事に三人とも何事かと驚いていた。

「俺の偽名！こっちの世界っぽい名前を！」

「ちい思い付いた！」

「地和。どうぞ！」

「超迅！」

「却下！なんじゃその名は！？」

いきなり爆弾な名前に速攻で拒否をする。

「考えたー！」

「天和。どうぞ！」

「迅影！」

「却下！捻り無し！」

瞬間で次の答えも却下する。

二人は捻り無しとか言われ、軽く落ち込んでいた。

「はい」

「人和。どうぞ！」

「王偉なんてどう？」

「採用！」

「「ええ」」

一番マシな名前が来たので即採用にしてみた。
ってか、名前の威風ハンパねえ。

「じゃあ、今からしばらく俺の名前は王偉。字は……守義で、真名は迅な」

なんとなく即興で考えた字を言い、また洛陽に向け、フラリと移動し出すのだった。

ジュン「昨日は更新し損ねたー！」

迅「なんでだ？」

ジュン「いやいや、久し振りに書いたからキャラ分からず、パワーバランスを考えて頭が痛くなってたからさー」

迅「何で頭が痛くなるんだ？」

ジュン「力の表書いてやろうか？こんな感じだぞ」

迅「>>>越えられない壁>>>>>>三國全土

ジュン「簡単に言えばこんな感じだぞ？」

迅「何故に!？」

ジュン「いや、お前拳だと地形変えられるし。更に言えば、隠密スキルもあるし、暗器も一人で百万の軍勢に相当。パワーバランス一人でガタガタだぜ？」

迅「大分どうしようもねえな。流石にこれは頭が痛くなるわ」

ジュン「分かってくれたか！ああ。迅手に入れただけで戦争に勝てるって色々アレだよなー」

迅「俺が一人で三國全土と戦り合うってのは？」

ジュン「二話内で全部倒しきるから無理」

迅「どうすりゃいいんだ？」

ジュン「だからリミッター付けたんだけどね」

迅「ああ、アレか」

ジュン「そうそれ。って、そろそろ締め頼むぜ？」

迅「何だかグダグダになりそうだが、次回もよろしく頼む」

恋姫編・第弐章 フラリ料理人旅wwってか敵よええ（前書き）

ぬううう……。

熱がキツイ…。

董卓ルート入るのは多分あと二話くらいですかね…。

恋姫編・第弐章 フラリ料理人旅wwってか敵よええ

ヴィマーナでしばらく移動していた俺達だったが、昼飯の時間くらいになったので、近くの街に降り立った。

「なあ、人和。路銀ってあるか？」

「少しだけなら……」

見ると、どれぐらいかは分からないが、まあ一日二日程度な量の路銀があった。

「うーん。なら、俺は少し出稼ぎしてくるかな」

「私達はどうしてれば良いですか？」

「うーん。宿にいるか、観光でもしていると良いよ」

「じゃあ、観光してるー！」

天和が張り切りながら言った。
随分楽しそうだなー……。。

「じゃ、取り敢えず解散！また後で集まろう！」

「分かりました」

と、人和と会話し、取り敢えずバイト出来そうな所を探す。

「うーん……」

色々探した結果、俺は取り敢えず料亭にバイトする事にした。

「すみませーん！」

「おう！なんだい坊や！」

奥から威勢の良いおばちゃんが出てきた。

「俺を料理人として、ちと雇ってくれないか？」

「……腕に自信はあるのかい？」

「おうよ！」

「なら、試験だよ！」

「受けて立つぜ！」

………という流れで俺の料理試験イベントが発生したワケだ。
で、結果はもちろん……。

「う、美味い！！」

というのを目を見開きながら言われた。

………おばちゃんマジで目がこええ………。

「採用？不採用？」

「もちろん採用だよ！むしろ此方からお願いしたいぐらいだよ！」

っという返事を頂き、俺は料理人として飯を作り始めたのだが…。

「料理追加ア！」

「了解イ！」

と、何故だか異様なまでに繁盛していた。
さっきからこの返事が全く鳴り止まない。
この店ってこんなに売れるのか？

「次の注文ん！！！」

「わひいっ！？」

（今言ったばっかですよい！？た、た、た、助けてえ！！！）

と、泣き言を考えつつも更に作っていく。
そして、作り続ける事四時間……。
ようやく客が引き、俺は軽く休憩していた。

「ふうー……」

「客が呼んでるよ！」

「マジか……。今行く」

やっと休憩できたと思ったら、すぐに客に呼び出された。
文句か……。？

「コレを作ったのはアンタか？」

「ああ。その通りだ。口に合わなかったか？」

「いや、そんな事ねえ！ 本当に美味かった！……それでだ。アンタの名前を教えて欲しい」

完全に文句だと思ってたので、キョトンとした表情をしてしまった。

「へ？ 俺か？ 俺は……。王偉。字は守義だ」

「おう！ 王偉！ アンタの名前覚えておくぜ！」

とか言って若めの男は去っていった。

「何だったんだ？」

「ああ。さっきの客は最近来てるっていう有名な商人だよ」

……………何か嫌な予感が…………。

仕方無い。無視しとこう。

気にしたら負けだ。多分。きっと…………。

「そうそう。今回のお給金だよ」

「お。ありがとう……………ってこんなに!？」

そこには、さっき人和が見せてくれた路銀の量の十倍以上あった。

「アンタのおかげで今日は大繁盛だったよ!それくらいやっても、いつもの十倍以上儲かってるさ!」

「そんなに!？」

き、今日は一体何が起きたんだ!?

とか、真剣に悩んでたら向こうから天和達が来た。

「迅くどうしたのー?」

「いや、此処で働いてたんだけど…」

「さっき通ったけどスッゴい人気よねー」

「どんな感じだったんだ?」

「いっぱい並んでたわよ」

地和が笑いながら言う。
面白い事でもあったのかね?

「そうだ。料理食ってくか? おばちゃん良いッスか?」

「ああ。良いわよ!」

との言葉を貰い、天和達に聞くと、即「食う」との返事をもらった。
で、料理を出すと……。

「う、美味ーい！」

「美味しーい！」

「美味しいです」

との三人からお褒めの言葉が入った。

「誰が作ったんですか？」

「俺だけど？」

「「「ええええええ！？」」」

三人ともに異常に驚かれた。
畜生泣けるな……………。

「料理が得意でおいしいか？」

「意外かなー」

「意外よねー」

「意外です」

それを聞き、俺はorzのポーズを取った。
色々泣けてくるな……。。

と、orzのポーズをとってたら外が騒がしくなった。

「ん？」

取り敢えず外に出たら町人が走っていった。

「どうした？」

「黄巾党の残党が攻めてきたんだ！」

「なら、俺が相手するよ。久し振りの拳での戦闘だ。腕がなる」

「あ、危ないぞ!？」

とか言うのを無視して、俺は門のところまで跳躍した。

「敵さんは……………つといたいた」

「なんだテメエ！」

「はい。お前ら全員ボッコボコな」

「はぁ!？」

軽い勢いで言ったら、かなり驚かれた。
よし、行きますかね。

「て…………ぬわあああ!？」

一言言う間もなく人が飛ぶ。
もう面白いくらいに敵が宙を飛ぶ。
投げつええ。

「て、テメエ！」

「まだやるんだなー。ま、一撃やってやるか」

取り敢えず軽めに気を込め、右ストレートを放つ。
それは閃光のように煌めき、賊の近くの地面を抉り、大穴を開ける。

「んー。マジのストレート放つには、この世界ではマズイかなー」

賊達は体を固まらせ、激しく汗をかいていた。

「さて、お前ら逃げないっつーんなら……アテルゾ？」

「ひっ、ひいっ!？」

ガタガタ震えて賊共は去っていった。

「あらー。腰抜けだねえ」

とか言いつつ周りを見たら、何人か見てるヤツがいた。

「ま、良いか。別にどうとでもなるだろ」

とか、またもや丸投げしといた。
別になるようになるだろ。

「戻りますかねー」

軽く跳躍し、さっきまでいたところに戻る。

「どうでした？」

「んー。弱くて話にならなかったなー」

とか、軽く返事をし、俺達はその後ヴィマーナに戻った。

恋姫編・第弐章 フラリ料理人旅wwってか敵よええ（後書き）

ジュン「今回は熱でキツいんでもう終了！」

迅「はやっ！？……………ってか熱？」

ジュン「39℃で死にかけなんですー……」

迅「インフルか？」

ジュン「多分ちゃうかなー。ってワケで今回の話はコレで乙ッス」

迅「次回も見えてくれると有り難いです！」

恋姫編・第参章 通り名が厨二過ぎて泣けた…。(前書き)

多分、次から董卓ルート入りです。

展開はどんな感じが良いですかね？

原作通り負けるか、それとも反董卓連合に打ち勝つか……。。

意見とか待ってます！

恋姫編・第参章 通り名が厨二過ぎて泣けた…。

一つ言わせて貰おう。

噂は…真に恐ろしいモノであると。

なぜ、こんな事を言うのかと言えば、それは今日起きた事が原因だろう。

「むう……。洛陽まではあと二日程で着くだろうな」

「そうですね」

その日もまた、俺達はヴィマーナから飯を食べに近くの街に降りた。
った。

そこで門前にいつも通り行っただが…………。

「すみません。お名前聞かせてもらって良いでしょうか？」

何故だか門番に呼び止められ、名前を聞かれた。

天和達ではなく俺をだ。

天和達の名前がバレたとしても、どうやら曹操達が体裁を守る為に

偽物の張角達の首を献上したらしいから、もしバレたとしても名前が同じ別人と思われるだろう。

「王偉で、字は守義だ」

「やはりですか！！噂と見目が変わりませんから、もしかしたらと思ひまして！」

何故か興奮気味の門番に軽く引きつつ、「噂」という単語に疑問を覚えた。

「噂とはなんだ？」

「つい最近回ってる噂ですよ。何でも『燃えるような赤髪に燃えるような紅い瞳を持ち、強さは並び立つ者無し、更には料理の腕前は天下一品』らしいですよ？」

俺は即座にorzのポーズを取った。
無視するべきじゃ無かった……………。

「迅スゴいわねー！」

「誉めてもらっても嬉しくないな……」

俺はorzのポーズからゆっくり立ち上がり、門番に向かい合う。

「俺の呼び名とかあるのか？」

「ええ。『天拳』とか『天上料理人』とかですね」

む、ムダに天って字が多用されとる……。

アレか？天にも上る料理を出すって誉め言葉か？

「で、もう行っても良いか？」

「あ、はい！ではお通りください！」

で、入ったのは良いのだが……。

『うちで料理をしてくれないか！』

とか……

『護衛をしてくれないか!』

とか、何故だか勧誘をされ続けた。
噂ってこええ……。

と、こんな事があつたせいで、俺は疲れ果てていた。

「もうダメだ……」

「何で疲れてるのー?」

天和が近寄って聞いてきた。
多分だが、今俺の周りは大分暗くなってるだろう。
それくらいに落ち込んでいたのだ。

「ちよつとね。……でもまあもう大丈夫だよ」

天和の顔を見てたら、落ち込んでるのが馬鹿らしくなった。
アレだぞ?

天和が抜けた顔してるって意味じゃないぞ?

「なら買い物行こー！」

「んー。分かった。じゃあ行こうか」

って買い物に出掛けたのは良いんだけど……。

「迅これ買ってー！」

「ちいはこれ！」

遠慮が微塵も無い二人の我が儘姫が君臨した。
ちよっ……！

財布の中のマネーがああああ！？

「う……。仕方ねえ。買うよ」

こんな時に対女性が発生してしまう俺……。
金づるでは無いよ俺は。

「「やったー♪」」

何でこの二人には遠慮というモノが無いのだろうか。

アレか？我が辞書に『遠慮』という言葉は無い！みたいな感じっスか？

……まあ、こういうのって美女の特権だよなー。

とか考えて諦める事にした。

「ホレ。貸して？」

二人から注文のモノを貰い、会計に持っていこうとする。

が、途中で髪止め（ヘアピン）的モノを見つけ、更にブレスレットを三人分もプラスして会計に持っていく。

「包みに入れてくれるかな？」

「はい」

店員に包みを要望し、包みに入れてくれるまで待つ。

で、包みをもらい、俺は三人のところに戻った。

「はい皆、プレゼントだ」

「」「ふれぜんと？」「」

あ、カタカナ使っちゃった……。

「モノをあげるって事かな？」

「そうなんだー。ありがとうー！」

「ありがとう」

「私も？…ありがとうございます」

と、口にしながらプレゼントを貰っていく。

「ブレスレットだけど……気に入ってくれと嬉しいかな」

「」「ぶれすれつと？」「」

またカタカナ使っちゃったよ……。

「腕の装飾品みたいなのかな？」

とか言って、反応を見てたけど、意外と三人とも気に入ってくれたようだ。

……そのせいで財布の中身が可哀想な事になってしまったが……。まあ、見返りはあったって事で諦めところ。
見返り？

嬉しそうな三人かね……。

あっ。キザイな。

ちよっ…石止めて…！

ちよっ…！？原爆は流石の俺でも無理だって！？

「じゃあ、取り敢えず洛陽に向かうか？」

「あ、うん！」

で、俺達は洛陽に向け、またヴィマーナに乗り、進んで行くのだった。

恋姫編・第参章 通り名が厨二過ぎて泣けた…。(後書き)

ジュン「完☆全☆復☆活！」

迅「☆がウザい！」

バキッ！

ジュン「そぼろっ！？あ、相変わらずだなお前は」

迅「バカの相手はこんなモノだ」

ジュン「しどい！バカや無いわぁ！！」

迅「そのノリがウザい！」

バキィッ！

ジュン「がふぁっ！……提案がありまーす」

迅「なんだ？」

ジュン「この後書き部分で今度〓もしも〓ならシリーズ〓をやると思うんだ」

迅「別に良いんじゃないか？」

ジュン「よし！なら考えとくかな！」

迅「そうか」

ジュン「とりま今回は終了な！」

迅「まあ、分かったぜ。次回も見えてくれると有難い。それではまた次回！」

恋姫編・第肆章 やつと董卓ルートに入れましたぜい！（前書き）

今考えてる泗水での結果は

1. 董卓軍を生き残らせる

2. ぬわにいいい！？ぬかったわあ！まさか俺が負けるとは！蜀O
r魏O r呉ルート入り

3. ぬおおおっ！？ご都合主義だど！？こ、こんな筈ではああああ
！の討死ルート。

4. ハッハッハッハ！泗水で女性だけは犠牲なしで戦いを終結させ
てやろう！あ、一刀も生き残らせるぞ

というルートを考えています。

あと、麻雀の話をやるかどうか悩んでいます。

参加メンバーは恋姫メンバー、ネギま（大戦期）メンバーの予定です。

感想に書いてくれると有り難いです。
感想待ってます！

恋姫編・第肆章 やつと董卓ルートに入れましたぜい！

二日後……ようやく俺は洛陽に辿り着いた。
ヴィマーナを一週間近く出し続けたのだが、何故だか魔力は切れなかった。

余程俺の魔力はチート並みなんだろう。

「やっと着いたー！」

「結構長かったですね」

「そうだな。なら、城に行くか」

で、そのまま城に移動し……………。

「何のようだ？」

門番のおっさんにそう聞かれた。

「董卓様にお会いしたいのだが？」

「名を名乗れ」

「コレは失敬。俺の名は王偉。字は守義だ」

「…！……………分かった。待っている」

一瞬俺のネームバリュー？に門番は驚きつつ、直ぐに立ち直り城の中に入ってしまった。

「ホント迅って有名よねー」

「ハハハ……。まあ、ありがとよ」

俺にとっては微妙な誉め言葉を地和に言われる。
……………忘れさせてください……………。

「……………許可が出た。ついて来い」

「オッケー。分かったぜ」

俺達四人は、そのおっさんの後ろをついていく。
……で、しばらく歩いたトコで、おっさんが止まる。

「ここだ。くれぐれも失礼の無いようにしろ」

「はいよ」

とか言いつつ、扉に手をつける。

「失礼する。初めまして董卓様？」

「は、はい。よろしく願いますね？」

ゲームで見た事はあったが、やはり現物を見るとなんだか保護欲に
駆られる生き物だなー。
とか、そんな事を思った。

「えっと…何の用でしょうか？」

「武官として雇って貰いたいんだ」

「はい。ちょっと待っててくださいね。詠ちゃん」

「どうしたの月？」

賈馱も来た。

コレはもしかして腕試しルートかな……？

「武官として採用して貰いたいらしいんだけど…」

「分かったわよ月。アンタ名前は？」

「俺は王偉。字は守義だ。よろしく」

普通に挨拶をする。

ネームバリューはここでも効くのかな？

……出来れば効かないで欲しいけど……。

「へえ。アンタがあ的那天ね。良いわよ。ただし、実力を見極めさせて貰うわよ」

き、効いちまったアアア！？
あ、鬱んなりそう……。

「オツケー。誰と戦えば良いんだ？」

「恋……呂布と戦ってもらうわ」

ガチッスか？うーむ。女の子とは戦い辛いなあ…。

「まあ、分かったよ。開始時間はいつだ？」

「これから二刻後ね」

「理解したよ。その前にまず調練場の場所を教えてくださいかな？」

「分かった。ついてきなさい」

で、そのまま賈馱についていき……。

「……」

「分かった。ありがとう」

そう言ってる間に賈馱は何処かに行っていた。
……もしかして嫌われてる？

「迅、大丈夫なの？」

さっきまで黙っていた三人が口を開く。
心配してくれる言葉に心は号泣モノだ。

「大丈夫だよ。何で行こうかな？拳……はないな」

「何ですか？」

人和が怪訝そうに聞く。

「拳だと相手が怪我をしてしまうからね」

あの気のパンチとか食らったら色々飛ぶだろ。
意識も体の部分も。

「うーむ。コレで行くとするか……」

そうやって俺が取り出したのは、コンバットナイフ。

見た目は黒く長い刃のある刀身に、持ち手の部分には丸い輪が付いている。

それを二つ取り出した。

「コレの強度はまあまあだろ」

輪に指をはめ、クルクルと回しながらそう言う。

……で、そのまま二時間経ち……。

「君が呂布かい？」

知ってるけど一応聞く。

ちなみに周りには董卓軍の面々が集まっていた。

緊張すんなあ……。

「……………そう」

「よし、じゃあ、手合わせ願おうか」

コンバットナイフを逆に持ち構える。
暗殺者によくある持ち方だ。

「……………なら行く」

呂布の鋭い一撃が俺に向かう。
俺は、ナイフの刃を当て、呂布の一撃を止める。

「……………重い一撃だな」

「……………まだ」

更に幾度と刃を交える。

「では、今度はこちらから行かせてもらおう」

右のコンバットナイフを呂布に当てに行く。

呂布はそれを止めたが、その追撃のように左の後ろ回し蹴りを放つ。
流石に手足両方使わない程甘い相手では無いからだ。

「……………！」

それでも呂布は危険を感じ取ったのか、後ろ側に飛んで避けた。

「ほう。避けたか。なら、こんなのはどうかな？」

呂布に即座に近づき、踵落としをする。

勿論それも避けられた。

が、その一撃を食らった地面は、大規模なクレーターが出来ていた。それに、まるで地震が起きたかのような震動が走った。

「……強い……けど本気出してない。……本気出してほしい」

「む……。確かに武人からしたら手加減されるのは最大の侮辱か……」

そう言って、コンバットナイフをまた暗器として装備する。ちなみに、後ろではめちゃくちゃ動揺の声が飛び交った。

「俺の武器はこの拳だ！呂布……。コレから俺はマジでやる。お前も本気を出すと良い」

マジつつつても『殺す』マジでは無い。『倒す』マジだ。

この区別の差では、大分違う。

『殺す』方ならば、確実に息の根を一撃で止める為に人体の急所を狙うだろう。因みに言うならば、俺はこちらの方が得意だ。

戦闘経験もあるからだろう。

次に『倒す』方ならば、人体の急所を外しつつ、尚且つ相手を気絶、又は地に伏せる為に的確に攻撃を当てる。

これには、細心の注意等が必要な為、『殺す』方よりも更にやりづらい。

「……………分かった」

「なら、行くぞ！」

閃光のように光が煌めき、幾つもの光が走る。

しかし、呂布はそれを身を捻ったりして避ける。

……………流石に『殺す』為じゃ無いから避けられてしまうか……………。

「……………フツ……………！」

先程よりも更に鋭く、更に重い一撃が俺に向かう。

「腕ガード！」

右腕の肘までの部分で方天画戟を受け止める。
流石にソレは恋も驚いていたようだ。
ソコに一瞬の油断が生じる。

「フッ……」

足をかけバランスを崩し、その後、恋の首元に手刀をあてがう。

「どうだ？ まだ続けるか？」

「……参った。王偉……強い」

「ありがとよ。呂布も強かったぜ」

呂布の手を取り立たせる。

「……恋」

「へ？」

「……恋の真名」

「良いのか？」

いきなりのことでビックリしつつ、恋に聞く。

「……良い」

「そうか。俺の真名は迅だ。よろしく恋」

「………よろしく迅」

と、こんな感じで俺は戦いを終えた。

「賈馱。どうだったかな？」

「分かったわ。武官として採用するわ。ちゃんと働きなさいよ！」

「お、ありがとう。まあ分かったぜ」

と、こんな感じで俺は董卓軍の武将となった。

この後、張遼と華雄に勝負しろと詰め寄られた。
勿論、『今度機会があったらな』って返しといた。
流石に女の子二人はボコれません……。
恋でも結構精神的にキツかったんだよ？
ってか、対女性発生しなくて良かった……。。

恋姫編・第肆章 やつと董卓ルートに入れましたぜい！（後書き）

ジュン「はい。今回始まりました。もしも○○ならシリーズ！今回は…」

くもし迅が王様野郎だった場合inネギま（葉味）く

葉味「あのあなたは…」

学園長室に入ると、椅子に深々と腰を掛け、机に足を乗っけていた男が優雅に紅茶を飲み、君臨していた。

迅「王^{オレ}に名を問うか屑如きが。まあ今の王^{オレ}は中々に気分が良い。良からう。王^{オレ}の名を聞かせてやろう。その魂に永久に焼き付けるが良い。王^{オレ}の名は神影迅だ」

葉味「神影さんですね！何で此処にいるんです？」

迅「王^{オレ}は気紛れだ。故に、王^{オレ}はこの麻帆良の教師となった」

薬味「へ!?!」

その自らの事を王と名乗る男は、気まぐれに教師となった事を告げた。
薬味からすれば、それは理解しがたい事だっただろう。

迅「勿論爺にも許可を得ている。そうであろう?」

ぬらりひょん「うむ。そうじゃ……って、何じゃこの表記は?」

迅「妖怪は妖怪だろう。この世の人智すらも越えているぞ貴様は」

ぬらりひょんはorzのポーズをとって、崩れ落ちた。
端から見たら、惨めそのものである。

ぬらりひょん「それはひどくないかの」

迅「雑種に反論する権利など存在せぬ」

（END）

……なんじゃこりや。

ってな感じで今回はこんな感じですよ。
次も見えてくれると有り難いです！

取り敢えず、今のトコは董卓軍生存ルートの見解が来たんで、生存かな〜って感じです。

それにしても、対・女性発動しないな！。

いつ発動させようかな…。

泗水の時に起こしたら確実に負けルートだしなあ…。

恋姫編・第伍章 いきなり文官の仕事ですか？それとパティシエ迅！

次の日、俺は賈馱に呼び出され、仕事部屋に向かった。
何でも、仕事があるからさっさと来いらしい。

本気で俺は賈馱に嫌われてるのでは無いかと疑問に思うワケだ。

「賈馱、来たぞ？」

「遅い！呼ばれたらさっさと来なさいよ！」

……………扱い酷くないですか？

そうッスか…………。

新人弄りか…。耐えきってくれるわああああ！！

「悪かった。で、仕事って何なんだ？」

「コレよ」

賈馱が指差す先には、大量の書類が………………。
漢文は……………読めるから大丈夫か。

「多くないか？」

「良いじゃない。このくらい」

そうは言うけど、書類の高さは机の高さが足されてるとはいえ、俺の身長以上あるんですが？

コレは本格的に嫌われてるんじゃないかな？
信頼という形だったら大歓迎だな！

「はぁ……………。分かった。やるよ」

で、その書類群の前に座り込み、書類との格闘を始める。

「全力全速で行くぞ！」

高い動体視力と反応速度を使い、書類を二枚一秒のペースで処理していく。

因みに漢文は昔紛争地域を回っていた時に一時滞在し、完璧に習得した。

他にも、英語、ドイツ語、スペイン語、ヒンドゥー語、ベトナム語等計41種の外国語も喋れる。

「ぬ？」

変な書類を発見した為、横にずらしておいた。
具体的にどう変かと言えば、陳情書なのだが筋が通っていない。
そういう変なモノを抜いていった。

「ぬうおおお！」

更に気を使い、速度を上げる。
今の速度は一秒八枚の速度だ。
既に端から見たら、手が分身して見えることだろう。
とりあえずは速攻で済ませたいのだ。

……………そして一時間経つ頃…。
ようやく書類の底が見え始めた。

「ぬううう……………」

目測の枚数はおよそ百枚。
時間的には大体13秒。
そうこう考えてる間に十秒経っていたりした。
で、そのまま終わり……。

「終わったー！」

「早いわね。文官として働いたら？」

「こっちは頼まれてやる分には良いけど、仕事にはしたくないかな？…で、一応コレが見ておかしかったヤツだ」

賈馱に文官にと提案されたが、頭が痛くなるから拒否しといた。お手伝いって形なら良いんだよ？

「分かったわ。確認しておく」

「なあ賈馱？他にやる事あるか？」

「なら、これをよろしく」

と、賈馱の所にあった書類の山の一部を渡された。

「分かった」

で、俺はそれをまたやり進めていき……

「終わったぜ！」

今回は三十分で終わった。

端から見たら、もう『インテル入ってる！？』って感じた。

「ホントアンタ人間？」

あまりの早さか、何故か賈駆に人外扱いされた。
マジで涙目だ。

「人間だって。て、どうだった？あの書類は？」

「確かにちょっとおかしかったから対応しておいたわよ」

「そっか。そうだ。賈駆はコレからまだ仕事あるか？」

仲を良くする為にも何かやるとしよう。

「王偉が大体の書類を片付けたみたいだから、ボクは後は非番ね。」

で、それがどうしたのよ？」

「賈馱。ちょっとコレをしないかい？」

そう言って取り出したのは将棋。

昨日なんとなく思い出し、創ってみたのでやってみたくなったのだ。これの他には、麻雀一式も創ってみた。

ついでに言うと、卓は全自動だ。

「それ何よ？」

「コレは将棋って言ってね。それぞれ役割、能力が違う駒を駆使して、相手の王……つまりは、主を打ち倒すんだ。軍略とも通ずるところがあるかもね？」

「へえ。面白そうね。やってやろうじゃない！」

軍師にコレを持ち掛けたからか、燃えていた。

「じゃあ、とりあえず説明と最初の配置を言っておくな」

で、俺は将棋の説明を教えた。

賈馱は戦略を練ってるようだ。
フッフッフッ。

元門下生とよくやった俺の実力……嘗めるな！
って、ワケで開始し…。

「っ！」

俺の奇っ怪な戦法により、歩は全て俺に墜ち、尚且つ俺の被害は無し。

「おや、兵が全て我が軍門に降ってしまったな」

「ま、まだよ！」

そこから、賈馱はしばらくの間、考えた後抵抗を見せた。
結果としては飛車・角が向こうに四枚。それに、王が一枚。
対して俺は、それ以外（手持ち駒あり）。

オマケに王までも全進。

ある意味超攻撃的だ。

歩は全て成ってるし。

それどうやったかって？

我が戦略に不可能は無し！

あ、コレは将棋とか麻雀のみね。

「くっ…まだ！」

「よっしゃあ来い！」

つてな感じで、やり……

「王手」

「……………負けたわよ」

と、賈馱を結局倒してしまった。

「お、コレは賈馱がまだ慣れてないこそその勝利かな？」

「戦いに必然なんて無いのよ。だから次は勝たせてもらうわよ！」

と言って、将棋の盤を持って立ち上がった。

「あ、俺の真名は迅だから、迅って呼んでくれないか賈馱？」

「ええ。分かったわ。ボクは詠。じゃあね迅」

と、真名を有り難く賈馱……詠からもいただいた。
これで恋と詠で二人目だ。

このまま、董卓軍のみんなと仲良くなればいいな……。
て、そのまま棋盤を持って、詠は去っていった。

「あ、将棋……。ま、詠が気に入ってくれたみたいだしまあいいか」

どうやら嫌われちゃいなかったみたいだし。

まさか真名まで貰えるとは思ってなかったけど。

うーん。

次は何しようかな。

飯でも作ろうかな。

いや、菓子類もいいな。

そう思いながら俺は、調理場に向かっていった。

で、調理場に着いたんだが、何を作ろうか。

取り敢えずデザート……。

無難にケーキでも作るかな？

「よし。アデアット」

偉大なる神々の記憶マグナ・デウス・メモリアを使い、俺はケーキの材料。調理用具等を全て創り出す。

ホントに便利なアーティファクトだ。

「よし、作るか」

手際よくケーキを大量に作っていく。

今回は何となくで作っている為、正直いくらでも作れると思う。
飽きるまで作る……のかな？

とか思ってたら、恋とちっちゃい子、それと董卓さんが来た。

「なにしてるんですか？」

「あ、董卓さん。コレはケーキって言うてですね。多分甘くて美味しいと思いますよ?」

董卓さんは主なので、敬語を使っている。
割とキツいかも……。

「へえ。そうなんですか」

「はい。董卓さん食べて見ますか？」

「良いんですか？」

董卓さんの目が輝く。

後ろの恋は、物欲しそう？に見ていた。

「はい。勿論です！恋とそこの子も食べないか？」

「……食べる」

「恋殿がいただくのならねねもいただくのです」

で、飯を開始したんだが………ヤベー和む。
もきゅもきゅと食べる恋なんか特に。

「あの……すごく美味しいです！！」

「褒めてくれて嬉しいですよ董卓さん」

そう言う、おずおずと董卓さんが喋り始めた。

「あ、あの私の事は月って呼んでください」

「それは真名ですか？」

「はい！そうです！」

「ならよろしくお願いしますね月さん」

と、真名をいただいたんだが、何故か不服そうだった。
そして、何故だか原作より積極的だった。

「どうしたんですか月さん？」

「あの……敬語も使わなくて良いですよ？」

「あ、はい。分かりました。良いんですか？」

「はい！」

少し勢いに押されてしまった。

「ならよろしく月。俺は迅だよ」

「よろしくお願いします迅さん！」

と、挨拶を交わしていたら、いつの間にかさっきまであったケーキが無くなっていた。
恋食いすぎ!!

「そういえば、君の名前はなに？」

「ねねはちんきゅーということです。恋殿にこの美味しいけーきとか言うものをくれた事は感謝するです」

『は』……………か。

他は全く感謝していない。

寧ろ、感謝？なにそれ？な感じか？

「おう。ありがとな。陳宮か。俺は王偉。よろしくな」

「そんな事知ってるです」

「あはは……。そっか」

超苦笑いだ。

コレしか出来る事無い。

「……………」

食べ足りないのか、寂しそうな恋が其処にいた。

「食べ足りないのか恋？」

「……………うん」

ってワケで、また食事を作り始めた。

ちなみにこの後、恋が満腹になるまで膨大な時間がかかった。

恋の腹恐るべし！！

恋姫編・第伍章 いきなり文官の仕事ですか？それとパティシエ迅！（後書き）

ジュン「今回は第二弾です！」

くもしも迅・天和・地和・人和で麻雀をしたらく

「麻雀しようぜ！！」

天和達の部屋に入ると、俺は直ぐにそう告げた。

天和達はキョトンとした顔をしている。

「なによそれ？」

で、俺は三人に麻雀を説明した。

すると、三人とも了承してくれて卓を囲んだんだが……

一東場・親 天和一

因みに25000点持ちで、青天井だ。

「あれ？これなんかもう出来てる。ツモ」

「なに！？」

天和 役満

16000オール

「天和姉さん…」

「容赦ないわね」

二人もビツクリしたみたいだ。

地和・人和・俺三人とも残り9000点なのに、天和だけ73000点だ。

―東場・親 天和 一本場―

「あ、なんかスゴいことに……。ま、いっか。ツモ♪」

「何故だあああ！？またかつ！またなのか！？」

役を見たら、めっちゃ酷い事になってた。

天和 大四喜和（二倍役満） 四暗刻 字一色 役満五重複

80000オール。

「牌を握っただけね」

「全員飛んじやったわねー」

「金掛かってたら一生借金まみれじゃねえか」

某借金執事にはなりたくねえぞ！

「なんか分からないけど買った♪迅、奢ってね？」

「なあにいいいい!？」

—結果—

天和	313000点
地和	—71000点
人和	—71000点

俺 ー71000点

「ば、化け物か!？」

「ちいの番まで来たら上がったのにー」

自分が引く牌を見て言う。

「マジで!？」

地和は大三元、四槓子、四暗刻単騎、地和だった。
何コイツラの爆運……。
コワイ…。

～END～

ジュン「こんな感じで第二弾でした。次回も見えてくると有り難いです!！」

恋姫編・第陸章

俺の部隊は最強化させるぜ!! (前書き)

昨日投稿し損ねました……。
やっちまった〜!

恋姫編・第陸章

俺の部隊は最強化させるぜ!!

3日が経った…。

仕事のペースとしては、大体文官の仕事を3日中2日。同じく武官も3日中2日だ。

正直俺は文武官的立場にいるような気がしてきた。それに、そろそろ反董卓軍が組まれるくらいか？

で、俺が今来ているのは、調練場だ。

何で来ているかと言えば、今回俺に軍を持たせるらしい。

詠が言うには『あんたみたいなヤツの下につきたいって奴が結構いたのよ』らしい。

……ツンデレってヤツですか？

いつかツンが無くなってデレるんすか？

いつまでもツンな気がするよ俺は。

まあ、取り敢えず軍の前に来てんだし、頑張って挨拶しますかね。

(挨拶……どうしょ？)

兵達は大分騒がしかった。

………あ、イラッと来た。

「静かにしろォ!!」

地面を踏み抜き、爆音で兵達を黙らせる。

俺の足元は盛大にクレーターが出来てしまった為、仕方無いから穴から抜け出した。

「俺がお前らの上官となる王偉だ」

兵達がざわめく。

「よし、まずお前らの中で、一撃でも俺に攻撃を与えられるかもしれないと言う奴……出てこい」

「」「はい!!!!」「」

そう言ったら、兵の半分以上が出てきた。

だ、大分嘗められてんじゃねエかアアアアア!!

「よしお前らァ! 全員掛かってこいやァ! 勿論前に出てない奴もだァ!!」

完全にキレ気味になりながら全員との手合わせを開始する。

「ウオラアアア!!」

閃光がバンバン煌めき、兵達がバンバン飛ぶ（手加減で実力の20%）。
これで死なないのは多分ギャグ補整がコイツラに働いてるからだろう。

「飛べやア!」

宙に人が飛びまくる。

大分シュールな映像だ。

で、僅か一分で立っている兵がいなくなった。

勿論俺は無傷だ。

「俺が上官となる事に異論はあるか!!」

「「「全くありません!!!」」」

顔を青くしながらも大声で言う。

「今から訓練だ!!」

で、それから訓練をした。

俺の訓練は、実戦にていかなる場合いかなる状況に置かれても最善手を取り、生き残れる方法。

それと、実戦にていかなる場合いかなる状況に置かれても相手と互角、またはそれ以上の状況に常に持つて行けるように死ぬ気で訓練させた。

多分この世界の誰よりも鬼教官な事をしただろう。

それくらい俺の訓練は地獄と同義なまでに厳しいのだ。

ちなみに俺の訓練のモットーは『一年ずつと戦い続けるより、死ぬ気で濃い密度でやる一時間の訓練の方が成果がある』だ。

たぶん、兵達はこの訓練で数百回死んだくらいアレだろう。

アーティファクトまで使って全力で苛め抜いたし。

四年の訓練を四時間くらいで終わらしたくらい密にやった。

「以上！今日の訓練は終わりだ！飯を馳走するから着いてこい」

その瞬間、地に伏せていた兵の全員が立ち上がった。

コイツラスゲータフだな。

『有り難く馳走します!!』

全員で一文字もずれずにハモる。

ココまでハモると正直気味が悪い。

でもまあ地獄を仲良く見たんだし、そりゃチームワークつつーか、連帯感つつーかが付くよな。

うちの門下生達も気持ち悪いくらい連帯感あったし。

全員で俺を倒しに阿吽の呼吸しに来たからな？

なんつーかキモかった。

仕方無いと思うんだこう思うのは。

だってむさ苦しい奴らがアイコンタクトし出すんだぜ？

吐いてしまうって……。

ちなみにちゃんとフルボッコにしといた。

「着いてこい」

『はい!!』

軍隊も真っ青なくらい足の歩幅、タイミングも一緒だった。

コイツラ怖い……。

とか思ってたら、前から張遼が来た。

手合わせですね。分かります。

それで、後ろの兵達が飯が食えなくなって世の中の不条理に嘆くんですね。分かります。

「王偉。丁度調練場にいるんや。良い機会やでウチと仕合しよーや」

……やっぱり？

ああ、良い笑顔していらっしゃる……。

ぬううう……。

何だかんだで逃げてたのに!!

「えー……」

「ええやないか。それとも、ウチと戦いたくないん？」

戦いたくないですとも!!

「戦わんつちゅーんなら、華雄も呼ぶで？」

た、た、た、助けてええええ!!

あの子入ったら確実に仕合二戦だよ!?

「た、戦うよ……」

「武器やのうて素手でやりいや？」

はい、武器で逃げなくなりましたー!

「実は俺……女性と戦うと実力が下がるんだ……」

自分の特性で逃げる事にした。

「嘘言わんとはよ準備しいや」

ちよっ!？

嘘じゃ無いってばあああああ!!!!

「……分かった」

……折れちゃった……。

ってか、後ろの兵達血の涙流す勢いだよ……。

準備が終わり、俺は張遼に向き返った。

「ほな行くで!」

【『迅』は『対・女性』が発動した】

張遼の言葉と一緒にそんな音が鳴り響く。

（はっ！？ちょっ！？嘘だろ！？）

【パラメーター……が四段落下があります】

（やめてええええええ！！！！）

その瞬間体が重くなった。
それと同時に槍が俺に向かう。
なんかかなり早く見える。

「くっ……」

ギリギリでかわしつつ、気で身体を強化する。

（チツ……。参ったな……）

「なんやなんや！攻撃せえへんのか！」

「くっ……。ラアアアア！」

威力が元から数段落ちてる為、手加減せずに拳を振るう。
女性に手を出さないとか甘い事は言ってられないのだ。
しかし、その閃光の威力も相当落ちていた。
だからか、張遼に避けられた。

「くっ……」

仕方無いよな？

昔みたいに全力で行って良いよな？

もう俺は知りません！

ってワケで気を纏い、更に手の方は密度を更に上げた。

「……なんや……それは…」

流石の張遼もビックリだそうだ。

何せ今の俺の見た目は、全身を青い気が覆い、更に腕はもう巨人並みの気で作った腕が俺の腕の上に存在するからだ。

「久しぶりのマジだぜ！」

「はぁっ!?!」

久しぶりに気だけの戦いのような気がする。
ってか、流石にコレって威力落ちても大分あるよな？
前の時は諸島一つ消えたし……………。
アレ？ヤバくない？

「降参してくれない？」

（マジで洒落んならんからさあああああ！！）

「やってみんとわからへんで！」

取り敢えず腕は消しといた。
ちよっと調子に乗りすぎたと反省している。
けど、手に気を込め、向かい合うことにした。

「何や？あの腕ははったりやったんか？」

「違うって。アレ出してから威力思い出したから止めたんだ」

「まあ別にええわ。行くで！」

張遼が駆け出す。
俺も縮地で一気に距離を詰める。

「なっ!？」

そのまま張遼は防御に入るが、ソレを崩すかのように槍の刃の先に二撃同時に当て、少し衝撃で退けぞらせつつ、張遼の足元の地面を踏み抜き、バランスを崩し、張遼を押さえる。

「これで俺の勝ちだな？」

「はあゝ。負けたわ…」

「張遼強かったぜ？」

「ありがとな、王偉も強かったで」

と、張遼と握手した。

仕合が終わったと同時に重さも無くなったし、どうやら対・女性の効果も終わったみたいだ。

「せや。さっきのアレの威力ってなんなん？」

「前やって諸島消えた」

「諸島ってなんや？」

「そうだなあ。地面の集まりみたいな感じかなー」

「は？」

張遼はワケ分からんって感じになってた。

「多分さっきでもアレやってたら洛陽ごと消し飛んでたかな？」

「…出鱈目過ぎるわ…」

溜め息を吐かれた。

やる前に踏み止まれて良かった……。

「あ、張遼。俺の事は迅で良いぜ？」

「なんやええんか？ならウチは霞や。よろしゅーな！」

ってな感じに張遼：霞の真名も貰えた。

後は……陳宮と華雄か…。

なんか二人とももらえない気がするなあ……。

「……………あ」

振り替えると、兵達は血の涙流してた。

どんだけ飯食いたかったんだコイツラ……。

まあ流してない奴もいたが。

「霞。飯食うか？」

「ん？せやな。ウチも食べるわー。コッチもどうやー？」

そう言って酒を取り出した。

「お、良いねー。久しぶりに飲むかな。いやー、最近全く飲めなかったから懐かしいな！」

そう言えば、転生してから一度も飲んで無かったな……………。

「お、ならはよ行こうや!」

で、この後調理場に向かい、料理を作り、霞と酒を飲んだ。
今回の事で霞と大分仲良くなれたと思う。

途中で無茶振りとかされたが、それも気合いで何とかしたし。
けど、酔ってから意識が飛んでしまった……。

ジュン「投稿し損ねた…」

迅「久しぶりだな。今回はアレはやらないのか？」

ジュン「今回はネタ無しで足りなくなったからな。コレの恋姫の一刀の事でも言おうかと思って」

一刀「呼んだか？」

ジュン&迅「神出鬼没!？」

一刀「呼んでないのか？」

ジュン「まあいっか。今作の一刀は当社比（どこのだよWW）2倍増しなんだ」

迅「倍!？割じゃなくてか？」

ジュン「ああ。エロさとオタクさとメイド愛度が2倍増しなんだ」

一刀「どうしようもねえな」

迅「お前の事だぞ？」

一刀「ぬわぁにい！？」

ジュン「種馬度格段アップの万年発情屑塵ヒモ野郎に退化したんだ」

一刀「桂花並に悪口がヒデエ！？」

ジュン「因みに、桂花ちゃんは一刀を既に人間と見てません」

一刀「じゃあ、なんて見てんだ？」

ジュン「○○(ピー)で○○(ピー)な万年発情○○(ピー)精液」

一刀「…………orz…………桂花のバカヤロー！！○○(ピー)してやる！」

ジュン「あ、走ってった」

迅「ピーって何だよ」

ジュン「禁則事項です♪」

迅「だいぶキメェ」

ジュン「……………」orz

迅「とりあえず、次回もよろしく！見てくれると有り難いです！」

恋姫編・第漆章 恋姫定番なイベントだね。って、これは一刀のポジだろ……。

うーん。

どのタイミングで世界移動しようかなあ……。
悩みに悩むぜ！

一応タイミングの案です。

1. 反董卓軍壊滅させてすぐ

2. 三國併合後

3. 敢えて五胡も叩き潰す

どれか書いてくれると有り難いです。

恋姫編・第漆章 恋姫定番なイベントだね。って、これは一刀のポジだろ……。

「う、ううゝ……。頭イテエ……」

次の日、俺は二日酔いの痛みに嘆きながらベッドから起き上がる。酔ってから記憶が無かったが、どうやら自分の部屋に戻れたらしい。

ムニユ

「え？」

なんか柔らかい感覚が……。俺がそこを見ると、霞がいた。唯一救いだっただのは、霞がちゃんと服を着ていた事だ。酔って手を出したとか最悪だ。それに、そんな事したらちやっかりこの小説に18禁タグが付いてしまう。

「昨日何が……」

酔った間に俺に何があったんだろうか。

門下生達ん時は確か、全員地面にくたばっていた気がする。

「……二日酔い吹っ飛んだじゃねえか…」

あまりの驚きにいつの間にか二日酔いが吹っ飛んでしまっていた。

「って、いつまで霞の胸触ってんだ！？ 煩惱退散煩惱退散煩惱退散
………」

手を離し、眩きながら何も考えないようにする。

「考えるな。思考を止めろ。煩惱を消し去れ………」

もうかなりヤケになって来ていると……

「……んゝ。よう寝たわゝ。って迅、何しとるん？ えらい形相しと
んで？」

霞が起きてしまった。

「いいいいいや、何でもない。何でもないんだぞ！」

「……えらい怪しいなあ。もしかしてウチの胸揉んだりしてたん？」

「ちちちち違うぞ。アレは偶然。偶然なんだ。うん」

「…………まさかホントにやったとは思わへんかったわ。なんや迅も魏の種馬みたいなんやな」

…………種馬じゃなあああい！！

「待て霞！俺は種馬じゃない！第一触れただけだ！それ以上は双方同意の下じゃなければしない！」

「ハハハ！なんや堅いなあ！魏の種馬は見境なしっちゅー話やで？」

……………もしかして……………からかわれてた？
って、魏の種馬って一刀だろ？
見境なしとか、アイツ発情期なのか？

「全く…………。で、魏の種馬はどういう噂なんだ？」

「なんか、美人は魏の種馬と目が合ったら確実にやられるらしいわ」

「…………色々怖いな。目え合わすの。あと、女の子がやられるとか言わないように」

今、俺の中での一刀の株が大暴落した。
でもってかなり引いた。

「じゃあ、犯されるは？」

「余計駄目じゃい！」

霞の頭に拳骨を食らわす。

「ツーー！！痛いわ迅く。頭凹んだらどないするんやー！」

「凹まん！」

で、この後二日目の鍛練に向かった。

着くと、全員が整列し、綺麗に直立していた。
……かなり不気味なんだが。
私語も全く無いし。

『神影上官!! お早う御座います!!』

そして、同時に此方に少し顔を向け、挨拶をした後に礼をする。

「お、おお。おはよう」

「……迅。これ何なん？」

霞は俺の部隊を見ながら、眉をひくつかせ、苦笑いをしていた。

『張遼様! お早う御座います!!』

「お、おお。おはようさん」

「昨日鍛練したら、連帯感バツチリになっちゃってさ」

俺もかなり苦笑いしながら言い返す。

「修行でこんな事になるん!？」

「なるからなってんじゃないね？」

とか話してる間、兵達は静観してた。
……………気まずいんですが？

「とりあえず霞。お前も今日の仕事行け」

「……………そうやな。なんや気まずいしな」

と言って、霞はそそくさと去っていった。

やはり空気が厳しかったか……………。

「……………言っておくが、妙に気を張るな。平常的にいれないなら、戦場ではすぐに殺されるぞ」

そう言ったら、全員いつも通りに戻った。

「なら」

その瞬間静かになる。

よし、分別の出来た良い奴らだ。

「鍛練を開始する」

『よろしくお願いします!!』

よし、何だか良い返事に思えてきた。

「死ぬ気じゃなくて、確実に臨死体験だ! 死に際を見て、生きる為の覚悟を手に入れろ!!」

死に対し、それなりに触れないと覚悟はあまり出来にくいからな。

第一、一般人が『死ぬ気』なんていっても、実際『死ぬ』可能性があるなら、尻すばみしてしまう。

軽く『死ぬ気で』なんて言っても、全くダメなのだ。

『はい! わかりました!!』

……で、二時間の鍛練の後……

「覚悟は見つかったか？」

『……………はい』

大体全員地に伏せくたばっていたが、全員目は死んでいなかった。
こんな短時間で覚悟を見付けられるとは、中々出来の良い奴らだと思ふ。

「よし！明日からは己の最も適した武器を探し出すぞ！！解散！！」

『はい！有り難うございました！！』

俺は、それから振り返り帰ろうとしたら、何故だか其処には華雄がいた。

「私と戦え王偉。異論は認めんぞ」

「……………分かった」

逃げてたのに！！

で、華雄と距離を取り、刀を持ちながら相對する。

「行くぞ！」

「来い」

華雄の斧が俺に向かう。
……パワータイプか。

「よっと」

「な！？」

指二本で華雄の斧を掴み、攻撃を止める。

「ほっ」

華雄の足下の地面を踏み抜く。
で、そのまま足を払い地面に倒す。

「がっ…」

「詰みだ」

華雄の喉元に刃を当てながら言う。

「……参った。……私は……弱いのか？お前に赤子のように軽くあしらわれ…」

「弱くはない。が、粗すぎる。まだまだお前は未熟なんだ。鍛え方によっては、まだまだ力が上がるだろう」

「……………なら、お前が私を鍛えてくれ」

「へ？」

てつきり『ふざけるな！私が貴様より弱い訳がない！今度こそ覚えていろ！』とか言うと思ったんだが。

「良いのか？駄目なのか？」

「分かった。鍛えてやる。……俺の訓練は地獄と同義だぜ？」

「なら、地獄を越えるまでだ！」

華雄はそう言って興奮してた。

「じゃあな華雄。俺はこの後書類と格闘だからさ」

「ああ。分かったぞ」

で、俺はそのまま詠のトコに向かっていった。詠のトコに行ったら、バカみたいに書類が積まれてたが……割愛しておこう。

恋姫編・第漆章 恋姫定番なイベントだね。って、これは一刀のポジだろ……。

ジュン「今回だいぶ調子に乗ったかも」

迅「それはいつもの事だろ」

ジュン「容赦ないお言葉!？」

迅「最近ペースが遅くなったな」

ジュン「それでも二日に一話。端から見たらハイペースに入ると思
うぜ?」

迅「……そうかもな」

ジュン「だろ? まあ、すぐ書けたら一日一話にするけどさ」

迅「頑張れ。キリキリと。胃が痛くなるくらい」

ジュン「なんのイジメっすか!？」

迅「気にするな」

ジュン「……分かったよ。とりあえず、今回は此処で終了!」

迅「次回も見えてくれるとありがたい!」

恋姫編・第捌章 華雄の精神強化だぜ！（前書き）

うーん。

少ないなー。

そろそろストーリー進めたいし、肉体鍛練、兵の強化をハシヨろうかなー…。

どっちが良いか言ってくれと有り難いです！

恋姫編・第捌章 華雄の精神強化だぜ！

次の日……。

今日は華雄の初鍛練の日だ。

「ふう……。本気で修行してやらないとな」

同時に、俺にとって初めて女性を本気で鍛えることとなる。

そうして調練場に辿り着くと、既に華雄は来ていた。

因みに言うと、今日の鍛練は休みとしておいた。

「王偉。待っていたぞ」

「ああ。今日一日でソレなりに鍛え上げてやる。まあ、何日か鍛練しなければただの付け焼き刃だが」

多分兵達も自主練に励んでいるだろう。

……もし自主練してないんなら、はったおす。

二時間みっちり精神壊れるくらい鍛え抜いてやる。

「ああ、頼む」

「では、鍛練を開始する。…………まず、自分に特に何が足りないか分かるか？」

「…………分からない」

考えたが本気で分からないようだ。

…………これは…………。

中々に大変そうだ。

「華雄に足りないのは技術と精神力だ。中でも特に精神力を改善しないと罫にかかり、死ぬことになる」

軽く乗せられ、軽く死ぬ。

それは流石に武人として如何だろうか。

「…………どうすれば良い？」

「まず、今から精神力を鍛え上げる訓練を行う。…………せめて壊れるな」

昨日これの為にアーティファクトを使って造り出した、精神破壊系

の結界宝具を取り出す。

名前は取り敢えず『崩れ逝く魂』とでも名付けるか。

コレは、精神力を常に強く持たなければ、精神を保てなくなるとい
う精神力を鍛えるのにはもってこいな宝具だ。

「来い」

「行くぞ？覚悟は出来たか？」

「勿論だ」

「なら始めよう。開け『崩れ逝く魂』」

世界が塗り変わる。

情景は、暗い空間の中で淡い火が揺らめいているような感じだ。

「なっ…」

「精神を強く持て。そうしないと、死ぬぞ」

因みに言うと、俺もこの『崩れ逝く魂』の効果を受けている。
だが、戦場の時のように心を静ませる事で崩壊を防いでいる。

「何事にもぶれない、強き魂を持て」

そこまでとは行かないが、多分心の琴線に触れられない限りキレイな
いだろう。

……それから四時間後。

「そろそろ昼時か」

華雄は何度か山場を越えていた。

最初の山場の時は、本気で壊れるか心配になったが、二度三度と続
いたことで、その心配も無くなっていった。

危うさも少なくなつて、顔立ちもマシになってきたように思える。

「閉じろ『崩れ逝く魂』」

「なんだ？ 終わったのか？」

華雄は不思議そうにしていた。

「飯だ。奢るから飯食いに行くぞ？」

「分かった」

で、城下の飯屋に入る。

そのまま注文を頼み待っていると、華雄が話し掛けてきた。

「私はいつになったら、鍛練出来るんだ？」

「……バカか？今のもれっきとした鍛練だ。精神面のな」

「でも、それでは強くはなれんぞ」

「……はあ」

思わず溜め息をついてしまった俺は悪くない。

……多分。

「何で溜め息を吐くんだ！？」

「なんだかなあ……。華雄は力とはなんだろう？」

「なんだ急に？力は力だろう？」

「いや、守るための力と、殺すための力がある。華雄はどちらが欲しいんだ？」

わりと真剣な顔をして華雄に聞く。

……殺すための力なら修行は止めよう。

殺すための力は……虚しすぎる。

「……分らない。分らないが、多分守るための力……なんだろうな」

「そうか。なら合格だ」

とか言ってやっときた飯を食い始める。

で、食い始めて二分後くらいに恋達が来た。

「や、恋、陳宮。今日は非番か？」

「……………そう。迅は？」

「華雄の鍛練で、今は休憩中かな」

「恋殿と同じでねねも非番なのです！」

「おお。二人でうろちよろしてたワケだな。仲良いな」

「勿論そうに決まってるのです！」

そう言って胸を張る陳宮。

「つと、取り敢えず華雄も飯食い終わったみたいだし、鍛練の続きがあるから行くよ。今度どっか回ろうぜ恋、陳宮？」

「……………分かった」

「行くぞ華雄？」

「ああ、分かった」

で、また調練場に戻り……。

「開け『崩れ逝く魂』」

また、さっきみたいに『崩れ逝く魂』を開き、静観し始める。

（割と暇だなく。あ、そうだ。アーティファクト開いてんだし武器貯めでもするか）

暇なので俺は武器貯めをする事にした。

どっちにしろ、今度兵達に武器をやるつもりだし、丁度良いと思っ
たし。

……銃誰かに持たせようかな？
悩みどころだ。

「それにしても、昨日の夜からアーティファクト開いてんのに魔力
枯渇しねえな。やっぱ魔力量チートなんだなー」

自分の魔力量を再確認しつつ、武器をどんどん造っていく。

……

……それから六時間後。

「武器入れも終わったし、華雄も大体出来上がったみたいだしそろそろ戻るか」

華雄は計十時間精神が崩壊しないように、心を強く持った結果、それなりに精神が強くなったようだった。（前の華雄より利口になり、尚且つ短気じゃ無くなった）

「閉じろ『崩れ逝く魂』」

もう外はだいぶ暗くなっていた。

……一日丸々精神修行に使ったのか……。

「ん？どうしたんだ王偉？」

「今日はコレで終わりだ。明日から戦闘訓練に移行する」

「分かった。それじゃあ、また明日頼む」

と言って華雄は去っていった。

「アベアット。……………はあ…。明日からは、鍛練・書類・華雄の修行の三つか…。安請け合いするもんじゃねえなあ…。俺自身の鍛練全く出来ねえじゃねえか……」

軽く愚痴を言いながら俺は自室に戻っていった。

恋姫編・第捌章 華雄の精神強化だぜ！（後書き）

ジュン「うーん。修行ばっかじゃ書いてて中々面白くない」

迅「お前主観か？」

ジュン「うん。ってか、キャラ放っておく事になっちまったよー」

迅「鍛練しかしてないからな」

ジュン「個人の鍛練は出来てないけどな」

迅「そうなんだよ！それが今の悩みなんだよ！」

ジュン「鍛練好きなのか？」

迅「無論！生涯現役が俺の座右の銘だ！あと粉骨碎身もな！」

ジュン「熱血だな」

迅「違うぞ！熱血ではない！ただ負けるのは嫌いだという事だ！」

ジュン「ああ、負けず嫌いか」

迅「そうだ！絶対負けねえ！絶対だ！」

ジュン「……………もしかして、造物主に負けたの根に持ってる？」

迅「当たり前だ！次はぜってえ叩き潰す！！」

ジュン「迅の負けず嫌いが発覚したところで今回は締めかな」

迅「オッケー。今回はコレで終了だ。次回も見えてくれると有り難いです！！」

恋姫編・第窮章 俺の軍、よくよく考えりゃだいぶ気持ちワリイ（前書き）

多分次から反董卓軍に入って、その後からはストーリーはオリジナルになると思います。

恋姫編・第窮章 俺の軍、よくよく考えりゃだいぶ気持ちワリイ

翌日……。

最近一個の生き物と化している俺の部隊の元に向かう。

俺の部隊は周りから見たら、激しく恐怖を覚えるような異様な団結力だろう。

実際仕切っている俺ですら恐怖を覚えるくらいだ。

一般の兵からしたら、俺の部隊は真剣に怖いだろう。

『お早う御座います王偉上官!』

全く言葉のタイミング・スピードを同じにして同時に喋る俺の部下達……。

もうコイツら精神同調してるんじゃないのか?

それか、心ん中読めるか。

『お生憎様ですが上官殿!我々は思考は読めません!』

……イヤイヤオイオイ。

読んだよな?今読んだよな?

『そう言いたそうな顔をしていられたので!』

……え？何コイツら怖い…。

読心術を会得してるとは思わなかった。

「何で読心術なんて持ってるんだ？」

『基本技術です!!』

……何処の世に読心術が基本スキルの世界があんだアアアア!!
そんな世界いらねエよオオオオ!!

……
……

『ムッ…今お前はコレが欲しいと思ったな』

『貴様は200円でなら譲ってやろうと考えてるな』

……
……

そんな世界嫌だアアア!!
ンだよその世界!

だいぶ苛立つ。ってか、寧ろ殴る。

『阿吽の呼吸なら出来ます!』

「前やってただろうが」

『そうでした。てへっ☆』

……殺す。

『調子に乗ってすいませんでしたアアア!!』

全員で流れるように綺麗な土下座をする。

うむ、及第点だな。

「まあ良い。お前ら、昨日鍛練した奴は手を上げろ」

全員が挙手する。

「もし嘔吐してたなら……コロス」

全員が手を下げる。

……お前ら…。

「処刑な。今から一時間。地獄を見ようか」

我ながら凄く良い笑顔で兵達を見たと思う。

兵達は揃って肩をブルブル震わせ、顔を青くしていた。
全く失礼な奴らだ。

……で、一時間。

兵達は地面に伏せ、一步も動かなくなっていた。

「……休みだと思って鍛練をしないとは不屈き千万！自らの力の
無さを自覚し、更なる鍛練に励め」

『……はい。申し訳ありません』

口だけ動かして、それからピクリとも動かなくなる。

「今日は解散だ」

『……了解』

そして奴らは屍となった。

……まあ生きてるが。

……次は、華雄の鍛練か。
行きますかね。

「……………さっさと行きますかね」

着くと、華雄は先に自主練をしていた。
うむ、殊勝な心掛けだ。
だが、やり方が悪い。
アレでは、ただ振ってるだけだ。

「よう華雄」

「王偉。来たか」

「じゃあ、鍛練を始めるぞ」

「ああ。分かった」

華雄の今足りないものの一つは補った。

次は、周りを見て最善手を把握できるようにするための技術を得なければな。

「華雄。戦いの中、相手を見て動きや癖を把握してみろ。ソレが出るようになった時、お前は更に強くなれるだろう」

「分かった」

戦いの勘などの技術を手に入れる為には、やはり実践で手に入れるのが最も効率が良い。

机上でこそ実力を発揮するインドア極まりねえヤツもいるが、やはり戦いは実践だ。

「それでは、鍛練を開始する」

さて、華雄は戦いの中で成長できるかな。

……結果から言おう。

華雄は成長出来た。

やはり才能があるらしい。

俺からしても、華雄が強くなってくれたのは嬉しい。

「華雄。取り敢えずコレでお前は今までより遥かに強くなった筈だ」

「精神訓練と技術訓練をただけなのにか？」

「そうだ。後は、自分で足りないトコを考えて鍛えると良い。最後に言うなら、常に冷静にいろ。何を言われても心の片隅は冷静に保て。全て冷静さを失えば、攻撃が単調になり、等しい実力を持っていたとしても敗ける。だから……常に冷静にだ」

「分かった」

コレは、俺にも言えるかも知れない。

……が、流石にそこまでキレる事は無いと思う。
多分だが。

「そうだ。華雄。俺の真名は迅だ」

「……………そうか」

ん？華雄がなんかテンション低い。

「迅と呼んでくれ」

「……………私には真名がない」

……この世界では初めて会ったな。
真名がない人には。

「そうか。だが、真名がなくとも、俺の事は迅で良い。華雄は華雄だ。真名があらうと無かろうと些細な事だろ」

「些細なことでは無いんだが……………はあ。王偉が言うと、何故だか本当に些細なことに思えてくるな」

「それは良かった。取り敢えず俺は詠の手伝いに行くからじゃあな？」

「ああ、また今度手合わせ頼む」

「分かった。いつでも相手してやるぜ？ただし、強くなれよ？」

手合わせするんなら、本当に強くなって欲しいからな。

…で、次は詠の手伝いをする為に、詠のトコに来た。

「遅い！」

「スマンな詠。部隊の鍛練と華雄の鍛練があったから遅くなった」

「そう。そういえば、アンタあの部隊に一体何やったのよ？息が合
いすぎてて気持ち悪いんだけど」

「ああ、アレか。別に。仲良く地獄を見せてやったただけだ」

サラッとなんか事を言う。

「はあっ！？地獄ってなによ！」

…………その後、詠に怒られた。

『兵達が使い物にならなくなったらどうする気よ！』みたいな内容で怒られてしまった。

……ただし、俺は後悔も反省もしないぞ！

「…………はあ…。もう良いわ。取り敢えずコレやりなさい」

やはり山積みの書類…。

武官の仕事してきた俺に更に鞭打つ気ですか？

「少なくしてくれたりは…………」

「無いわね」

バツサリ切り捨てられた。
俺が何かしたってのか！？

「……はあ、分かった。やるよ」

女の子の願いを断れない悲しい俺（仲間内のみ）は、詠に馬車馬のごとくキリキリ働かされたのだった。

恋姫編・第窮章 俺の軍、よくよく考えりゃだいぶ気持ちワリイ（後書き）

ジュン「キッチリ二日に一回の更新になってんなー」

迅「昨日更新出来なかったんだな」

ジュン「仕方無いジャマイカ！」

迅「色々どうしたお前」

ジュン「昨日同じ時間に入ったバイトのヤツが勝手に逃亡しやがったんだよ！」

迅「……ドンマイ」

ジュン「そのせいで更新できなかったんだよ！なんて無責任なヤツジャマイカ！」

ドカツ！

迅「ワリイ。流石にイラツと来た」

ジュン「お、おふう……。流石にこの喋りじゃ腹が立ったか…」

迅「かなりな」

ジュン「…申し訳ありませーん。ってか、何でかまた新しい小説投稿してたっていう謎」

迅「自分でやったんだろうが」

ジュン「気付いたら書いてたんだ……。激しく謎だと思うんだ」

迅「お前の頭がな」

ジュン「久しぶりに酷くない？」

迅「疎かになるだろうが」

ジュン「大丈夫。ネタ切れになるまで更新は出来るから」

迅「ネタ切れになるのか？」

ジュン「なるかもね。まあ、今は大丈夫かな。つと、時間時間。締め頼みまっせ」

迅「オーケー。次回も見てくれると有り難いです！」

何となくシリアスに挑戦したんだけど……シリアスさが一瞬しか存在しない。

……シリアス苦手なのかな……。

次から泗水関です！

や、やっとなら董卓連合まで来た…。

取り敢えず、五胡までって票が多いんで五胡討伐までします。

迅がいるんで、その分修正力働いて五胡は強くなりますが……。

取り敢えず、全員無事生還させて終わらす気です。

漸くと言うべきか。

反董卓連合が結成されたようだ。

率いるは阿呆の袁紹・袁術。

策など一切使わぬ阿呆だ。

しかし、時に戦いは阿呆が最も脅威となる場合もある。
気を付けなくてはな。

「詠、呼んだか？」

俺は詠に呼ばれて来ていた。

理由は言わずもがな反董卓連合の事だろう。

「ようやく来たわね」

「お、今回は月と詠の二人なのか？」

「後で全員来るわよ」

「了解。用件はアレだろ？反董卓連合」

取り敢えず直ぐに本題に入る事にした。

「ええ。その通りよ。泗水関と虎牢関の配置を決めようと思ってね。参考程度に迅の意見を聞かせなさい」

「泗水関には、俺と華雄、霞と呂布で出る」

「それだと虎牢関の方の守りは無いじゃない」

「虎牢関は泗水関が落ちそうになった時点で、俺以外のヤツが退き、態勢を整えまた迎え撃つ」

ヤバくなったら久し振りにマジで戦い合えば良いしな。暗器の溜めもあるし、一気に放って火力で圧倒するか。久し振りに体を軽く出来るしな。

「アンタはどうすんのよ？」

「足止めをする」

「そ、それじゃ危ないです！」

「月のいう通りよ。迅、アンタ死ぬ気？」

失敬な。

俺を嘗めちゃいかんぜ？

多分だが、この世界じゃ火力で並ぶヤツはいないと思うんだ。

「そう簡単に死にはしないさ」

第一不死だし。

真祖の吸血鬼だし。

……って、もしかしてネギまの世界の真祖の吸血鬼のままで来てるけど、型月とか行ったら型月の真祖の吸血鬼になるのか？

世界にあった真祖の吸血鬼に変わるんだったら、型月の世界に行ったらキツそうだな…。

「でも！」

月はどうやら心配なようだ。

「取り敢えずその策は却下よ」

「何でだ？」

「アンタ死ぬ気じゃない」

「死なんよ。不死だからな」

もう嫌われても良いから、コイツラを助けられれば良いと思った。
第一、人じゃなくなった俺を仲間だと思ってくれるヤツなんてナギ
達かエヴァくらいかもな。

……勝手になったんだけど。

真祖の吸血鬼の衝動出た事無いけど。

「は？」

「俺は化け物だ。だから死なない。仲間なんて思ってくれなくていい。騙されたと憎んでくれたっていい。だから………行かせ
てくれ」

今までの世界と同じで周りから違う異端者は嫌われる。

どこの世界でも大体同じだが、この世界にマジの人外はいない。

それが現れたんだ。

嫌われるに決まってる。

「却下よ」

「は？」

話を聞いて無かったのか詠は？

「アンタはボク達を薄情な奴とでも見てたの？ アンタが人じゃないから切り捨てるほど腐ってないわよ。それに、そんな事言ってる暇あったらもっと働きなさい」

……詠は鬼か！？

後半言ってる事で前半台無しだぞ！？

「そうですよ！」

同感！？

月も俺を更に馬車馬のごとく働かせたいのか！？

「私も詠ちゃんも、迅さんが何であろうとも思いません。興味ありませんし、関係ありません」

………苛めですか？

少しは興味持って欲しいし、関係ないって酷くないか？

「だって迅さんは迅さんですから」

「ま、そういう事よ。コレは、恋も霞も華雄も変わらないと思うわ」

………地味に陳宮が外れてるんだが。

あと、天和達も。

「………ありがとう二人とも」

ちっとグッと来た。

「けど、泗水関には出るからな？その代わり、絶対死なねえし、絶対帰ってくる」

「なら良いわよ」

………最初からこう言ってるや早かったな。

「……で、霞、恋、陳宮、華雄。いつまでそこにいるの?」

ふと見ると、扉から出てる四つの頭。

……気配読み損ねたー!?

思いつきor zなポーズをとる。

「安心しい! ウチも気にせんで」

「私もだ」

「……恋も」

「ねねもです」

出てきて口々に言っていく四人。

四人とも別に良いみたいだ。

「取り敢えず、迅の案を採用する事にしたわ」

「マジで!?!」

さつきと変わった!?

「全員まず泗水関に行く。この際の兵は少しで良いわ。泗水関が落ちそうになったらそのまま後退して虎牢関で迎え撃つ。泗水関の時は、むやみに突撃せず討って出るのは控えて」

華雄が手をあげる。

冷静になってくれたみたいで嬉しいねえ。

「私達に守りに徹しておけというのか？」

「そうなるわね。遠征してくる連合軍の弱点は補給ただ一点。泗水関に籠って兵糧が尽きるのを待つ。兵糧が無くなれば、連合軍は退却を余儀なくされるわ」

「我が武を披露出来ないのは、武人として悲しいが、それが作戦だと言うなら仕方無いな」

「なんや華雄？今までの華雄やったら『何故この私が亀のように甲羅にこもり、頸を隠してなければならぬ!』とか『武人は自らの武を敵味方に披露しなくてどうする!砦に籠っているだけなど武人としての矜持が許さん!』とか言いそうなのに。……ああ迅の陰やな」

ニヤツと笑い、華雄を弄る霞。
華雄は顔を赤くしていた。

「なっ……！ち、違うっ！私は元々冷静だ！」

……………どこら辺がでしようか？

華雄のビックリな発言に突っ込みつつ、静観していた。

「ほら、さっさと話を進めるわよ」

「そういえば、詠もなんや丸うなった感じがするな」

「なっ！そんなわけ無いでしょ……！」

詠も顔を赤くしつつ、霞に言い返す！

「霞も最近お酒少なくなったみたいじゃない！」

「そ、それは全然関係無いやん」

そう言いながらも、霞は少し顔を赤くしていた。

「ゆ、月も最近えらく積極的っちゅーか更に明るくなったやん！」

「…………へう…／＼」

月も顔を赤く……………って何このカオス。

「ほ、ほら、話を進めるぞー！」

取り敢えず早めに話を進める事にした。

「決戦まではあと…………何日だっけ詠？」

「大体あと二日ね」

「オッケー。あと決戦までは二日だ。俺らは泗水関で必ず敵を退ける。その覚悟は良いか？」

三人に聞く。

「勿論やで！」

「当たり前だ！」

「……うん」

三人とも覚悟はあるみたいだ。

「取り敢えず討って出ないようにな。解散！」

何故だか俺が仕切ってしまったがまあ良いだろう。

「ありがとう皆。皆は絶対守るから。危なくなったら名前でも呼んでくれよ？」

そう言ったら皆返事をしてくれた。

……さあ、一刀。

そして、敵の兵共よ。

俺を退ける事が出来るか？

ジュン「今回も二日に一回！やっとの反董卓連合！頑張るぞ！」

迅「質問。俺ってこんなに色々考えてるヤツだったのか？」

ジュン「そりゃあ、それなりに考えるようになったさ」

迅「真祖の吸血鬼って嫌われるのか？」

ジュン「ああ。なんせ人とは違う部類に入るからな。吸血鬼とかそう言った見た目変わらないのに人じゃ無いものは嫌われるだろ」

迅「………神んトコ行って真祖の吸血鬼じゃ無くしてもらってくる」

ジュン「いや行けねーだろ」

迅「そ、そうだったー！！…まあいつか」

ジュン「諦めはええ!？」

迅「反董卓連合時ってどうすんだ?まさかの皆殺しか?」

ジュン「流石にそんな血生臭い事させんさ。丁重にお帰り願うさ」

迅「…なんか嫌な予感が…:まあ良いか」

ジュン「あ、取り敢えず締めよう」

迅「ああ。次回も見てくれると有り難いです!」

恋姫編・第拾巻章 泗水関（上編）

反董卓連合に会ってみたけど……一刀オタ

さあ、始まりました泗水関編！

この後は取り敢えずオリで進みます。

これから先は、三国じゃなくて四国なので史実からも離れると思います。

それから二日後……………。

俺達は泗水関に来ていた。

泗水関に出る時に月、詠、天和、地和、人和から一言ずつもらって出てきた。

因みに、今回月と詠は逃亡準備はしてない。

詠曰く『勝てるでしょ』だそうだ。

……ホントに負けられねえな。

久し振りにマジでやるのか。

そう言えば最近殺気とかそう言った類い使ってないな。

……久し振りに使うのかな？

「なあ霞」

「ん？どうしたんや？」

「ちと出てくる」

反董卓連合の面々と顔合わせしないなとな。

「は？」

「とうっ！」

気配を消して飛び消えた。

で、そのまま反董卓連合の拠点に向かう。

「……見えた」

即拠点にたどり着き、気配を消して作戦会議している天幕を探す。
その手際は某蛇も青い顔してビククリするくらいだ。

「……アレか」

どの天幕より大きく、それでいて警備もそれなりに厚い。
…でも少ないか？
たった六人とは…。

「……行くか」

縮地で一気に距離を詰め、まず三人の意識を刈り取る。
残りの三人にはまだバレてない。
……いけるな。

「……………フツ…」

残りの三人の意識も首に手刀を当て刈り取る。

……………脆弱すぎる。

「……………入るか」

気配を完全に消して中に入る。

生憎と誰にも気付かれなかったみたいだ。

その気になれば、本気で誰にもバレないと思う。

……だが、此処でバレないと言うのは、此処に來た意味が無い。

「さてさてこんにちは」

俺に注目が集まる。

因みに俺の格好は、赤い羽織……背中に王の字が書いてあるが、無視してもらいたい。だってコレ月と詠に貰ったんだ！

どんなんでも着ますよ！

それに、黒い着物、着物にも合う赤いズボンだ。

わー、赤づくめだ。

「あなた何者？」

一刀の前にいる金髪ツインテール（巻き）が問う。
……まあ曹操って分かってるけどね。

「お初にお目にかかる。俺の名は王偉守義。天拳とでも言うべきか」

「あっ！お前あの時の！？」

あの時？

……ああ、天和達助けた時か。

「初めて会ったな北郷一刀」

「何で俺の名をつ！？」

当たり前だろう。

お前は物語の主役なのだからな。

……曹操達が敵意満々だったが無視する。

「なに。お前も俺も元は現代から来た存在。知らぬワケが無いだろう」

我ながら筋通ってないと思う。

「お前もなのかつ!？」

「ああ、まあ俺はその前に異なる世界を巡った者だがな。コレで分かるかな？」

取り出したのは、俺の仮契約カード。

「なっ!？それは仮契約カード!？」

……知ってるんだな。

意外。ってか、オタク気味？

「それに、こんなモノもある」

取り出したのは、黒い鉄の塊……まあ、ようは銃だ。

銃は、ガトリングでこの前製造した。

「な、何でそんなモノ持ってるんだ!？第一どこから出したんだ!？」

「そう身構えるな。此処ではやりはせぬよ。コレは暗器」

もう暗器ってレベルじゃ無いがな。

で、その暗器を戻し、裾から様々な武器を飛び出さす。

「そして、俺の中には数千万程の武器が入っている」

「なっ！そんなに入るわけが無いだろ！」

「聞けよ。……第一他のヤツも身構えるな。俺は軽く見学しに来ただけだからさ」

他の奴らも異様に警戒していた。

「……まあ良い。北郷一刀。俺はあの世界の紅き翼と行動を共にし、そして英雄となった。『武神』と呼ばれる程にな。この事実だけでお前には俺の規格外さが理解できる筈だ」

「…おいおいマジかよ……」

一刀は理解できたみたいだ。

……マジでオタク気味んなってる？

「俺は基本的に女性とは戦いたく無いんだがな。……仲間の手を出すってんなら手加減は一切無しだ。覚悟して来い」

そう言って俺は飛び去った。

……孫策は良い目をしていた。

…毒矢の件は生かしてやるとするか。
くだり

で、戻ると作戦会議をしていた。

「おおー。どうなった？」

「取り敢えず待機やな……って迅！どこ行っとなんや！？」

「ん？観察？」

「……はあ…。迅は自由人やな」

否定しないぜ！

…まあ、そこまで自由人でも無いと思うけど。

「じゃあ俺が砲台を勤めるぜ！」

「砲台ってなんや？」

「槍投げだぜ！」

グッとサムズアップする。

「取り敢えずアデアット」

アーティファクトを取り出す。

「創造……鉄杭」

サイズは……大体直径一メートル。
長さは三メートルくらいか。

「……………槍ってサイズや無いと思うんやけど…」

「気のせいだ！」

やっぱサムズアップしといた。

……取り敢えず100個くらい作れば良いかな？

で、百個製造し終わった。

我ながら早いぜ！

「アベアット」

アーティファクトを戻して、敵を待つことにした。

「ふう……」

座って胡座をかくと、後ろから声をかけられた。

「迅」

「んあ？」

我ながら間抜けな返事だが、顔を上に向ける。

「おお、華雄か。どうした？」

「討って出たいんだが——」

「ダメだ」

「——我慢すると言おうと思ったんだが……」

華雄だから『私はやっぱり討って出るぞ！』と言おうと思ったんだが。

「迅、もし相手が挑発してきたらどうすれば良い。私は我が武が貶されるのは我慢ならないんだ」

……そういう事ね。

「その時は軽く聞き流せ。所詮戯れ言だ。華雄の武は俺が保障する。前より強くなった。心も力もだ。だから腹は立つかも知れないが我慢してくれ」

「……フツ……。助かった迅。だが、迅も武を貶されては腹が立つのでは無いか？」

「いや、俺は別に武を貶されたくらいでは腹を立てんよ。所詮戯れ言。自らの武には自らが自信を持っていれば良い。ただそれだけだ」

ホントに大抵の自分の事では怒りませんよ俺は。

……昔はキレたけど、多少大人になったんだよ！

けど、仲間貶されたらキレるかもしれない。

まあ……それは仕方無いよな。

「ではな迅。兵の準備も整えた方が良いと思うぞ？」

………忘れてた。

はあ……俺の軍全員連れてきたけど、どうさせようかな……。

取り敢えず、俺の部隊のところに移動する。

『お疲れ様です！王偉上官！我らは如何すれば良いでしょうか？』

……………相変わらずのシンクロ度だな。
マジでこええ。

「取り敢えず防御だ。後は指示する」

『はい！』

「取り敢えず、だ。絶対全員生き残れ。コレは勝つ為の戦いじゃない。生きる為の戦いだ。命を軽く見るな。お前らの命は一つずつしかない尊いモノだ」

『王偉上官ー！ー！一生上官に着いていきますー！ー！』

あ、それは勘弁願いたいです。
だって怖いんだー！ー！

「取り敢えず解散だ」

『はい!!』

俺はまた、砦の屋根へと向かっていった。

ジュン「俺の小説はノリと勢いで出来ている！」

迅「うおっ！なんだよ急に！？」

ジュン「俺はその日のノリで小説を書いたりします。一応それなりに性格破綻しないようにはしてるんだけど……色々変わったちゃう」

迅「どの程度にだ？」

ジュン「迅の性格は世界移動時からその世界の繋がりを重視するようになって、且つ仲間を貶す敵にぶちギレるようになった」

迅「む……。別にそれくらい寧ろ良いくらいじゃないか？仲間は大事だろ？」

ジュン「戦士は冷静さを欠く事によって通常より数段実力が落ちる。……まあこの世界じゃ冷静じゃなくても差は歴然なんだがな……」

迅「そうなのか。やっぱパワーバランスおかしいぞ。どうすんだ？」

ジュン「どうしようか？ 取り敢えず俺はお前の部隊の副官を出した
いんだ」

迅「そんなヤツいるのか？」

ジュン「考えてはいるぞ？」

迅「どんなんだ？」

ジュン「副官は………現在検討中？」

迅「考えていないのかよ！？」

ジュン「イエスイエス！ 取り敢えず締めな」

迅「オーケー。次回も見えてくれるとありがたいです！」

先に言わせてください……。

春蘭好きな人すんませんっしたあああ！

……でも、そうこう言ったら誰とも戦えない気がしたり。

大丈夫です！

誰も死なせません！

……理想主義だねー。

俺が砦の上に着くと、四人とも上に来ていた。

「どうした？」

「……………来た」

恋の言う通り敵が攻め始めて来ていた。

誉めちぎったのか、阿呆の袁紹、袁術の兵も来ていた。

「よし！なら、俺の砲台としての威力を見せてやろう！」

積み重ねてある鉄杭を手を持ち言う。

「ふう…」

目に気を通し、視力を向上させる。

……………あそこら辺に撃つか。

「オラッ！」

ヒュー……………ドガアアア！！

「んー、我ながら素晴らしい威力だ」

「き、規格外やな」

敵の一角を全て吹き飛ばした。

「よし、第二弾層装填！」

とか言いながらまた鉄杭を担ぐ。

「次は袁紹らへんのトコに…………オラッ！」

袁紹付近の天幕に鉄杭を一本…………二本…………三本放つ。

三本目には文字を書いた。書いた内容は『臆病者の袁紹さん。臆病風吹かせてさっさと帰りなさい』だ。

「次は袁術だなつと……オラッ！」

次は袁術に鉄杭を投げる。

三本放って、やっぱ三本目には『臆病者の袁術さん。臆病風吹かせてさっさと帰りなさい』だ。

ホント虐めっばいな。

「なんや、ホント迅が敵やのうて良かったわ……」

「褒め言葉ありがとさん」

とか言っていたら、いつの間にか相手の将……確か……夏侯惇が来た。

やっちゃったな。近くの敵確認してなかった。

単騎？もしかして、あの時の挑発イベントか？

原作では、関羽が張飛、または孫策の誰かの出番だったような……。

「華雄……！私と勝負しろ……！」

……直球極まりねえな。

ホラ、そんなアホの子みたいな事言うから、華雄も『は？』って顔してるだろ。

けど、前の華雄から比べると変わったよな……。

前だったらアレでも『良いだろう!』とか言って出てたよな。

「勝てないからって砦に引きこもるのか華雄!!」

ピクッ…。

華雄が一瞬震える。

決め付けてかなり腹立つよな。

多分、華雄が精神修行積んでなかったら行った気がする。

まあでも、禁句とか相手が言ったら華雄が出ても、俺が出てもしょうがないと思う。

「華雄。大丈夫か?」

「あ、ああ。冷静にいないとな冷静に……」

素晴らしいぞ華雄!

感動した!

お前がそんな事を言えるまでに成長したなんて!

一時の師匠として、弟子の成長は本気で嬉しいぞ!

「まあ良い!なら王偉!貴様はどうだ!アレほどの大口を叩いたのだ!華雄のように臆病者では無いだろう!」

ピキッ

「……我慢ならん！おのれ頸を刎ねてくれるわあああ！！！」

「待て華雄！！落ち着け！！！」

華雄を抱き締めて止める。

流石にアレは怒るのも理解できる。

けど、もうちょっとだけ我慢してくれ。頼むから。

……コレで止まらないなら禁句って事で諦める。

諦めて華雄を全力でサポートする。

「……………そうだな…。わ、私は大丈夫だ…」

華雄はなんとか落ち着きを取り戻してくれたようだ。

「なんだ王偉！貴様も所詮口だけの臆病者か！！なら永遠にそこで臆病風に吹かれて縮みこまっているんだな！！！」

ビキッ…

「やはり我慢ならん!! その頸刎ね落としてくれるわああ!!」

「だから待てつつうに華雄!!」

後ろから華雄を抱き締めて押さえる。

「ええい! 止めるな迅!! あの馬鹿女はお前を馬鹿にしたんだぞ!」

「俺は大丈夫だっつーの! 華雄! 取り敢えず落ち着いてくれ!!」

俺の事で怒ってくれるのは嬉しいけど、取り敢えず落ち着いて欲しい。

俺の事を貶すのが禁句だったら嬉しいんだけど、俺より怒られるとなんだか俺が冷めてるみたいだし。

「……ハア…ハア……。もう大丈夫だ迅」

「華雄も落ち着けるようになったな」

「お前は大丈夫なのか!？」

華雄が聞く。

あ、やっぱまだ落ち着ききってない……。

「アホ、ウチも恋も腸煮えくり返るぐらい腹立ってるわ。でも、迅が怒っとらんのにウチらが怒ってもなあ」

「……………我慢」

「おー、偉いな三人ともー」

取り敢えず撫でてみた。

三人とも顔を赤く……………ああ、和むなあ。

思わず顔が緩んでしまう。

って今戦闘中だよな？

「って今戦闘中じゃん！」

とか言ってたらまたアホの子……………夏侯惇の声が聞こえてきた。

「本当に董卓軍は臆病者の集まりだな……！」

……………ブチッ……！

今度は俺のドツボに来てしまった。

仲間を侮辱するのか？

月も詠も霞も恋も華雄も陳宮も天和も地和も人和も馬鹿にするんだな？

そうか。お前は死にたいんだな？

俺の禁句を口にしたって事は、死んでも何も言えないよな？
女？そんな事関係ない。

俺の仲間を侮辱するヤツは処刑だ。

一刀のモノを壊すのは些かアレだが、俺はもう止まらない。

「あつたまきた……ブチコロス……」

（Anotherサイド）

『本当に董卓軍は臆病者の集まりだな！！』

この言葉で全ての状況が変わった。

さっきまで霞、恋、華雄の頭を撫で、柔和な笑顔を向けていた青年

…王偉守義、本名神影迅の雰囲気、顔付きに変化が起きた。

「あつたまきた……ブチコロス…」

そう言う王偉からは、息すらも忘れてしまう程濃密で、それでいて圧倒的な殺気が放たれていた。

王偉の顔付きも普段のようにどこか優しげな顔をしておらず、その目には夏侯惇をただ一点に見詰め、それ以外目に入らないかのようになっていた。

「チツ……。俺の仲間を散々馬鹿にしやがって……。臆病者だア？ フザケルナ……。良いぜ。挑発に乗ってやろうじゃねェか！」

王偉はそう吐き捨てると、夏侯惇のトコまで飛び去っていった。

残された三人は、あまりの王偉の豹変さに戸惑っていた。

「……………」

一時の沈黙……。

そして、三人は気付いたかのように顔を上げた。

「…迅のトコに向かうで！」

「…うん」

「ああ！」

三人はそれぞれ自分の軍を出撃させるために部隊に向かっていった。

（END）

俺は、夏候惇のもとに一瞬で近付いた。

……………ああ、久し振りに血が煮えたぎる。

怒りが抑えられない。

殺意が抑えられない。

いつからだ？

こんな感覚にならなくなったのは？

死んでからか？

戦場から戻ってからか？

分らない。

そんな事は良い。

今日の前にいるのはダレだ？

挑発とはいえ仲間を侮辱した、敵だ。

だからクロスのか？

理由はなんだ？

決まってる。

仲間を侮辱した罪だ。業だ。

故に……オレが殺る。

ジュン「何かここから巻きで行く気がするなあ…」

迅「何でだ？」

ジュン「五胡ってどんなだっけ？ラスボスみたいなのだとは覚えてるんだけど…」

迅「まさか忘れたのか？」

ジュン「イエスイエス！うう……誰かどんなにか教えてー！」

迅「……」

ジュン「無言！？ってマジヤバイよ！？五胡ってマジどんなんぞー！ー！！」

ジュン「ギャーわかんねー！」

迅「壊れだした!？」

ジュン「壊れた幻想!」
ブローケンファンタズム

迅「どうしたお前!？」

ジュン「いや、気分……」

迅「そうか」

ジュン「取り敢えず締めよろしく」

迅「ああ。次回も見えてくれると有り難いです!」

ノリで書くと話が進むね！

……中二病の説明見てワロタww
なんすか高二病とか大二病ってww

迅は中二病に入るのかなあ？
俺的には大二病（丁寧な中二病）らへんだと思います（・ω・）
キリッ。

……いや、アーティファクトとか見たら中二病か。

「……挑発に乗ってやったぞ……夏侯惇」

静かにそう告げる。

俺は、激怒してすぐ表は冷静になるといふなんかワケわからん性格を備えている。

「…ッ！」

「どうした。そんなに怯えて。怖いのかオレが。オマエが、臆病者と言った董卓軍が」

「ッッ！！」

俺が前に進むにつれ一歩ずつ退く夏侯惇。

「口だけか、夏侯惇。何を怖がる。何を恐れる。何を感じる。オマエの前にいるのはダレだ。オレだ。オレを恐れているのか。オマエが馬鹿にした董卓軍の将を」

「ツツ!!…うおおおおお!!」

一念発起し、俺に突撃してくる夏侯惇。

………遅い。

もはやその動きはコマ送りにか見えない。

オレは夏侯惇の頭を掴む。

「遅い、軽い、実に脆弱。吐き気がする。もういい。その血を持って我が仲間を侮辱した罪……償え」

そして、ヤツの頸を刎ねようとする………矢が割って入った。

（春蘭（夏侯惇）サイド）

私は華琳様から『春蘭。砦から誰でも良いから出させて、張遼を捕縛してちょうだい』と言われた。

私は二つ返事に華琳様に了承して行こうとすると、一刀に呼び止め

られた。

一刀が言いに来たのは忠告で『王偉は格が違うから手を出すな』みたいな事を言っていた。

勿論私はそんな一刀の言葉は信用せず、華雄と王偉の二人を出させるように仕向けた。

……そして、王偉を誘き出せた。

後は、私が王偉を倒し、そして張遼を手に入れるだけだった。そうすれば華琳様と閨に……。

と、そう思っていたのも王偉が来た瞬間変わった。

「ッ！」

鮮明に私の体が目の前にいる男……王偉に貫かれる様子が見えた。

（なっ……！）

しかし、私の体は無傷。

けど、さっき体を貫かれたような痛みを感じた。

……まさか：私がコイツの殺気に吞まれたのか？
そんなはずはない。

絶対だ。

そう思ってる筈なのに体は王偉が一步前に進む度に恐れるように身を退いていく。

「口だけか、夏侯惇。何を怖がる。何を恐れる。何を感じる。オマエの前にいるのはダレだ。オレだ。オレを恐れているのか。オマエが馬鹿にした董卓軍の将を」

もう人とは思えない濃い殺気。

それに、まるで狂ったかのような言葉に恐怖を覚えた。

コイツは、コイツには勝てない、敵わない、殺される。

本能的に、直感的にそう思った。

「ツツ！！…うおおおおお！！」

もしかしたら逃げる隙が見付かるかもしれない。

どうなるか分からないが、何もしないで殺されるよりはマシだ。

しかし、そう思ったのもつかの間、私の頭は王偉に掴まれた。

「遅い、軽い、実に脆弱。吐き気がする。もういい。その血を持って我が仲間を侮辱した罪……償え」

向かってくる手刀。

……華琳様、秋蘭、一刀……！

死を覚悟した時、矢がソレを阻止した。

「……秋蘭！」

私を助けてくれた妹の名を呼ぶ。

（END）

「秋蘭……！」

夏侯惇がそう叫ぶ。

……邪魔したのは夏侯淵か。

「邪魔したな。良いだろう。オマエも敵だ。オレの邪魔をする敵」

夏侯淵の気配を探す。

矢が向かってくるが、拳で撃ち落とす。

「見付けたぞ」

「クッ…」

「遅い」

反撃しようとしてくる夏侯淵の頭を掴み、拳を構える。

「終わりだ…。……………まさか出てきてたのか!？」

僅かだが、俺を呼ぶ霞、恋、華雄の声が聞こえた。
そのおかげか、俺の怒りは吹き飛んでしまった。

「霞、恋、華雄……………!」

三人の声が聞こえた方向に全力で走り出す。

走って一分程で三人を発見した。

「無事か!!!」

「「迅！」」

「……見付けた」

三人は襲われてはいなかった。

……本気で焦ったのに…。

「迅！もう大丈夫なんか！」

「三人の声を聞いたら怒りが吹き飛んじまったよ」

ホント不思議だ。

「そうか。私に冷静になって言ったのに迅が怒るとは思わなかったぞ」

「悪い悪い。ちょっと譲れなくてね。それより三人とも早く戻るぞ！」

「ああ！分かったで！」

「おお！」

「…分かった」

早く戻らないと砦は一気に攻め落とされる。
そうはさせんぞ！

「見えた！……ッ！アイツラ…」

俺が目にしたのは敵兵から連携しながら戦う俺の部隊だった。
俺は更に足を速める。

『王偉上官！』

「死傷者はいるか！」

『今はいません！絶対死にません！』

「よし！お前らもすぐに退け！」

ホント言うようになったな。

「よし、ここは俺が食い止めよう。霞、恋、華雄もさっさと行け！」

とりあえず送り出す。

「冷静となった俺に死角は無いぜ？……さあ来い」

迫り来る兵共。

俺は高く飛び上がり、前の方に暗器を飛び出させる。

その暗器は地面を穿ち、敵を貫き、武器の壁と屍と血の海を作り出した。

正直、戦争を体験していてもこれには慣れない。

寧ろ慣れたとしたら、ソイツは人として破綻しているだろう。

「さて、お前らが戦うのは数多の武器を所持する者だ。お前らは俺を越えられるか？」

極めて平常に話す。

そして同時に俺は拳で線を引くように殴る。

「此処から先は……死地だ。この線を乗り越える蛮勇な者はこの先に来るが良い。ただし、俺は全力全壊で戦う。殺されてもいいモノだけ来い」

そう静かに告げる。

因みに、字面は間違ってる。

「殺して良いのは殺される覚悟があるヤツだけだ。そして、意味無き殺人はただの殺人鬼だ」

誰一人として出ないからそう静かに告げる。

……ヘタレ共が…。

※覚悟があっても殺人はダメですよ？この世界だからアリなだけです。

「私が相手しよう」

……関羽か。

俺と戦いあうか。

「良いだろう。関羽よ。必ずこの先は越えさせん。俺の守りたい者、場所があるからな」

「フツ……良いだろう。我が名は関羽雲長！天拳！貴様を倒し、桃花さまの……私達の願いを貫く！」

名乗る感じか？

……仕方無いな。

「やってみせろ関羽よ！我が名は王偉守義！俺はお前を倒し…仲間を、そして守りたい場所を守り抜く！！」

俺は拳を、関羽は青龍偃月刀を構える。

……どうでも良いが、史実では関羽は青龍偃月刀を、呂布は方天画戟を装備して無かったらしい。

方天画戟の方は微妙だが、青龍偃月刀は無かったとの事だ。

「はあああああ！」

関羽の青龍偃月刀が右から俺に向かう。

「フッ…」

青龍偃月刀を強化した拳で掴み、左のストレートを関羽に当てる。

……関羽は咄嗟に体を引いたが、衝撃は往なしきれなかったようだ。

「ぐっ…。まだまだあっ！」

関羽は地面を強く蹴り、一気に近付きました右から切りかかる。俺は、また刃を掴もうとする。

…が、フェイントを入れられ、右の蹴りが当たる。

「くっ…フェイントか！…こちらから行くぞ！」

気を拳に込め殴り、数多の閃光が煌めく。

それは大地を抉り、空気を歪ませ、そして関羽を襲う。

関羽は、十発中四発は避けたが、のこりの六発は命中した。

まあ、そのうち三発は衝撃を往なしたのだから、関羽の武人としての能力の高さが伺える。

「がっ…！ま、まだだ…」

足を震わせながら、ぼろぼろの体で立ち上がる。

ホントなら今の一撃で意識が飛んでもおかしく無い筈なんだが…。

「まだ…私は戦え…る…」

そうして意識を無くし、崩れるように倒れる関羽。

………気力のみで立つなんて関羽達の願いってのはそれほど大事な

モノなんだな。

とりあえずは生きてるようだし、後で治療するでしょう。

「とりあえず、兵共よ。逃げぬなら俺から行かせてもらおうが？」

『うわあああ！』

襲い掛かる兵共。

「シッ…！」

牽制程度に殴る……ってか、放つと言った方が語弊は少ないだろう。
気のレーザーを放つ（拳から）。

「フッ……フッ……」

兵が宙を舞う。

例えるなら、紐無し逆バンジーと言った状況だ。

「ハアッ……！」

前線の兵も数えるくらいとなり、また飛ばす。

どうやら、アレの中には阿呆の袁紹、袁術の両軍の兵の大半が出ていたらしい。

事実、兵が少なくなった両軍はやむを得ず退却していった。

それを皮切りに、諸侯も退却していく。

「関羽を連れてくか…」

倒れている関羽を肩に担ぎ、跳躍する。

「つと…」

少し着地に失敗しそうになったが、まあ転けはしなかった。

「終わったみたいやな迅」

「ああ」

「って、誰や？」

「関羽だ」

そう言ったら、霞が目を輝かせてたが、スルーする事にした。
多分、同じ青龍堰月刀を持つモノと戦ってみたいからとかだろう。
それ以外だったらどう反応したら良いか分からん。
マジ、レズとか言われても反応出来ないから。
多分原作と変わってるさ、うん。

「捕虜なのか？」

華雄が聞く。

まあ普通だったらそうだよな。

「いんや、ちっと治療してやるだけだ」

「…たまに迅は私の想像の遥か斜め上を突っ走るな」

……………呆れられてる？

まあ、それが正常な反応なんだろうけどさ…………。

「良いだろ？気分だよ気分」

「…………まあ、それが迅やもんなあ」

「……確かに」

なんか納得された！？

「まあとりあえず勝ったんだからさ。帰ろうぜ？」

「せやなー」

「そうだな」

「………うん」

そうして俺らは月や詠、陳宮の待つ洛陽に戻っていった。

ジュン「三日連続で更新とか久し振りだねえお祖父さんや」

迅「誰がお祖父さんだボケ」

ジュン「ああ、疲れたよパトラッシュ……」

迅「パトラッシュでもねえ」

ジュン「全く……ツツコミ属性手に入れてくれよー」

迅「その属性なんだっ！ つか、いらねえよそんな属性！」

ジュン「ついに手に入れたかツツコミ属性！」

迅「そんなんいらねエエエエー！！」

バキッ！

ジュン「まいけるっ！……燃えたぎれ俺のパトス！」

迅「最近壊れてきたなお前」

ジュン「良いんだよ。程よいからさ。ってそろそろモンハン3rdの発売日だぜ？マジ待ち遠しいって！……予約してないから学校サボって並んでやるぜ！実力テストの次の日発売日だけど全く関係無いぜ！」

迅「関係大有りだろ」

ジュン「高二だから、アリって事で！」

迅「ソレ言い訳なんのか？」

ジュン「なりやす！そして、モンハン買えなかったらorzしてるな！『オレオワタ……』とか言ってるな！」

迅「そこまでか！？」

ジュン「イエスイエス！……さて皆さん！モンハンやろうぜモンハン！」

迅「……ダメだコイツ……。それでは次回。見てくれると有り難い」

恋姫編・第拾肆章 洛陽に着いて関羽にエリクサー（仮）を飲ませてみた。（前

四日連続更新！

スゲェ！

俺にこんな力が……！

なんとなく言ってみただけです。

アーティファクトの説明後付けスンマセン。

何か違う小説の後に書いたからキャラが壊れてるような……。。

恋姫編・第拾肆章 洛陽に着いて関羽にエリクサー（仮）を飲ませてみた。

さて、洛陽に無事到着した董卓軍組十気絶関羽は、そのまま月&詠
&陳宮のところに向かった。

……………それにしても陳宮の真名まだ聞けてねー…。
いずれか教えて欲しいけど、いつになるかなあ…………。

「懐かしき洛陽の空気！」

「いや、ちょっと出てただけやないか」

霞のツツコミもいただいたし、早速城内に入りますかね。

「やー。月、詠、陳宮勝って帰ってきたぜ！」

「「迅^{さん}！」」

「恋殿ー！」

あ、陳宮は恋を期待ですか。

ま、陳宮は恋至上主義みたいだしね。
でもなあ……俺しかまだ出てきてないのに、俺ガン無視は酷いなー
……。

「ウチらもいるでー」

霞、華雄、恋も中に入る。

……いや、それは当たり前では…。

ああ、原作では華雄死亡、霞曹操軍、恋劉備軍だから違うか。
いやはや、この空間を守れただけで嬉しいね全く。

「無事で良かったです!」

月ホント嬉しそうだなあ。

「……………迅。その抱えているのは誰よ?」

さっきから肩の上に抱えている関羽にようやく気付いたのか!

「あー、関羽だね」

「捕虜なの?」

やっぱそうなるか。

いや、この世界じゃ俺がおかしいのかなー？

捕虜、奴隷の類いは嫌いだしな。

第一そんな手使わなくても勝てるし。

負けてもそんな手は使わんぞ！

「いや、治療してやるだけだ」

「……………はあー……。まあ迅速だししょうがないわね」

詠、お前もか！？

なにこの理解！？

泣くよ！泣いちゃうよ俺！

「月、良いかな？」

「はい！勿論です！」

月とは同じ捕虜&奴隷使わない組としていれると思うんだ。
マジ同盟組もうかな…。

某不幸少年みたいになっちゃった。

「なんでそうなるのよ!？」

およ? 詠までも?

「いや、部屋無いんだろ? なら、連れてきた俺の部屋使わせるかな
ゝって」

「……………はぁ……。取り敢えず部屋はあるからそっち使いなさい」

あったのか?

それなら最初から言ってほしかったな…。

「お、ありがとな詠。今度飯でも食いに行こうぜ?」

お札に詠に何か奢るとしますかね。
金入っても使う事無いし。

「……………なんでよ? まあ別に良いわよ。でも月も連れていくわよ」

「勿論良いぜ。ってか、全員で行こうぜ？」

「おっ！氣いきくやん迅ー」

「当たり前だ！祝勝会みたいなのだな！」

祝勝会！

響きが良いな！

「つと、取り敢えず関羽置いてくるぞ？場所どころ辺？」

「なんでボクが案内しなきゃいけないのよ？……まあ案内するけど」

で、詠に案内され、関羽の部屋（仮）に着いた。

「此処よ」

「ありがとな詠？」

「別に良いわよ。……それより今度月を誘ってどっか行きなさい」

「ん？まあ了解。軽く休み入った時にでも誘うとするよ」

なんで急にだ？

……ま、いっか。

「じゃ、またね」

そして詠は去ってった。

「取り敢えず関羽を寝かすか」

部屋に左手をかけて入る。

………つか持ち方わるい気がする。

まあ気にする程でも無いか。

「よつと」

関羽をベットにおき、布をかける。

「ま、しばらく看病でもしますかね。アデアット」

「うーむ。アスクレピオス使っても良いけど、なんだかなあ…。あ、エリクサー（仮）でも作るかね」

考えた結果、試作品を作る事にした。

「よつと。アレって材料なんだ？……分からんけどまあ適当に色々混ぜて作る」

俺のアーティファクトの弱点は、原料を指定しないといけないことだ。

武器は鉄とか銅とか銀とか金とかクロムとかで作るから余裕だ。銃も内部構造は完全に把握してるから余裕だ。

宝具を創造するのは名前さえ知ってれば作れるので余裕だ。

……魔力は結構使うが。

料理の材料に関しても名前知ってるだけで創れるから余裕。

……が、薬に関しては構成物質まで知ってないと出来ない。

何か神の故意が見えて何か腹立つ。

「えーつと、エリクサーって材料なんだろう」

マンドラゴラとかかな？

あ、味付けにイチジクとかリングとか適当に加えところ。
不味かったら洒落んならんし。

「……………なんだこりゃ……………」

ソコにはボコボコと音を立てる色が表現出来ないぐらいおぞましい液体があった。

「こええ…………。リアルエリクサーってこんななのか？…………飲む気にはならんな」

マジ関羽頑張って。

俺飲めないから。

コレが負けた罰で良いよな？

罰ゲームでも出ないような色の液体だし。

「あ、煙出てきた……………。ってコレマジ大丈夫か！？こわっ！色々こわっ！」

シューッ…………とかいう音を立ててブクブクと気泡をあげる謎の液体…………。

「コレ関羽に飲ませてなんともならんよな？」

……………まさか死んだりはしないよな？

うん。大丈夫だって。
多分…きつと…メイビー。

「ええい！ままよ！」

関羽の口を開けてその謎の液体？を飲みます俺。

……作った俺がエリクサーに見えないってどういう事？
エリクサーってもっと真緑な感じだよな？

色々不気味な光あびてる緑色じゃ無いよな？

某緑の肌の大魔王みたいな血の色じゃ無いよな？

……間違ってたらヤベエ…。

どうしよ俺！どうしよ！

「……ゴホッ…ゴホッ！」

ちょっ！？

血へド吐いたりしないよな！？

ヤバイって！

毒だったらマジどうしよ！？

「ゲホッ…ゲホッ…！」

格上がったあああ！？
ヤバイって！

このままじゃマジ血い吐いちゃうって!?

……やっぱあんなヤバイ色した液体飲ますんじゃ無かったアアアア
!!

劉備にどう謝りゃ良いの!?

『すみませんでした。薬作ったら毒で、ソレ飲ましたら関羽さん死
んじまりました』

……言えねえよオオオオ!!

そして、全国 of 関羽さんファンにぬっ殺されるよおお!?

……失敬メタ発言メタ発言。

「……ゲホッ…ゲホッ………ハア………」

……助かったアアア!!

関羽生きてるよオオ!!

…まさかさっきのエリクサーで合ってたのか?

取り敢えず聞いてみるとするか……。

恋姫編・第拾肆章 洛陽に着いて関羽にエリクサー（仮）を飲ませてみた。（後

ジュン「いんやー中途半端だねえ」

迅「あの薬なんだろうな？」

ジュン「俺的には記憶喪失薬（仮）かホレ薬（仮）かにしたいと…
…」

迅「頼むから勘弁してくれ」

ジュン「マジエリクサー出来たらつまらんだろ！」

迅「お前は俺に何を期待する!？」

ジュン「さあ？」

迅「……………そうかよ」

ジュン「そういえばね。俺前回ので怒られましたよ」

迅「当たり前だな」

ジュン「そうなんだけどね。モンハンになるとテンション上がっちゃってねえ……。困みにそんな俺は風紀委員長！」

迅「不適合だな」

ジュン「分かってるよマジ。だって俺自体が校則違反してる気がするし」

迅「……………気がするのか？」

ジュン「ああ、気がするんだ！まあ、気にするだけだから違いかも知れないけど」

迅「そうか。取り敢えず葉だけはマトモなのにしろ真剣^{マジ}で」

ジュン「……………だが断る！」

迅「ふざけんなああああ！！」

バキッ！

ジュン「ぬふろおっ！？」

迅「取り敢えず、次回もよろしくお願いします！」

恋姫編・第拾伍章 謎の物体エリクサー（仮）

「な、なあ関羽？」

さつき妙な液体飲ませたから話し掛けるのも気が引ける。

「……………此処は……？」

……………まさか記憶喪失！？
……………いや、それは無いか。
無いつて事にしとこう、うん。

「此処は洛陽だ」

「……………王偉！？何故っ……………」

関羽が固まり、目がトロリと……………ってちよつと待て。
待て待て待て待てエエ！
マジ待って、取り敢えず待って！
何で目が蕩けるとろようになるの！？
アレエリクサー目指したんだよな！？

どうなっぺこうなの!?

「……王偉い」

関羽!?

目を醒ましてマジで!

何の薬か分からんけど目蕩けるとかアブナイよ!?

「か、関羽?」

「……私の真名は愛紗だ」

「え? あ、ああ……俺は迅だ。よろしく愛紗」

あ、治ってる。

気のせいかな?

いや、確かに……。

でもなんで真名を?

「取り敢えず、無事かな?」

「あ、ああ、動悸が激しいが大丈夫だろう」

………What?

アブねえ。

何故英語で言ったよ?

……で、なんで動悸?

何か聞いたらダメな気がするから聞かないで置くとしますかね。

「………そういえば私は捕まったのか?」

「いや、治療だ。俺は愛紗みたいな強い志持ったヤツは好きだしな」

「…そ、そうか………／／／」

………何故顔を赤くする?

マジである薬、毒だったんじゃない?。

「なあ愛紗。愛紗達の願いを聞かせてくれないか?」

「私達…桃香様の願いは皆が笑って暮らせる争いの無い世を作る事だ」

………夢物語だ。

ソレが俺の感想だ。

現代でも、争いはある。

それは、人の妬みや欲望の感情があるからだ。

世界に争いが無くなったら、その世界の人間は何も求めず、何も変化を期待せず、何も感じず、誰とも他人と関わらない。

そんな世界じゃ無いと、争いは無くならない。

アレが欲しいとかそういった競争とかそういった類いのいさかいも立派な争いだ。

小さいいざこざでもそういった小さな争いを繰り返す事で人は更に強くなっていく。

争いは、人を強くし、人と触れあう潤滑油といった所だろう。

戦争はその領の主が、更なる土地を求めてやる、これもまた争いの一種だろう。

ただ、相手と直接触れあう事の無い分、身勝手なモノにはなるが。

しかし、この世界ではソレが当たり前だ。

個々に違った志を持ち、ソレを貫き通そうとする。

誰が間違ってるなんて無い。

誰が間違ってるなんて無い。

ソコにあるのは、二つの志のぶつかり合いだ。

……まあ、阿呆の袁術とか袁紹とかは例外だが。

ソレで言えば、劉備も愛紗もいい願いを持っている。

絵空事ほど人の心を掴むモノは少ないからな。

「素晴らしい願いだ」

「そうか」

チラチラッと俺を見る愛紗。

「じゃ、俺は鍛練行くから！」

何かこのままいたら危ない気がした。
良く分からないけど危ない気がした。

「待て。私も行こう」

「へ?」

.....

皆さん、俺を救ってください。

なんか分からない間に愛紗と行く事になってしまったんですよ！
何処にとって？鍛練場だよ！

なんか知らないけど、愛紗は『恩義を返すまで、私は桃香様達の元

には帰れない』とか言うんだよ!?

『勝手にやった事だから気にするな』って言ったのに、やっぱり無視されたよ!?

バランスおかしくね?

劉備達んトコパワーバランス低くね?

アブナイよ?

負けちゃうよ?

「おお。迅! 私と仕合を……………」

来てすぐ固まる華雄。

……………何故に?

「…関羽! 勝負だ!」

全力で愛紗に宣言する華雄。

「フツ……。良いだろう。受けて立とう華雄」

お互い目からバチバチと火花を……………って何だか鬼気迫って怖い。

「なら武器をとれっ!」

華雄と愛紗はそれぞれ武器を持って去ってった。

「……………久しぶりに筋力トレーニングするか。アデアット」

「ええっと……………自然イリジウムの凝縮体…形は四角で、サイズは俺の二倍。重量は……………三トン」

一応コレが気を使わないで持てる今の力量だ。

「でけえなあ……………よっと」

まず気を使ってその四角の重りを投げ、その間に逆立ちし、落ちてきた重りを受け止める。

「ぬっ……………ぐうっ……………」

瞬間的に多分十トン近くの荷重が掛かっただろう。

その証拠に、俺の手元は少し陥没した。

少して済んだのは、なんとか衝撃をバラけさせたからだ。

「…………ふう……。つて、羽織落ちた。上脱ぐか」

逆立ち腕立てはし辛いと理解し、上着を脱いで上半身裸になり、また逆立ち腕立てを始める。

俺の肉体は、戦地で受けた銃痕、刀傷、槍傷やらがついている。

生前は死地にたち、死を間際に死に抗う事あらがで強くなったので、こういった傷は所謂名誉の負傷といった所だ。

他にも、衝突痕やら色々あるが、ソレをなぜ超即回復で消さないかは、その傷に自ら誇りを持ってるからだ。

そうじゃなきゃ、傷ぐらい超即回復ですぐに消す。

ちなみに、死後の傷は全て超即回復で回復している。

「フッ…………」

逆立ち腕立ては俺にとっては慣らしのようなモノだ。

俺はそのまま片手逆立ち腕立てに移行し、延々と腕立てをする。

……………そうして、空が紅くなるまで腕立てをしていると、向こうから華雄と愛紗が帰ってきた気配がした。

「ふう……。久しぶりにやると体力が落ちたのが理解できるな」

鍛練日々怠る事ならず…。
ってな。

で、華雄達はようやく俺の視界に入るトコまで来た。

「……………」

二人とも無言。

何故だ？

……………立つとするか。

「よっと」

手を両方着け、自然イリジウムの重りを上に蹴り上げる。

「フッ……………」

そのままソレを一撃で消し飛ばせる程度の一撃で消し飛ばす。

「ふう…………。暗器も加えらると何トンだ？ソレを加えて見るなら、俺は相当強くなったって事だな」

……暗器の中身を全て出しきったら、どれ程の速さで動けるのだろうか。

ソレが気になって仕方無いな。

………って二人は？

「……へ」

二人とも俺の体を凝視してた。

………目が恐いんだが。

「む……コレが武人の肉体か……」

「迅……コレ程とは……」

……二人とも。

マジで恐い………ってか、危ないからその目止めて。

「と、取り敢えず俺は風呂行くから！」

つてな感じで取り敢えず逃げといた。

……流石に汗かいて疲れたな……。

因みに、ちゃんと内着と羽織袴持ってきた。

「……絶対あの薬やバイって………」

軽く後悔しつつ、俺は歩を進めるのだった。

恋姫編・第拾伍章 謎の物体エリクサー（仮）（後書き）

ジュン「テスト終わったアアアアアアア！！」

迅「……………るせ。どうだったよ？」

ジュン「……………アハハハハ……。聞くな。聞かないでくれ」

迅「ああ。ドンマイ」

ジュン「あ、そうそう。幕間作ろうと思うんだ。第一弾は月で」

迅「何で月だ？」

ジュン「いや、なんとなく？取り敢えず第一弾出来たら投稿しますかね」

迅「まあ、頑張ってくれや」

ジュン「おう！………それで、次の幕間意見あったら言ってくれると有り難いです！」

迅「取り敢えず、キャラは壊すなよ？」

ジュン「勿論！………でも自信ねえ」

迅「ま、頑張っとけや」

ジュン「キャラは少し壊れることがあったり無かったりするかもしれませんが、見てくれると有り難いです！あ、取り敢えず締めよろしく」

迅「ああ。次回も見えてくれると有り難い！」

幕間 月とデート？（前書き）

幕間第一弾！

あまり上手く出来てませんかも……。

要望とかあったら言ってもらえると有り難いです。

幕間 月とデート？

「月ー！遊びに行こうぜー！」

さて、今日俺は久々に空いた休みを利用し、前回の詠との約束……月とのデート？を実行しに来た。

「ふえっ……。はっ、はいっ！」

慌てる月の姿は何だか見えていて小動物を想像させた。

……………って端から見たらこの光景はどう写るのだろうか？
主である月を誘う部下（俺）……結構形式で見ると変なものだが。
見た目で見ると可愛い女の子をデートに誘う俺……。
なんだろう。
すごく似合わない気がするのは俺だけか？

まあいい。

そんなに考えてても疲れるだけだな。

「じゃあ行こうか月」

「はいっ！」

うゝむ。和むなあ。

小動物みたいで。

……で、そんなワケで俺達は城下に来た。

「取り敢えず、店回ろうか」

「はい。久し振りに来ましたー」

最近、どうやら月はこっちに来てなかったみたいだ。

……まあ俺も人の事言えないか。

確か前城下に来た時は、反董卓連合ちよつと前だったからな。

「よし、色々回ってくか！」

ってワケで取り敢えず片っ端から店に入っていった。
その途中、装飾品の露天みたいなのに来た。

「よお、お兄さん！彼女になんか贈り物はどうだい？」

「か、彼女……きゅう……／／／」

赤い顔をして湯気を上げる月。
やっぱり和むなあ。

「残念だけど彼女では無いんだよね。……っとまあ、取り敢えず何がオススメだ？」

「そうか。そりゃあ残念だ。頑張りなよ兄さん。……コレなんかどうだい？」

……指輪か。

装飾も特に無く、形もシンプルなペアリング……。
っておい。

何でペアリング？

婚約指輪じゃ無いんだぞ？

「……………頼む。もうちょい無難なのにしてくれ。ハードル高すぎだろ」

露天の店主の肩に手を置き懇願する。

「？はーどるってのは分からねえが、ならこういうのはどうだい？」

次に取り出したのは、ペンダント……いや、こっちの世界だと首飾りと言うべきか？

まあソレを取り出した。

真ん中には、少し小さめだが綺麗な宝石……アメジストが填められていた。

アメジスト……こっちで言うなら紫水晶の色は、綺麗で透き通るような紫色だった。

月の髪も薄い紫っぽいからちょうど良いな。

「お、良いねえ。値段はいくらだ？」

「えーっと……こんなトコロでさあ。なんせこんな上玉、初めて見たもんでね」

値段は、俺の今の全財産の半額くらいあった。

自分で言うのもなんだが、全く金を使わない俺はそれなりに貯金をしていて、かなりの額があったがそれにも関わらず……だ。

「む……。高いが……よし、買った！」

「男はそうでねえとなあ！お兄さん太っ腹だねえ！」

そして、金を払って首飾りをもらって月のトコに行くと……

「……………」ブツブツ…

なんかブツブツ言ってた。
何があったんだ月？
って、まだ顔が赤いぞ月？

「ゆーえっ！」

取り敢えず両肩に手を置いてみた。

「……………っひゃあっ！？」

ビクンって体を震わせる。
……………俺なんか悪い事した？

「じ、迅さんっ！？」

……いや、そんなに驚かれても。
って、少し涙目なんだが？

……保護欲が…。

「月、プレゼント……いや、贈り物だ。ちょっと頭こっちに向けてくれないかな？」

「…こうですか？」

首をコテンと傾けて、コチラに頭を向ける。

俺は月の首に、さっき買った首飾りをかける。

「……どうかな？ 気に入ってもらえるといいけど……」

「ありがとうございます迅速さん！」

どうやら気に入ってくれたみたいだ。

首飾りを触って微笑む月はやっぱり和むねえ。

「えへへ………／／／」

うん、顔が赤くなってるな。

何だか今日は良く顔が赤くなってるな。

……まあ、和むから俺としては良いけどね。

しばらくそうして月を眺めていた後、俺達は近くの広場に行った。
ソコには、猫が三匹ほどいた。

「お、猫だ」

取り敢えず猫の一匹を抱き抱え撫でる。
そうしていると、あっという間に猫が群がってきた。

「うおっ！？急にいっぱい来たな！」

そう言いつつ、猫達を撫でる。
もうこれでもかっ！ってくらいに撫でる。
猫達は気持ち良さそうにソレを受けていた。

そして、途中でふと月を見ると物欲しそうな目をしていた。

「月ー、こっちおいでー」

「えっと……どうしたんですか？」

とことこ月が近付いて来たので、俺は月を膝の上に座らして頭を撫でる。

……正座ってあんま得意じゃ無いんだが……。

「っひゃ……／＼／＼」

「ああ、良い感じだー」

ホントなんか落ち着くな。

「月ー、今日どうだった？」

撫でながらふと聞くと、月はコチラを見て一言言った。

「すごく楽しかったです！」

そういう月の顔は、すごく良い笑顔で、俺はソレを見て安心しつつ、ドキッとなった。

「……そうか。なら良かった。また今度一緒に出掛けような」

「はい！」

そうして、俺は日が落ちかけ、空が赤く染まるまで月を撫で続けながら話したのだった。

幕間 月とデート？（後書き）

ジュン「……この時代に彼女もくそもあったのかなあ？」

迅「いや、知らねえし」

ジュン「ノリで書いたんだが、書いてから疑問に思ったんだよね」

迅「気付くの遅いんじゃない？」

ジュン「だよねえ。式拾話くらいには後半入ってるよな？」

迅「今のペースじゃ無理だろ。式拾伍話くらいいくんじゃないか？」

ジュン「むう……。ま、頑張りますかね」

迅「そうしろ」

ジュン「……あ！PV270000。ユニーク30000マジ感謝感

謝です！」

迅「後付けみたいに言うなよ……。ホントにありがとうございます！」

ジュン「これからも頑張ってきます！では次回！」

恋姫編・第拾陸章 副長はドS…ってか、鬼畜っぽい（前書き）

とりあえず、少し話を進めないとなーって思ったので、次の話に少し話を進める事にします。

恋姫編・第拾陸章 副長はドS…ってか、鬼畜っぽい

『迅。いい加減アンタの部隊も副長くらい選びなさい。ボクが選んでも良いけど、アンタの部隊。恐いし』

そんな詠の唐突な提案の元、俺は部隊のトコに向かっている。

ってか、俺の部隊怖がられたんだが…………。

どうすれば良いんだろうか？

怖がられないようにする為にも副長を！…………いや、変わらないか。

とか考えてるうちに調練場に着いたようだ。

『お早うございます！』

「ああ、お前ら。今から副長を決めたいと思う。我こそはというヤツは手を上げろ」

……………シーン…。

そんな擬音が似合うくらい誰も手を上げず、そして無言だった。

「……………はあ、なら副長が務まりそうなヤツの名前を言ってくれ」

『拭しぎが良いと思います！』

……………拭しぎって誰だ？

「ああ？何でオレなんだ！？」

……………アイツね。

ソイツの見た目は暗めの青髪で長さは大体肩くらい。
片眼鏡を掛けていて、目付きが異常に悪い。
で、なぜだか両腕に包帯をぐるぐると巻いていた。

『この中で一番武勲が高かったから！』

「ンな理由で決めんなアホ共！」

大変ご立腹のようで、鋭い目を更に鋭くさせて、他の奴らを睨にらんでいた。

『ひいー』

わざとらしく肩を揺らす俺の部隊。

「良いぜ、やってやろうじゃねえか！」

そう言って打鞭を取り出す。

……武器がムチ？

えらく官能的だな。

『ぎゃー、打たれるー』

「ハハハハハ！もっと愉快に逃げろよ！」

追い付かれたら危ない感じの鬼ごっこを始めた。

「オラッ！」

『ギャーッッ！！』

ムチで相手を叩く。

……うわ、かなり痛そうだな。

「ハハハハ！もっと叫べ！もっと喚け！もっと泣け！もっと懇願しろ！もっと逃げろ！もっとオレを悦たのませてみせろお！」

……鬼畜だな…。

そんな事を思ってしまったが、まあ仕方無いと思う。

『御許し下され〜！』

全員で綺麗に土下座する。

「ハッ！まあ許してやつても良いぜえ」

……もう良いかね？

「っと、取り敢えず名前を聞かせてくれ」

「ああ……ゴホンッ…。オレの名前は李樂。字は剛毅。真名は拭だ。さっきは見苦しいトコを見せてしまって申し訳無い。以後よろしく頼みますよ隊長」

何故だか冷静ぶる李楽。

「真名貰っても良いのか？」

「はい。オレは隊長を信頼してますから」

「そうか。俺の真名は迅だ。こちらこそよろしくな拭」

「はい。迅隊長。阿呆共を率いる仕事。しっかり勤めさせてもらいます」

で、がっしり握手をする。

「拭。その包帯、何でしてるんだ？」

さっきから微妙に気になっていた事を聞く。

「コレですか？コレは……フフフフ……何でしょうね？」

な、なんだその笑い！？
意味深で何だか余計気になるぞ！？

「あ、そうそう。オレの主要武器はムチじゃありませんよ？」

「じゃあ何でムチなんか持ってるんだ？」

「趣味ですよ？」

どんな趣味いいい！？
アレか？S M的趣味か！？

「……………実際の武器は？」

……取り敢えず現実から目を反らした。
いや、趣味は無いだろ趣味は。

「コレですね」

そう言って取り出したのは一見ただの剣にしか見えない剣。
目が良いと分かるが、剣に少し隙間が空いた部分がある。

「ほお。多関節の剣か」

「お。良く分かりましたね」

そう言いつつ、剣の節を開け、自由自在、変幻自在に剣を振り回す。あの剣の厄介なところは、たとえ剣で防いだとしても、節を曲げてそのまま守っても剣が自らに届く所だ。

その代わり、扱いも色々大変なのだが、どうやら扱いは完璧のようだ。

まさに、天職ならぬ天剣と言ったところだな。

「切れ味は勢いでしか力入れられないから落ちるんですけど、この武器オレの肌に会うんですよね」

「そういう武器を選ぶのが一番だからな」

「ええ。それに、敵をいたぶるのは快感ですから。中々コレ以外の武器じゃ面白さに欠けてましてね」

「……………こいつドSだな…。」

「……………取り敢えず頼んだぞ?…………じゃ、仕合するか」

変わったヤツと闘うのも戦闘経験として良いからな。
それに、この武器使ってるヤツと戦ったこと無いし。

「はい。じゃ、ちょっと待ってくださいね」

眼鏡を取り、近くのヤツに渡す。

「伊達眼鏡か？」

「察しのとおりですよ。眼鏡無しで歩いてると、通りすがりのガキ
共が泣き出すんですよ……」

確かに眼鏡を取った今の拭は凶悪顔といったトコだ。
歩いてる子供の十人中十人が泣き出すくらい凶悪顔だ。
正直、やーさん（ヤクザ）達が優しく見えるくらいだし。

「なら行こうか」

暗器から二本ナイフを取り出して両手に装備する。

「オレはいつでも良いです」

「そうか……。……。フッ……。」

素早く近付き、横薙ぎに一閃。

しかし、拭は後ろに宙返りしながら避ける。

「宙に避けたのは失策だな！」

もう片方のナイフで宙返り中の拭に斬りかかる。

「つと……」

しかし、ソレを近くの木に剣を絡ませて引っ張ることで空中で移動し避け、そのまま剣を俺に向かって振る。

「はぁっ！」

右足を強く踏み込み、剣を殴る。

さすがに剣を殴ると手がヒリヒリする。

踏み込んだ地面は、クレーターが出来ていた。

「っを！」

拭はその衝撃をいなして、また反撃を始める。

「身軽だな！」

「身軽さには定評があるモノでしてね！」

「なら、反撃も間に合わないくらいの連撃を食らわすまでだ！」

ナイフだけの攻撃ではなく、手足を織り交ぜ連撃を繰り返す。

「フッ……ハッ……ハアッ……！」

右薙ぎ、後ろ回し蹴り、右回転の足掛け、首を掴んで地面に押し付け、宙返りしての踵落とし。
その間約一秒。

「かはっ………！」

「詰みだな。さて、まだやるか拭？」

「…………ハア…………ハア…………。いやあ、流石ですね。完敗ですよ」

「まだ動けるくらいの余力はあるんだな」

「いや、一方的に叩かれただけですからね。本気になる時間もありますよ」

…………本気では無かったのか。

まあ、強いのは分かったし良いか。

「取り敢えず、力は分かった。これからよろしく頼むぜ？」

「勿論ですよ、迅隊長」

「…………ああ、敬語は使わなくて良いぜ？柄じゃねえからな」

「そうですか…………いや、そうか？ならありがたく普通に話させてもらうよ、迅隊長」

そう言いながらまた眼鏡を掛ける。

「取り敢えず、じゃあな」

「ああ、また」

そうして、俺はそのまま帰っていくのだった。

恋姫編・第拾陸章 副長はドS…ってか、鬼畜っぽい（後書き）

今回は話す内容が無いのでパスで。
あと、モンハン楽しいよモンハン。

恋姫編・第拾漆章 冀州侵略。そして、仲間が増えた。（前書き）

歴史に出るような合戦が全然出ない……。

まあ、董卓軍は途中敗退だった筈だからそういうのが出ないのが当たり前といえ当たり前なんだけど……。

恋姫編・第拾漆章 冀州侵略。そして、仲間が増えた。

今、月の領土は司隸州、并州、雍州の三州に及ぶ。

何故急にそんな事を言うのかと聞かれれば、それは俺が今現在、冀州に攻めいつてるからだろう。

事の発端は至極簡単。

ただ俺が『曹操頑張ってるみたいだし、取り敢えず冀州落としてくるわ』と詠に当たり前のように言っただけだろう。

取り敢えずで州に攻めいる俺って一体何者？

とか思わなくも無いが、コレが事実だ。

それでもって余裕があったらだが、青州、徐州にも攻めいるつもりだ。

……最近聞いた情報だと、阿呆の袁紹・袁術は敗走後、冀州に閉じ籠っていて、孫策は孫権と共に揚州を統べ、曹操は豫州、徐州を統べ、劉備はいつの間にか益州に、荊州は確か……劉表とかいうヤツが袁術を太守の座から降ろして治めて、涼州は変わらず馬騰が治めていた筈だ。

随分史実と様変わりしているが、恐らくは曹操と孫策の戦いは起きるだろう。

そこで、孫策は死ぬ。それは、兵力が違えど起きる大まかな流れとあったところだろう。

しかし、俺がいる以上その流れは崩す。
それは、俺としてのこの世界での最善の目標は、将が誰も死なず、
それでいて月が中国全土を支配することだからだ。
……そうせんと、去り際がキツイだろ。

「つと、袁紹と袁術の阿呆軍団と戦りあうのか。兵力差は結構ある
が大丈夫か拭？」

「当たり前だ。隊長に鍛えられたオレらがそう簡単にあの阿呆に敗
けて堪るかって。それに、今回は関羽殿も一緒に来ているしな」

そうなのだ。

今回の冀州侵攻に何故だか愛紗も付いてきているのだ。

「背中がソワソワするんだが」

愛紗からの視線でな。

ホントにあの薬が原因だと思っんだ。

……ああ、ソワソワする。

「あ、愛紗？ どうした？」

「いや、別に何でもないぞ？」

「いや、ならなんで見てんのさ」

「私の気分だ」

………負けた。
もう色々。

さっきから見られてて精神ガンガン削れてるんだが？

「………取り敢えず、相手の兵力はどれくらいだ？」

「だいたい一万くらいだな」

「俺達は？」

「二百だな」

………50倍？

うわお、大変すぎるだろ。

『1人50人相手します!』

「いや、オレは無理だぞ?」

『やっぱり無理でしたっ!』

「オレは50人以上いたぶるからな」

そんなくだりを終え、現実と向かい合う事にした。

……大概戦闘狂みたいだな拭は。

「さて、ここ魏に全兵力出張ってきた阿呆に言う言葉は?」

って、魏を曹操が治めないと曹操のトコ、魏って名乗れないんじゃないや

……。

ま、良いか。

「泣かすぞど阿呆」

「いやいや、いじめっ子かお前は。愛紗はどうだ?」

「流石にこんなに敵が多くては厳しいのではないか?」

「まあ、正論だな。けど、心配無用。コイツらはそこいらのヤツには劣らんからな」

取り敢えず、鼓舞でもしますかね。

部隊の方を向き喋り始める。

「良いかお前ら！今回も言う事はただ一つだ！必ず生きて帰ってこい！阿呆の率いる兵に劣らぬと証を見せてみる！」

『了解！！』

各々武器を手に掛け意気込む。

……扱いの簡単さは一級だな。

「愛紗は俺と共に来てくれ」

「分かった」

愛紗も戦いの準備が出来たようだ。
おかげで、チラチラ見られなくてソワソワしなくて済む。

「なら、行くかな。拭、後は頼んだぞ？」

「了解。隊長も頑張ってくれ」

「ハッ！また後でな！」

そう言うとき袁紹・袁術軍の天幕に体を向け、愛紗を担ぐ。

「行くぜ！」

「何を………！？」

飛んだ瞬間、体をビクリと震わせる愛紗。

「ハハハッ！しっかり掴まってるよォ！」

俺は気で作った踏み台を踏み、更にスピードを速める。

「お、そろそろか」

ようやく……まあ、少しだけなのだが、袁紹・袁術達の本幕に着いた。

「到着つと。それじゃ……失礼するぜー」

本幕に入る。

………警備兵がいなかったのは嘗めてるのか？

「だ、誰ですよ!？」

「反董卓軍の時の文はどうだったよ？」

そう言うと、少し考えた後に、二人揃って青い顔になってガタガタ震え始める。

「あちゃー……。やり過ぎたか」

顔に手を当てて溜め息を吐いていると、袁紹の方には二人、袁術の方には一人前に出てきた。

「あ、そうだ。愛紗、もう降りればいいぜ？」

「あ、ああ」

愛紗も降りて、何故だか武器を構える。

………まだ話してる最中なんだが。

「さて、お前らに選択肢を与えよう。俺らに降るか。死ぬか。さて、どっちだ？」

………まあ、死ぬ方取っても殺さないけど、方便みたいなもんだ。
………お？

誰か前に出てきた。

「姫の勝手にするのもなんだし、あたいが相手するよ」

「……ほお。蛮勇だな。名は？」

「あたいは文醜だ」

「そうか。俺は王偉だ」

そう言って構えを取る。
…一氣に片すか。

「…………やああああ！」

剣を振るう文醜。

……………が、それは俺に届く事は無い。
何故なら、俺が瞬時に足に気を過剰に回し、脚力を爆発的に上げ、文醜の後ろに回り込み、頸を叩き意識を飛ばしたからだ。

「……………終わりか」

力無く倒れる文醜。

……………こうしたのにも理由がある。
今は相手の将全てを閉じ込めている状況だ。
瞬間的に目を逸らすだけでも、脱走の危険性があるからだ。

「文ちゃん!？」

「さて、違う二択になったが…………俺らに降るか、コイツも死に、お前らも死ぬか。どちらが良い？」

今この状況、マトモな軍師なら確実に降る方を選ぶか、自害し果てるかのどちらかだろう。
逃げる事も抵抗する事も出来ない。
所謂詰みの状況だ。

「麗羽様、すいません。わかりました。降ります」

「そちらは？」

「んー。美羽様。どうします？」

……阿呆に振ったら絶対拒絶なんでは？

「妾は…別に良いのじゃ。降っても蜂蜜水は飲めるのかの？妾は蜂蜜水を所望するのじゃ」

………はい？

蜂蜜水？そんだけで良いのか？

「別に蜂蜜水くらいなら全然良いぞ？」

「ならよいのじゃ」

……………割とアツサリだな。

ま、勝てないって分かったって事か？

「美羽様が降るなら私も付いていきます！」

……………全員下ったのか。

「取り敢えず、これで戦いは終いだな」

「……………何だか変な終わり方ですね」

……………そう言うな愛紗。

犠牲無しってのは良い事なんだよ？

「それにしても、妾を荊州太守から降ろしたあの女狐が腹立つのじや〜！」

……………劉表。

見た目どんなにか知らんが、お前女狐って呼ばれてるぞ……………。

「取り敢えず戦を止めるぞ」

で、門の前に行くと、俺は驚きで呆然とする羽目になった。

「おいおい……マジかよ」

其処には、袁紹・袁術軍の死体の山が広がっていた。
立っているのは、俺の部隊……紅い鎧を着けた兵だけだった。

「あ、隊長。どうだった？」

死体の山の上に立っていた拭がこちらに歩いてきた。

「見ての通り。五人降った」

「お。やったんだな。オレらは見た通り、完勝で被害は0だ。いや、
やはり敵をいたぶるのはいいな」

「……マジ俺の部隊何者？」

こええよマジで。

脱・人間してる奴ばっかなんじゃねえか？

「……性格さえ治せば武官になれんじゃないか？」

まあ、やったの俺なんだけどさ。

「……………はあ。取り敢えず冀州の残りの十二の郡を制圧して帰るぞ」

「了解」

……………この後、日にちにして二週間で冀州を制圧し終えた。
……………ああ、この五人何て言おうかな……………。

恋姫編・第拾漆章 冀州侵略。そして、仲間が増えた。（後書き）

ジュン「ええっと、祝！PV300,000突破！」

迅「本当に有難い！」

ジュン「これからも頑張るので」

ジュン&迅「よろしくお願いします！」

ジュン「つと、どうも。今日親戚の赤ん坊にヘッドバット（頭突き）をくらって頭が凹むかと思った作者です」

迅「…………頭弱いな」

ジュン「違う！あの子が固すぎたんだ！めっちゃ固くて涙目になりかけたよチクショー！」

迅「……………うわ」

ジュン「チクソウ……。一生の不覚だよ全く…」

迅「そこまでか？」

ジュン「当たり前だ。……。取り敢えず次回もよろしくお願いします
！」

恋姫編・第拾捌章 帰ってきたぞ洛陽よ！……袁紹調教されて変貌しちゃったよ

テストヤベー！

どうしょ！

俺どうしょ！

洛陽を出てから二週間……。

やっと俺は久しぶりに洛陽の地を踏んだ。

「帰ってきたぞ！洛陽！」

……もうホントに疲れた。

具体的に言うなら、袁紹とか袁紹とか袁紹とか。

……あ、袁紹しかねえじゃん。

けど、そんな疲れを見抜いた拭が袁紹を調k……ゲフンゲフン。お話ししてくれたお陰で袁紹は大人しくなった。

他の四人は友好的で四人とも真名を教えてくれた。

美羽、阿呆なんて言ってすまなかった。

お前は物分かりの良い子だったよ。

「迅、蜂蜜水は無いのかの？」

「ああ、はいよ。コレ。その代わり、静かにしてろよ？」

「ありがたいなのじゃ。勿論なのじゃ」

定期的に蜂蜜水を上げればこの通り。

え？調教？

そんな事はしてないよ？

「ああ、美羽様！迅さんの言いなりになってそんな姿も良いです！そして、迅さん。小さい美羽様を手懐けるなんてすごい幼女趣味ですわね！」

「アホか七乃。幼女趣味で堪るか。俺はそんな複雑怪奇な性癖は全く……いや少ししか持ってない」

……アルのせいで全否定出来ねえじゃねえか畜生ッ！！
あの変態と言う名の紳士がッッ！！

「うわゝ、流石にそれは無いぜアニキ」

「少しは持つてるんですね……」

と、猪々子と斗詩に言われた。

「昔、ある奴に幼女の素晴らしさを説かれ続けてな……」

遠い目をしながら静かに言ったら、猪々子と斗詩に哀れむ目で見られた。

「そんな目で見るな。それで言ったら、お前らのご主人大変な事になってんだが？」

二人とも固まった後、拭と袁紹の方を向くと…………

『麗羽。オレの足を舐めろ』

『はい。拭様！』

……拭の足を舐めてる袁紹が…………。

ちょ、調教こええ…………。

高飛車が従ってるよ…………。

袁紹変わりすぎだろ…………。

第一こんなトコでそんな事すんなよ!？

「ひ、姫…………。み、見なかった事にしような斗詩」

「文ちゃん…。そ、そうだね」

「おい、二人とも。現実から目を逸らすな。逸らしたい気持ちも分かるが、アレはもう治らんぞ」

二人とも本気で現実認めないつもりだな。
だって、目が遠くを見てるし。

「……はあ…。取り敢えずさっさと行くぞ」

遠くを見てる二人と美羽と七乃を連れて、月達の所に向かう。
ちなみに、袁紹は拭の後ろに付いて来ている。

そして、月達の元に着き…。

「ただいま皆！」

因みに、袁紹、美羽、猪々子、斗詩、七乃は門の外で待機中だ。
拭はちゃっかり着いてきてたりする。

「あ、迅さん！おかえりなさい！」

「「迅！」」

「……おかえり」

「冀州攻めるだけで時間掛かりすぎです！」

……一人だけ扱い酷いんだが？

「無事冀州制圧して帰ってきたぞ……って、ん？誰ぞ？」

いつものメンバーに見た事無いヤツが一人いた。

いや、公孫賛って分かってるけど形式的にさ。

……って事は幽州も落としたのか。

董卓軍スペックだけ！。

「ああ、新しくボク達の仲間になった白蓮……公孫賛よ」

「そうか。俺は王偉だ。よろしくな公S……いや、ハムさん」

公ってばらばらにしたらハムだよな。
って事でハムさんに決定してみた。

「なんだハムさんって！？普通に名前と言えば良いんじゃないか！？」

「面白味が足りんからアダ名を付けてみた！」

「なんだその理由！渾名を付けるのは別に良いけど、もう少しマトモなのにしてくれ！」

あ、アダ名を付けるのは良いんだ？

「……いや、他には……。やっぱりハムさんだな！」

サムズアップしといた。

「……まあ、そんな事は置いといて」

「置いとくなよ！」ってな感じの声が聞こえたりしたが、取り敢えずスルー。

「俺の方も五人程連れ帰って来たり……入ってくれ」

そう言うのと、五人とも門から入ってきた。

「……取り敢えずこの五人だが、月良いかな？」

「えっと、はい。良いですよ？」

「部屋は………そういや、この前余って無かったな。……はあ、仕方ねえ。家でも創りますか」

無論アーティファクトで。

土台だけは自分で作るけど、他の場所は全部アーティファクトだな。

「それは良いとして、仕事はちゃんとしてもらおうよ」

「ああ、分かった。文官は斗詩と七乃、武官は猪々子。袁紹と美羽は………使えないから自宅警備員で」

またの名をニートとも言うな！

………って、なんか後ろ側から非難を受けたんだが、主に袁紹とか袁紹とか袁紹とか。

………やっぱ袁紹しかいねえし。

美羽は七乃になんか言ってるしな。

七乃はなんか「働かなくても蜂蜜水が貰えるなんてやりましたね美羽様!」とか言ってた。

……………ああ、そういう解釈も出来るんだな。

「詠。まさかとは思うけど、二週間分の書類が溜まっていたりは……
「してるに決まってるじゃない」……そうだよな……。分かってはい
たけどキツツイなあ……。詠、少し手伝ってくれ。今度なんかで
埋め合わせするから!」

「……………まあ、分かったわよ」

よし、コレで負担軽減!

「迅! 久しぶりに仕合を頼む!」

「あ、ウチも頼むわ」

「私も頼む」

「了解! 相手するぜ!」

霞&華雄&愛紗とは仕合の約束を

「……迅。今度またご飯……作って」

「おう！腕になるぜ！」

恋とは飯の約束を

「あの……今度また出掛けませんか？」

「おう！勿論！」

月とはデート？の約束をした。

なんだろう。

俺もしかしてハーレム状況？

あ、気のせいですか。

マジすいません。

第一一刀がモテすぎんだよコノヤロウ！

「取り敢えず久しぶりに飯作るかな。お前らどう？食うか？」

そう聞くと、月、詠、霞、華雄、恋、陳宮、拭は頷き、他のヤツはまだ食った事無いから美味しいのかと疑問そうにしていた。

天和達は、部屋でダラダラしてるそうだ。

公演まだ出来ないからってあの自宅警備員共が！

「取り敢えず全員参加な。拒否するヤツは嫌いだぞ？」

いや、マジで。

理由があるなら兎も角、偏見だけで断るヤツなんて大嫌いだ。

料理人として、自分が作った物を残されるのも嫌いだ。

料理には自信を持ってるからこそプライドも高くなるといったところだろう。

「取り敢えず、自宅警備員共を迎えに行くかね」

天和、地和、人和の三人な？

人和はちゃんとなんかしてそうだけど、天和、地和は危ない。特に天和が。

……そうして、大所帯で三人を迎えに行くと、予想通り天和、地和はダラダラしていて、人和はいつでも公演出来るようにきっちりしていた。

「「あ、迅」」

「迅さん、お久しぶりです」

「おお、久しぶり。……人和。天和と地和はいつもダラダラしてたのか？」

「ええと、天和姉さんもちい姉さんも大体はこんな感じですね」

「そうか。それは仕方無いとして、飯作るから食うよなお前らも？」

そう聞くと、やはり三人とも了承し、俺達は将全員で食堂へと向かった。

「よし、いっちょ作ってくるわ。食後に甘味はあるか？」

そう聞いたら、拭以外全員頷き、拭は「甘味じゃなくて辛味が欲しい」とか言ってた。

「辛味ってどのくらいの辛さだよ?」

「超激辛」

……超激辛ってなに？
激辛の数段上なのか？

「取り敢えず分かった」

……そうして、注文を作った。
今回の飯は和食をメインとし、甘味は和食に合うように白玉ぜんざいにしておいた。

辛味は麻婆豆腐にしといた。

いや、やっぱ辛味の代表は麻婆豆腐だと思うんだ俺は。

まあ、見た目溶岩にしか見えない麻婆豆腐になったけどさ。

だってボコボコ気泡上げてんだぞ？

怖い事この上無しだって。

「どうぞ。召し上がれ」

食った事ある組はその一言で食べ始めるが、食べた事無い組は少し固まっていた。

「迅……これはなんという料理なんだ？」

「ああ、愛紗。それは味噌汁と肉じゃが、あと沢庵だな」

沢庵は前に一度漬けて食堂に置いたヤツだ。
たくわん

「聞いたことの無い料理ですね」

「ああ、コレは俺や一刀が元々いた国……日本の料理だからな」

「天の国の料理ですか！」

「ま、そうだな。安心しろ。味は保証するからさ」

そう言った後、愛紗達も食べ始めたのだった。

……結果、俺の料理は好評だったとだけ言っておこう。
何故か女性陣が一瞬落ち込んだりしてたが、理由は良く分からね。

ジュン「えーと、今回は迅は休みで、代わりに拭が来てます」

拭「初めまして。……勝手に真名呼んで…普通なら死ぬトコだぞ」

ジュン「いや、申し訳無いな」

拭「まあ、別に良いけどよ」

ジュン「そうか。なら、拭が好きなモノは」

拭「気の強い女だな」

ジュン「ソレは好きなタイプだ」

拭「いや、気の強い女を屈伏させて喰らうコトが好きだ」

ジュン「やめえええい！！貴様！この小説に18禁タグ付ける気

かバカ野郎!」

拭「いや、そんなつもりは無いぜ?」

ジュン「まあ、いい。好きなヤツは?」

拭「そうだな……。将で言うなら曹操、荀イク、楽進、孫策、孫権、甘寧、魏延かな。気が強そうだな」

ジュン「……ダメだコイツ。アブねえ」

拭「おやおや、随分な言い草だな」

ジュン「目が危ないからだろうが!……好きな料理は?」

拭「辛味類と酒だ。甘味は好かん」

ジュン「そうか? 作者は甘味も辛味も好きだぞ?」

拭「いや知らないし」

ジュン「流石に紅い麻婆豆腐は食いたくないけどな」

拭「いや、美味しいぞ？」

ジュン「味覚が分からねえ…」

拭「気にすんな」

ジュン「まあ、気にしたら負けだな。うん」

拭「そういうこった」

ジュン「取り敢えず………また次回!!」

恋姫編・第拾窮章 屋台『神影』。劉備&趙雲現る！

洛陽に帰って三日後……。

その間は、例えば新顔組の家を作ったり、詠と書類消化やらをした
りしていた。

そして今日は、割と暇になったので久しぶりに城下に降りてみた。
目的は貯蓄の為の店開きだ。

多分貯蓄は消える前の置き土産にでも使うんだろう。

「よっと」

俺の店は店舗ではなく、屋台みたいなモノでそれなりのサイズがあ
る。

だから、ガラガラと屋台を引っ張って適当に場所を探す。

「……ふう。今日は此処にしようか」

適当な場所で動きを止め、準備を始める。

「……こんなもんかね？」

俺の屋台の名前は『神影』

……名字を覚えとくには、こうでもしないと本気で忘れるんだよ。だって最近使わないんだし。

「おっ、いらっしやいませー」

「久しぶりの屋台だねー」

始めに来たのは、何故か毎回最初に来る常連さんだ。

この人は、何故か俺がのれんを上げると直ぐに来る。

マジでどっかで監視されてるのかと思ってしまいうくらいだ。

「取り敢えずいつもの」

この人の『いつもの』はご飯、味噌汁、肉じゃが、焼き魚のセットだ。

「……っと、はいよ」

即座に作り終え、商品を出す。
ちなみに、具材は全部アーティファクトで揃えてるのでタダで品質も良い。

タダなので売る値段も安く、毎回のれんを上げてから数十分でバカみたいにくる。
メニューは一般料理から始まり懷石料理。おでんとか特別料理まである。
それに比例して、屋台も大きくなる為、最早軽く移動式の店みたいなモノだ。

「……ピーク入ったか」

客がゾロゾロと入ってくる。
その分、俺も忙しくなる。

俺は一人で注文と調理、料理を運ぶのをしている。
……やる時に誰か雇おうかな……。

「えっとこのカツ丼を」

「天ぷら定食」

「きつねうどん」

「はいよ!」

3つも一気に言うなよ!

とか思わなくも無いが、ソレを受けどんどん作っていく。
しばらくの間、これくらいの忙しさが続き……。

「……………やっとピーク終わった……」

ホント普通の人なら過労死するくらいの量の人 came。
俺も疲れるくらいだ。

「お、久しぶりにやっとなるんやな迅」

「あ？ 霞か。どうした？」

「少しオマケしてや」

霞は俺にたかりに came ようだ。

……………まあ、出費無しだから良いけどさ。

「ホレ」

霞の前に特に度のキツイ焼酎を置く。

「お、氣い利くなあ」

「霞は酒類好きだろ？それは俺の国にあった焼酎っていう酒だ。あと、コレはおでんな」

取り敢えずおでんを渡す。

………なんか霞に甘いような気が……。
ま、いつか。余っても困るだけだしな。

「取り敢えず俺も飲むとしますかね」

俺はさつま揚げを取りだし、焼酎のつまみとして食い始める。

「なんか屋台の主が客と飲んでるっておかしいよな？」

「ええんちゃう？ウチは楽しいで」

「楽しいどころじゃ無いんだが……ま、いつか」

で、しばらく飲んでいたら新しい客が入ったみたいだ。

「あのー、ちょっと聞きたい事があるんですけど良いですか？」

「…へ？…ああ、分かった」

入ってきたのは濃い桃色？の髪の子と濃い水色？の髪の子
……劉備と趙雲だった。

（やっべー。愛紗を劉備達ん所に返すの忘れてたから取り返しに来たのか？）

「あの、愛紗ちゃん……関羽さんを知りませんか？」

……どうやら俺の事憶えてないみたいだな。
いやー、助かった。

『何してくれとんじゃいワレ！』みたいな感じになったら嫌だからな。

「聞き込みして回ってるのか？」

「あ、はい！しばらくの間、色んな街に回って探してたんです！」

「…ほお。大変だな。取り敢えずなんか食え？ほら、奢りだ」

適当な有り合わせを出す。

勿論趙雲にはメンマと酒を渡しといた。

メンマは材料をアーティファクトで出し、ソレを自分でメンマに変えたモノだ。

沢庵や漬物類もちゃんと自分で漬けている。

「コレはメンマ！……よく分かっておられる御仁ですな」

「フツ……。君はメンマが好きな雰囲気だったのね」

どんな雰囲気！？

って感じだが、そう言い訳をしといた。

「雰囲気で分かるとは！？……ならば、私を納得させる程のメンマか試させていただきましょう！」

……趙雲ノリ良いね！

しかし、俺が作ったメンマ！

流石にその程度では終わらんよ！

「……………！？こ……これは！？……御仁、ただ者ではありませんせぬな」

いや、スゴくノリ良いね！

俺もここまでのテンションで来るとは思わなかったよ。

「フツ……。どうだった？」

「これ程のメンマは初めていただきました！ああ、生きてて良かったと思えましたぞ！貴方はメンマ神ですか！」

……………メンマ神ってなんぞ？
まさかのメンマ神格化？

「いや、メンマ神では無い。一介の屋台の商売人だ」

「なんと！？貴方程のメンマを作る御仁が一介の商売人のワケがありませぬ！」

……………いや、何だかこのままじゃ暴露タイム突入じゃね？
霞は何かニヤニヤしてるし、劉備は対応に困ってるし。

「ならば、貴女にこのメンマを一壺差し上げよう。大事にしてくれると有り難い」

なんだろうこの茶番。
……まあ、仕方無いか。

「あ、ありがとうございます！御仁、名前は？」

「俺の名は」

王偉って言ったら不味いか？
いや、ならどうしょ……。
ええい！ままよ！

「王偉。真名は迅だ」

「なっ！？真名まで教えてもらってもよろしいのですか！？」

「フツ……。勿論だ」

セーフ！

真名のおかげで助かったよ！

「そうですか、迅殿。私は趙雲。真名は星です」

ま、真名を言い返すだど!?!?
ノリで言ったのに!

「ああ、ありがとう星」

「また今度こちらにメンマを買い求めに来ますが、よろしいですか
な?」

「いつでも良いぞ」

で、星と握手をした。

「そういえば………主偉と言う名は聞いた事がありますな」

ヤベツ!?

「あつ!もしかして愛紗ちゃんと戦った人じゃ…!?!?」

バレたアアアア!?

「……はあ……。ま、確かにそうだよ。俺は王偉守義。董卓軍の将だ。愛紗は確かに此方にいるよ。……そうだな。丁度良い、愛紗を連れ帰ってくれないかな？ 届け帰す暇が無くてね」

ま、元はと言えば愛紗が『恩を返さないといけない』みたいなコト言ってたから残ってたんだしな。
少しだけ寂しくなるけど、仕方無いか。

「え！？ 愛紗ちゃんいるんですか！？」

「ああ。無事だよ？」

「よ、良かったあ……」

ホッと胸を撫で下ろす劉備。

「ま、取り敢えず飲もうぜ？ 明日、愛紗ん所には案内するからよ」

「良いですな」

「飲もうやないか」

二人の酒豪と共に、俺と劉備も飲み、騒ぐのだった……。

ジュン「ふ、二日以上空いてしまった!？」

迅「三日ぶりといったトコだな」

ジュン「やっちゃった! 久しぶりにリトバスEXやってたら更新忘れてた!？」

迅「……この前モンハンモンハン言ってなかったか？」

ジュン「嘗めるでない。俺はモンハンもしっかりやってるぜ？」

迅「そうかよ」

ジュン「多分恋姫編は……式拾伍くらいで終わるかなあ……?」

迅「疑問系なんだな」

ジュン「ああ、呉軍と絡ませようと思うと参拾くらい気がするからなあ…」

迅「じゃあ孫策助けないのか？」

ジュン「助けはする。多分。………呉軍と絡ませるかどうか意見待ってます！それでは次回！」

恋姫編・第貳拾章 パワーアップした二度ネタ。いざ行かん戦場へと！

「んあ…………ツ…………頭いてえ」

飲んでる途中で意識が飛び、次の日になっていた。
頭は酷い二日酔いで痛み、軽く吐き気もする。

「また意識飛んだのか…………」

部屋から見ると、ちゃんと俺は部屋に戻れてきてたみたいだ。

「ふあ……………ん？」

右手に違和感を感じた。
前に一度感じた感触だ。
……………まさか…………。

「……………どゆ事？」

両側に霞と星、それに劉備がいた。

…………酒癖悪いのかな俺…………。

「つて、やっぱりいつまで触ってんの俺!？」

即座に手をどけて後ろに飛び退く。

…………アブねえアブねえ。

前回の二の舞になるトコだった。

「鍛練してるか…………」

部屋の端に前回付けといた鉄の棒に足を掛けて腹筋を始める。
起きたら何故か上半身裸だったが、まあいいだろう、多分気にする
事でも無いだろうし。

棒での腹筋は何だか楽だ。

いや、普通の腹筋よりは負荷は高いのだろうがそれでも何度もやっ
た者からすれば楽だと感じられるだろう。

「よつと…………少し試して見るか」

前に何のマンガかはもう忘れてしまったが、足の力で壁に張り付き、

歩くヤツがいた。
それならば、俺も出来るかも知れないという推測の下、試しにやってみる事にした。

「ぬっ……難しい…」

中々コツを掴めない。
壁の突起に張り付くのは中々簡単では無いようだ。

「こ、こうか？」

仕方無いので、気を足の表皮の外側に膜状まくに張り巡らせ、気を絡ませて地面に張り付いた。

「お、コツ掴めた」

コツも掴み、俺は天井を歩く。
………なんかこうしてるとコウモリみたいだな。

「ん？」

あ、霞起きたのか。

…………へ？

はいいい！？何で下着姿！？

「あっ！？しまっ！？」

呆氣にとられてしまい、気操作を誤り鈍い音を響かせながら地面に頭を打つ。

「つつー……いってえ」

頭を擦っていると、霞がこっちに来た。
服はちゃんと着てるみたいだ。

「大丈夫か迅く？」

「ああ、大丈夫。おはよう霞。……………俺って酒癖悪いのか？」

思ってた事を聞いてみた。

「なんや急にく？あく……………ちょっと言えへんなく」

言えないくらい酒癖悪いのか俺って!?

そう悩んでいたら、星と劉備も起きたみたいだ。

「おはよう二人とも」

「あ、はい!おはようございます!」

「おはようございます迅殿」

「それじゃ、愛紗ん所に行くか」

多分鍛練してるだろうしな。

うんうん、殊勝な心掛けだよ全く。

うちの武官の大体は自主練に励んで頑張ってるのはスゴいと思う。
特に、華雄が殊勝に鍛練するようになったのはスゴい事だと思う。

……と、そんな事を考えてる間に鍛練場に着いたようだ。

「愛紗はいるか?」

うちの奴らが先に自主鍛練をしていたので、取り敢えず居場所を聞

く事にした。

自主鍛練の内容は、模擬戦だったようで、何人かが組んで戦っていた。

一対多とかもあって役に立つ修行をしてるようだ。

『そちらに！』

部隊の奴らが一斉に一ヶ所を指差す。

愛紗もうちの奴らと鍛練をしたみたいだ。

一対五でやってるようだ。

「おはよう愛紗」

「あ、おはようございます迅殿……………と、桃香様！？何故此処に！？」

挨拶を普通に返したあと異変に気付いたようで、目を丸くしていた。

「愛紗を迎えに来たんだったさ」

「し、しかし私はまだ助けていただいた恩義を返せては……」

やっぱりそんな事を言うんだな。

「気にしてねえって。それに恩義ならもう前の戦で十二分に返したと思うけど？」

「しかし…」

「だあああああ！劉備と一緒にいたいかだけ言え！」

無限ループしそうなので結論だけ聞く事にした。

「……桃香様の元にいたいです」

「よし、なら愛紗を頼んだぞ劉備、星」

「あ、はいっ！」

「うむ、分かりましたぞ」

二人とも快諾のようだ。

まあ、快諾じゃなければ何で来たんだ？って言いたいかな。

「なら取り敢えず月のトコに行くか」

月にも言っておかないとな。

独断だと怒られそうだ。

主に詠に。

……で、月のトコに着き…。

「月、劉備が迎えに来たから愛紗返すぞ？」

「はい。良いですよ？」

毎回即答だなオイ！

って思った俺は悪くないだろう、多分。

「……………そうだ。同盟でも組まね？劉備」

手ぶらで帰らすと殴られそうだ、主に詠に。

「え？……うーん、朱里ちゃんに聞いた方が良いけど………はい！
良いですよ？」

とか言ってる間にいつの間にか詠が現れた。

「詠、同盟了承だつてよ」

「聞いてたわよ。アンタはボク達に了承なく勝手に話を進めるんだ
から………まあ、良いけど」

取り敢えず同盟成立のようだ。

「あ、そういえば最近どんな感じになってんだ他の国は？」

「そうね、今残ってるのはボク達と蜀、魏と呉よ」

………おろ？

魏って名乗ってるんだ。

……劉表消滅？

「劉表は？」

「魏軍が正体不明の飛び道具を使って倒したみたいよ」

……此処の一刀なんかハイスペック！？

ヤベーよ、俺何も政務で提案した事無いよ。

武器も鉄砲取り入れてねーよ。

「って、曹操ん所領地デケー！」

豫州、荊州、青州、徐州とか領地中国の半分くらいってんじゃない？

「そうね。……で、今は呉と戦をするような感じよ」

やっぱ来たアアア！

……取り敢えず助けに行きますかね。

「いつ頃なんだ？」

「多分あと三日以内に行われる筈よ」

……急ぎますかね。

「じゃ、詠。俺ちとそこ行ってくる。正体不明の飛び道具が何か見て来るよ」

「え?」

「じゃあ行ってくる! 月、詠、劉備達もまたな!」

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ!」

そんな詠の言葉も聞かず、俺は忍者的早さでその場を脱け出した。

「よっしゃあ! 見に行くか!」

目指すは呉VS魏の決戦場。

……此処の一刀マジハイスペックだわ……。

ジュン「今回は軽い繋ぎです」

迅「さらっと言うな」

ジュン「おう。因みに？作者はリトバスEXをしながらコレを書いてみた。なんだろう、悪ふざけな感じがした」

迅「まあそりゃな」

ジュン「ゲームしながら書くとダメだと良い教訓になった」

迅「それは当たり前じゃないか？」

ジュン「当たり前だが当たり前じゃない！」

迅「ワケわからんっ！」

ジュン「まあそういうな。俺はまた一つ進化したのだよ。はっはっはっ」

迅「微妙な進化だな」

ジュン「まあ、次回から頑張ろう。呉編に入るかは意見次第です。感想か評価くれると感謝感激雨霰序でにヒヤッホーイとか言ってます」

迅「そんな奴に書かれてる俺って一体……」

ジュン「それでは次回っ!」

恋姫編・第貳拾壹章 まさかのご都合主義

戦地に向かうこと約一日……………。

ようやく、場所に着いたようだ。

よく見ると、魏軍の兵の中にこの世界では見たことの無い武器があった。

「……………鉄砲か。ホントこちらの世界の一刀はハイスpekだな」

一刀の無駄な銃の知識に感心する。

銃の形態は火縄銃。

よく歴史の授業に出るような種子島鉄砲だ。

この世界の技術で、其処までの性能の火縄銃を作るのは、正直不可能に近いのだが、一刀は現代の知識をフル活用して火縄銃を作ったようだ。

……………それにしても、魏の将が一人も見えないんだが何故だ？

「つと、急ぐとするか」

時間は多分あと少ししかないだろう。

ここまでやって『助けられませんでした』じゃ話にならない。
全速力で行くとするか。

「…………ふっ…!!」

一度地面に足を着き、力を込めて踏み込む。
踏み込む瞬間、地面に罅^{ひび}が入り、小規模なクレーターが出来たが、
敢えて無視するとうしよう。

「方向は…」

方向を確認する。

……どうやら、方向は合っているようだ。

「…………アレか？」

遠くに見える褐色の肌に赤色っぽい服。
…………アレだな、まだやられてないか。
とりあえず急ぐか。

「よっと……………」

飛び終わり、やっと孫策のトコにたどり着く。
孫策が気付いたようでコチラに振り返る。

「あなたは……確か王偉だったわね。何をしにきたの？」

あからさまな警戒を以て返される俺。

「なにに、少しばかりここで散り逝く定めだった命を救いに来ただけだ」

「?……何を言ってるのか全く分からないわね」

それは分かるワケ無いだろ？

俺は流れを知ってるから来ただけで。

「ま、孫策。君の敵にはならんさ。俺はこの世界から去る前にこの国を統治しなくてはならなくてね」

「そう。なら良いわ」

微妙な顔を以て返された。

……『世界から去る前に』ってトコ『死ぬ前に』と勘違いしてるな。

「一応補足しとくが………ッ!!」

話そうとしたら向こうから矢が迫って来るのを感じた。

「チッ！孫策ッ！」

「えっ！？」

孫策に近付くと同時に何故だか急に体が重くなる。

（チッ……！まさか！？）

そう考えた瞬間最悪の音が鳴り響く。

【ご都合主義が発動した】

（最悪だッッ！！こんな時になりやがるとかどんな了見だッ！）

しかし、このまま孫策を見捨てるなど俺の魂が許さん。

「クソッ！」

孫策を庇うように抱き締める。

「グッ…」

その瞬間、背中が熱くなり激痛が走る。

「ッざけんなアツッ！！！」

暗器の中身を出す。

激痛からか出す量を加減出来ず、暗器の大体が射出され、刺客をめた刺しにする。

刺客全員のうち、一人は右手右足切断、二人は両足切断、残りは死んだみたいだった。

刺客のやつらも逃げる事は叶わないだろう。

「グウッ……。怪我ア無いか孫策？」

「……私は大丈夫だけど、王偉の方が無事じゃないわよ！」

うん、分かってるさ。

背中から血が止めどなく溢れてる。

……………なんだ？

「なっ……。視界が…」

「どうしたの王偉っ！」

助けたからか心配してくれてるようだ。

「視界が歪む……。ツッ！」

次は強烈な吐き気に目眩、悪寒など様々な症状のフルコースだ。

「な、なんつーもん矢に塗ってやがる……」

ヤバイ、本気で死にそう。

意識も飛びそうだし、視界も霞む。

あんま考えられなくなってるし、吐き気が激しい。

悪寒も激しくもう立ってられない。

「グッ……」

膝を着き、地面に手を付け血を吐く。

「王偉！」

「……………ははははは…。笑えねえよ全く…」

なんか耳も聞こえづらくなってきた。

「孫策……。とりあえずは無事で良かった。お前が死ぬ運命から救いに来たんだ俺は」

なんか孫策が言ってるけど、聞こえない。
あ、もう意識が……。

「もっと体よく助けられれば良かったんだがな」

そうとだけ告げて俺は意識を手放した。

ジュン「球技大会終わったアアア!!」

迅「……リアルのか」

ジュン「そうだよ。球技大会あったんだ。優勝出来てヒヤッホーイだよ」

迅「そうか」

ジュン「言い訳ですが、リアルの球技大会に専念してたので、ちょっと投稿間空いてしまいました。今日からはまたいつも通り投稿すると思います」

迅「二日に一回の投稿ペースに戻ると言うことか？」

ジュン「そういうこと。球技大会がバスケットじゃなくてバレーなんだが、これ如何に？」

迅「いや、知らねえし」

ジュン「球技大会ってバレーじゃなくてバスケだと思っただよね」

迅「そうかよ」

ジュン「……………素っ気ない……。っと、それでは次回！」

恋姫編・第貳拾式章 目覚め

———温かい。

俺はその感覚に現実に戻された。

「……む。見知らぬ天井だ」

開口一番、定番ともいえるセリフを発する。

そのセリフの通り、俺はこの天井を見たことがない。

いつもの寝床ではなく、知らない光景だ。

いや、意識を飛ばす前から見るなら此処は孫策達呉の領土なんだろうな。

そういや、ホントに孫策は無事だったのか？

あの毒の有毒性だと、掠り傷でも当たっていたとしたら、毒死する可能性もある。

「……外に出るか」

起きてすぐ誰かが入ってくるなどということは、正直漫画やアニメ、ゲームで無い限り有り得ないからな。

「よし、向かうか」

外に出たが、場所がさっぱり分からない。
当たり前だが来たことが無い以上、場所が分からないのだ。

「すまない、少し良いか？」

「はいっ！何でしょうか？」

・・・やっぱり呉だったか。
俺が今会ったのは名は周泰、字は幼平だ。
まあ、知らないフリをしないとイケないがな。

「孫策は無事だったか？」

「あつ、はいっ！無傷だそうです！」

・・・警戒・・・しないのか？
言っちゃなんだが、俺この呉の中じゃ不審者だぞ？

「そうか。ありがとう。俺は王偉守義だ。君の名は？」

「私は周泰です。よろしく願いしますね王偉さん！」

・・・元気だし、フレンドリーだねオイ。

「ああ。すまないが、鍛練場に案内してくれないか？」

「私もちようど向かうので、着いてきてください！」

そういう周泰の後を付いていくと、まもなく鍛練場らしき場所に着いた。

「此処です！」

「ありがとう周泰。今度お礼でもさせてもらおうよ」

「お安い御用です！それではっ！」

そう言って周泰は走り去ってった。

「・・・軽く運動でもするか」

仮想相手との仮想仕合を始める。

………ん？

おかしいな。

体にいつもの重みが無い。

………そうか。

暗器大体使いきったんだったな。

銃器は残ってるようだが、刃物類は大体出したみたいだ。

「……参ったな。また補充しないと」

………補充かなり時間かかるんだよな。

前回四時間くらいかかったっけか。

「はぁ………」

「なーに溜め息吐いてるのっ？」

「なっ！？そ、孫策か………」

背中を叩かれ、後ろに振り返ると孫策がいた。

「王偉。もう大丈夫なの？」

氣遣ってくれてるようだ。

だが、俺は超即再生持ちなので、毒でも即座に抗体を作れる。

・・・ま、アレが働いてる時は無理なのだが。

「ああ、おかげさまでな」

「華佗に見せたら、『病魔はいないようだが？』って言われて驚いたわよー！」

・・・今度華佗に会いに行くか。

「ま、そりゃな。超即再生持ちだし俺」

孫策は頭に大量のハテナを浮かべる。

「なによそれ？」

「瞬時に回復・治癒・解毒が出来る力かな」

「回復出来てなかったじゃない」

そう言ってまたもや頭に大量のハテナを浮かべる孫策。

「厄介な特性があるからな」

「へえ、そうなの」

込み入った事は聞かないみたいだ。

……って、孫策の手に酒があるんだが？

「王偉、飲みましょ？」

「構わんが……ホントは一人酒だったのか？」

一人酒ってなんか虚しい気がするな。

ま、外で飲む場合の話だが。

「違うわよ？王偉の看病しながら飲むつもりだったし」

・・・・・・俺はついでか!?

「・・・・とりあえず飲むか。どこで飲むんだ?」

「勿論王偉の部屋よ」

当たり前みたいな顔で言われる。

・・・・当たり前なのか?

「・・・・まあ、いいか。ところで、仕事はしたのか?」

体をビクッと震わす孫策。

・・・・・・仕事サボってきたのか。

「・・・・冥琳が探しに来たら匿ってね?」

「いや、仕事はしないと。大した量じゃ無いだろ?」

周瑜がやるんだし、書類の山とかは無いだろ。

「大した量よ!腰くらいまで書類があるってどういう事よ!?」

「割と少なくないか？俺は頭より高い書類の山が二つあった時もあったぞ？」

ってか、ほぼ毎日。

詠と毎日やってたな。

「なんでそんなにあるのよっ!？」

「いや、最近じゃコレが普通だぞ？」

そう言ったら、孫策はなんか考え始め…………

「…………そうよっ!なら王偉、書類片付けるの手伝って!」

…………どうやら、孫策は俺を看病しにきたのをすっかり忘れてたらしい。

「…………えー」

「ダメなの？」

手を握ってこちらを見つめてくる。

「・・・・・・・・しょうがない。周瑜が了解したらな」

そして、俺は軽く折れた。

俺は、女性に頼まれたら断れない悲しい男だった。

——そして、周瑜のトコに移動し……

「冥りゝん！」

「雪蓮！どこ行ってたの！！あれほど逃げないようにと言ったのに！！！」

「まあまあ♪細かいことは気にしない♪」

そう言ったら、周瑜は溜め息を吐いていた。

「……はあ。まあもう戻ってきたなら良いわよ……。……
で、王偉だったわね。貴方はどうしたんだ？」

「それは孫策から聞いてくれ、周瑜殿」

何となくだが、『殿』が付いてしまった。
無意識って恐ろしいな。

「そうそう！王偉は文官の仕事も出来るらしいのよ！」

「却下ね」

孫策の言葉を全部聞かないまま却下の一言を発する周瑜。

「ええっ！？まだ何も言っていないじゃない！」

「……はあ。雪蓮の事だから『王偉に手伝ってもらえば良いのよ！』とか言うんでしょ？呉の人間でも無いのに呉の仕事をやらせるワケにはいかないじゃない」

わざわざ声真似までして言おうとした事を言う。

「うっ……。そうだけど……」

「それに、どのくらいのものか分からないじゃない」

「……俺嘗められてる？」

「聞き捨てならんな周瑜殿。曲がりなりとも詠と共に書類消化を担当していたのだ。それなりに知恵は回るつもりだよ」

「……ほう。なら、試させてもらおうとするわよ？」

「望むところだ」

そう言うと、書類を一枚取り出す。

「それじゃあ、コレの対策について言ってもらおうかしら」

「……凶作についての問題か。」

「コレは……例えばこんなのはどうだろうか？」

今年は気温的には問題ない。

それで凶作が起きるということは即ちそれは土の養分が足りないか、イナゴなどの害虫の発生、またはしくは塩害によるものだろう。

塩害については解消法は知らないが、他のヤツの解消法を提示することにした。

「……ほう。コレは中々素晴らしい案ね。使わせてもらうけど、構わないかしら？」

「全然大丈夫だ」

どうやら認められたらしい。
やったぜ！

「冥琳、どう？ スゴいでしょ！」

胸をはる孫策。

「雪蓮が自慢げに言うことじゃ無いわよ」

即座に諭されていた。

「どちらにしろ、王偉には書類仕事は任せられないわ」

「俺はあくまで董卓軍の将だからだろ？」

「その通りよ」

敵軍に書類任せる軍師は馬鹿だもんな。
いや、作戦としてなら使えるか・・・。

「それに、雪蓮の仕事を押し付けるのはね」

周瑜！良い人だ！

・・・って、そういえば周瑜は病に掛かっているんだったな。
・・・よし、助けるとしようか。

「周瑜。ちと良いかね？」

「何かしら王偉？」

こちらを向く周瑜。

「対一で話したい事がある」

「……分かった。雪蓮。少し外に出ていてくれないか？」

雪蓮は文句を言っではいたが、そのまま部屋から出て行った。
周瑜は俺の真剣さに配慮してくれたようだ。

「……周瑜。君は病にかかっているね」

周瑜の眉がピクリと動く。

「……何故それを」

「やはりか。一つ事実を言うのでしょうか」

「なんだ？」

「その病を俺は治せる」

死者をも治す医神の杖『アスクレピオスの杖』さえあればこの世の万病の全てが治せるからな。

「ツツ!!それは本当か!?!」

周瑜が藁にも縊^{すが}るように来る。

・・・最後の希望といったところか。

「ああ、今治療しよう。アデアット」

久しぶりにアーティファクトを取り出す。

そのまま、アーティファクト内から医神の杖『アスクレピオスの杖』を取り出す。

「癒せ。医神の杖『アスクレピオスの杖』」

真名開放時は初めて見る。

基本的にやる時は自分が見れない時だからだ。

真名開放時はどうやら対象人物と、杖が光るらしい。

実際、その状態にある周瑜はえらく驚愕していた。

・・・光が止んだみたいだな。

「治療は終わったぞ周瑜。身体の具合はどうだ？」

「あ、ああ、驚いた。今までであった身体の違和感が無くなった。王偉は妖術使いなのか？」

まあ、そう見られる事もあるよな、うん。

「いや、コレは宝具と言ってな。コレの力は全ての回復を示す・・・
極限的に言うなら死者をも生き返らせる事の出来る杖だ。ま、死者を生き返らすなど愚の骨頂はしないがな」

「そうか。なんにせよ、感謝するぞ王偉」

そう言って頭を下げる周瑜。

「頭を上げてくれ。感謝されたくしてゐるわけじゃない。ただの自己満足だ」

「いや、それでも命を救ってくれてありがとう。私の真名は冥琳だ」

・・・真名だと！？

「良いのか？」

「ああ、私からの信頼の証といったところだ。受け取ってもらえると助かる」

「そうか。ならよろしく冥琳。俺の真名は迅だ」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

そうして、俺は周瑜・・・いや、冥琳と真名を交わした。

「雪蓮く！もう良いわよ！」

扉の向こうに声かけるが応答がなく、冥琳が見に行くが・・・

「・・・」

怒った顔で冥琳が戻ってきた。

「雪蓮はいなかったわ……。また逃げて……」

そう言うと、冥琳は孫策を追いに行った。

「……俺は戻っておくか……」

そうして、俺は客室へと帰っていった。

恋姫編・第貳拾式章 目覚め（後書き）

ジュン「お、お久しぶりです・・・」

迅「なんか疲れた感じだな？」

ジュン「機種変したら予想以上に書きづらくなったんだよね」

迅「そんなにムズいのか？」

ジュン「大分な。コレ書くのに三日も掛かった・・・早く慣れないと・・・」

迅「そうだな」

ジュン「慣れたら二日に一回に戻れると・・・って、そうだな。一刀の処遇・・・。生きてるか、死んでるかどっちが良いですか？」

迅「サラッとアブナイコト言いやがった!？」

ジュン「処遇についての感想お持ちしてます!! それでは!!」

恋姫編・第貳拾參章 同盟決定。皆のところに帰るかな。

次の日、俺は帰るための準備を終え（ただし荷物は一切無い）孫策と冥琳のトコに向かっていた。

呉にいたとはいっても、その間2日間しか起きておらず、まだ話してない人物ばかりだがそこまで長居する時間は無さそうなので、取り敢えずすぐに帰る事にしたのだ。

それにしても、魏軍の眼鏡の男とは誰だ？

何か引つかかるような……。

まあ、いい。

今は取り敢えず月達に利益が出るように、呉と同盟を組まないとな。

「失礼する」

中に入ると、孫策と冥琳、それに孫権がいた。

「あ、王偉く。どうしたの？」

「王偉か。先日は雪蓮姉様を救ってくれた事・・・感謝する」

対照的な姉妹だな。とか思いつつ、孫権に返事をする事にする。

「ああ、気にしないでくれ。俺がやりたいからやっただけだ」

「・・・で、どうしたんだ迅？意味もなく寄ったわけでは無いんだろう？」

さすが冥琳だ。
鋭いな。

「・・・って、なんか空気が凍ってるんだが？
なにか悪い事あったか俺？」

「・・・なあ、冥琳？俺なんか悪い事言ったか？」

心配になったので冥琳に聞いてみた。

「・・・いつのまに真名交換したのよ！？」

「・・・あ、そうゆう事？」

「昨日だけど？」

冥琳とハモる。

「王偉!!」

「はいっ!」

孫策の声に背筋を良くして反応する。
な、なんだ一体?

「私の真名は雪蓮よ」

・・・はい?

「・・・へ?」

「聞こえなかったの? 私の真名は雪蓮よ」

・・・マジで?

「あ、ああ、俺の真名は迅だ」

軽く驚愕しつつそれに答える。
マジでどうした？

「雪蓮姉様！？」

ほら、妹さんもビックリしてるよ？

「よろしくね、迅？」

「ああ、よろしく雪蓮」

それでもちやっかり呼ぶ俺。

「と、それはさておき冥琳。話がある」

「なんだ迅？」

「俺達と同盟を組まないか？」

「それは董卓軍と同盟を組もうという提案で相違ないか？」

多分断られはしない・・・よな？

「もし断ったのなら・・・？」

まあ、ifを聞くのもありだよな。

「なに、俺がお前らの敵になるだけだ」

「・・・分かった。同盟を組ませてもらうわ。迅の実力は反董卓連合の時で遠目に見たからな。アレには恐らく呉では敵わないだろうな」

「それに」と繋ぎ、話を進める。

「雪蓮は同盟を断わる気は無さそうだからね」

確かに雪蓮断らなさそうな雰囲気してるよな。

「ありがとう。俺はもうそろ洛陽に帰らせてもらおうよ」

「ふむ……。それなら急いだ方が良いわね」

……何故に？

「董卓軍は弔い合戦のように魏との戦の準備を整えてるらしい」

……なんだとおおおお！！？

「えっ！？情報回るの早くないか！？」

「ああ、おかしい。誰かが故意に噂を流しているようだ」

「誰かって誰なんだ？」

「分からない。ただ言えるのは、魏と董卓軍を戦わせる事で利益を得れる誰かである事は間違いないだろうな」

……誰か分からんな。

「なにはともかく急いだ方が良い。董卓軍は涼州も手に入れたようだが、それなりの疲労している。魏の正体不明の武器がある以上、警戒するべきだ」

恐るべしスペック!?

・・・帰ったら、馬家もいるのか。

ああ、マジで大所帯だな。

「分かった。急いで行くとする。もしまた会える機会があった時はなんか飯でも食うでしょう」

「期待してるわよ」

雪蓮・・・期待はしないでくれ・・・。

「まあ、分かったわ」

「おう、それじゃあな」

そう言って外に出る。

「怪我させるといけないし、さっさと飛んでくか! こういう時に身

体が軽いのが役に立つな！」

前回暗器大体出したのが役に立ったとか思いつつ、俺は地面を強く踏み董卓軍のみんなの元に向かって行くのだった。

ジュン「少し慣れたかな？」

迅「どの程度にだ？」

ジュン「三日で書ける程度に」

迅「微妙なトコだな・・・」

ジュン「そう言うな。きっといずれか完全に慣れるからさ」

迅「そうか。なら、良いか」

ジュン「それにしてもホントに三十話回りそうだな・・・」

迅「そうか」

ジュン「それにしてもこの小説が俺が書いてる中で一番話数多かったんだが？」

迅「最後に始めた筈だったんだがな」

ジュン「そうだよ。自分でもビックリってヤツだな」

迅「そうかよ。って、24日に更新するお前って暇人だな」

ジュン「言わないでくれよおおおお!!」

迅「まあ・・・なんだ? その・・・スマン」

ジュン「謝るのやめれえええ!!・・・まあいいか。それでは
次回」

…………それから約三時間。

ようやく洛陽に辿り着いた。暗器の大体が出払っているからか、体
がかなり軽かった為すぐにたどり着く事が出来た。

「懐かしいぞ洛陽の空気! ハッハッハッ!」

なんか久しぶりに帰って来てテンション高くなったが、まあ気にし
ないでおこう。

…………それにしても孫○空みたいに舞空術覚えるべきかな…………。
現状は、ただ空中に気で足場を形成してるだけだしな。

うーん、どうも気を使えるだけで一般人からさほど逸脱してない気
がする。

…………まあ、そんなに逸脱したくはないが。

…………と、そんな事を考えている間に城に辿り着いていたよう
だ。

「すまない。少し良いか？」

「はい、何の用でしょうか? ……って、王偉様! ? よ、良

くぞご無事で!!」

普通に生きてるんだが？
その扱い酷いよな。

「ああ、皆はいるか？」

「あ、いや、その……」

……どもるなよ。

「将の方達は王偉様の敵（かたき）と魏軍討伐に向かいました……」

「はあっ!?! 行動早過ぎんぞオイ!?!」

そして、俺はそんなにさっくりぶっ殺される感じなのか!?!
思わず涙目だよ!

「いつ向かった!」

門番に詰め寄る。

「え、えっと・・・大体三時間前です・・・」

俺が呉を出たちょうどぐらいじゃねえか！
早すぎだよ兵整えるの！

「分かった。どちらの方角だ！」

「そ、そちらの方角です」

「分かった！じゃあな！」

兵士の指差した方向に全力で踏み込んで、飛ぶ。

・・・早く行かなければ・・・。

・・・それから大体二時間くらいたっただろうか。
ようやく皆の姿が見えた。

その前方には魏軍も見える事からどうやら戦う直前と見て間違いないだろう。

・・・それにしても、一刀と曹操が見えないんだが？

「何はともあれ、今は戦いを止めるとするか」

着地予想地点は董卓軍と魏軍の間だ。

・・・お、そろそろ着地に専念するか。

「よっと・・・着地成功っ」と

目標通りの場所に着地することが出来た。

「」「「迅!?!?」」「」

詠、恋、霞、華雄が声を上げる。

陳宮はまるで幽霊でも見るような顔で驚いていた。

その後、陳宮も少し顔が綻んでたみたいだから少しは心配してくれていたみたいだ。

「さて、皆。俺生きてるんだし、弔い合戦の意味ないだろ？さっさと帰ろうぜ？」

・・・今戦わせたなら被害も大きいだろうしな。

「おや、まさか生きているとは思いませんでしたよ」

・・・誰だよこのメガネ。

「まさか、あの矢尻に塗らせた致死性の毒をその身にくらってなお生きているとは・・・流石この世界のイレギュラーといったところですね」

葉キツかったのって俺殺す為だったのか。

・・・って、このメガネってアレじゃね？

外史の管理者だっけかの于吉じゃないか？

「外史の管理者・・・か？」

「その通りです。私は于吉。この外史は既に最悪の状況にいたってしまった。外史が正史を捻じ曲げるという最悪の結果。だから、私達はこの世界を消さなければならぬ。・・・この世界はすでに本郷一刀の手から離れ、神影迅というイレギュラーに起点を移し、更には独立の兆（きざ）しさ見え始めました。だからこうして私は裏から表舞台へと出て来たのです。また会いましょう神影迅。準備が整い、戦が始まる時・・・その日こそが貴方の命日となるのです」

そうとだけ告げて于吉は去って行った。

・・・って、なんでこんな事態に？

何故俺が起点に？って、なんで一刀が起点じゃないって分かったんだ？

・・・疑問は尽きないが、取り敢えず今は考えないでおこう。

今は、皆との再開を嬉しむべきだろ。

「皆ただいま」

今は戦いに来ている詠、霞、恋、華雄、陳宮に言う。

左翼、右翼にもまだいるみたいだからあとで会いにいくでしょう。

「ホント心配したんやでな迅」

「ホントにだ。迅の噂を聞いた時はどうしようかと思ったぞ」

「……………迅、心配・・・した」

「ボク達に勝手に出てって心配させんじやないわよ」

「恋殿を悲しませるとは不届きな男なのです！」

口々に言葉を言っていく。

全員軽く涙目なので、それが俺に罪悪感を植え付ける。

「本当にすまなかった」

だから、つい謝ってしまった。

俺ってこんなに頭低かったっけな・・・？

「まあ良いわよ。ボク達全員今は怒っていないんだから」

それに、四人とも頷く。

……………詠がホントに優しくなってるような……………。

「取り敢えず……………」

「「「お帰り、迅」「」」」

五人から一斉にそう言われる。

・ ・ ・ ・ ・ なんか帰ってきたって、感じがするな。

「ただいま、皆」

それに返事をした。

・ ・ ・ ・ ・ このあと、他の戦線に出ていた面々、斗詩、猪々子、七乃、ハムさんに再会の挨拶を、馬超と馬岱には自己紹介をした。

・ ・ ・ ・ ・ そして最後に我が部隊に向かうと ・ ・ ・ 。

「迅上官が甦ったアアアアアア！！！！うおおおおおお！！！！甦って神に、神になられたぞおおおお！！！！」

・ ・ ・ ・ ・ 何故俺が神に ・ ・ ・ 。

これが後にキリストと並びうる中国最大の宗教となるとは誰が思っただろう。

・・・ここに信仰宗教『神影教』が生まれた瞬間であった。
ちなみに、名前は屋台からとったものである。

「迅様ああああああ！！死後もついて行きますううう！！」

・・・いや、丁重にお断り願いたいです。
いや、マジで怖いんだよその剣幕。

「迅さん」

「お、拭か」

この中でもクールでホントこの部隊の中の保冷剤的存在だよお前は。

「・・・オレも迅さんに死後も着いて行くぜ」

・・・保冷剤溶けてたああああ！！

「待て、拭。いや、マジで。言っとくが・・・」

「皆まで言わなくても分かってるさ。迅さんに着いて行けるくらい、自分で強くなるさ」

話聞けよおおおお！！

結局、俺は迅達の部隊の勢いに押されて反論が一切出来ないのだっ
た・・・。

ジュン「お、遅れてしまった。申し訳ないですて、今年もあと少し、今年中には終わりそうに無かった恋姫編。一月中には必ず終える気です」

迅「今年もあと今日を含めて四日だな。皆さん、良い年末を迎えられそうですか？」

ジュン「ちなみに作者は大掃除やってないよーヤバイ!マジヤバイ!って感じです。ぬわあああああ!!あと三日で大掃除かよおとおお!!?」

迅「自業自得だと思うぞ?」

ジュン「久しぶりに扱いヒデーよ!!」

迅「これが俺だ」

ジュン「ついでに年始二日も俺バイト。……泣いていい?」

迅「却下」

ジュン「ここに悪魔が！？・・・まあいい。それでは次回！」

・・・それから洛陽に帰り、月達居残り組とも再会し、挨拶も終えいつも通りに戻ったところで、ふと考えた。

（アレで力弱くなってやられるんじゃないかなあ・・・）

毎回、対女性や時代の流れるモノで力を制限される。

それで、ピンチになるのは修行が足りてないのではないかと思った。

「よし、そうと決まりや行くとしますかね」

今暇そうな拭とか誘って戦るか。

・・・で、鍛錬場に行くとやはり拭がいた。

「拭、すまないが鍛錬に付き合ってくれないか」

「ああ、迅さん。オレも鍛錬の成果を確かめたかったトコだからコッチから頼みたいぐらいだったんだ。アレも久しぶりに使いたいらな」

拭は包帯が巻いてある腕を触りながら言う。

「・・・・・・・・そういえば、結局アレなんだよ？」

「久しぶりに身体能力のみでやらせてもらうぞ？暗器も出払ってるし丁度良いだろ？」

「ああ、別に構わないぜ。気を使われちゃ相手にならないからな」

「・・・・・・・・ん？」

今回はいつものあの剣使わないのか？

「拭。お前剣使わないのか？」

「久しぶりの本気だ。殺す気で行くからな」

そう言って包帯をとる。

包帯から毒々しい色の手が見えた。

「うちの親父は変わり者でな。暗殺を主に行っていたんだ。そのせいか、オレは小さい頃から色々やられてな。蠱毒みたいな感じか。親兄弟と殺し合いさせられたんだ。これはその名残か、毒手というモノだな」

「ほう。恐ろしいまでの濃度だ。これ程の毒手を見た事が無い。経緯は色々酷だが、拭自体が気にしてないなら俺はなんにも言わん。さあ、やり合うか」

ま、やった事あるヤツは純度が低過ぎる紛い物で、毒手がなんたるか理解も出来なかったがな。

「なら……行くぞ!!」

刹那、拭は体を前傾の形にし瞬時に俺の懐に入る。

(む……速いな)

俺は即座に後ろに後退しながらの三段蹴りを放つ。

しかし、当たる直前で言いような無い悪寒……。

・例えるならば、脅威がそのまま身をなしているようなそんな感じがし、俺は後ろに飛び退いた。

その行動をしてから一秒程度の間がありその後、俺が先ほどまでいた所に拭の毒手が接触する。

「……流石」

俺が先ほどまでいた地面はその一撃により、まるで溶ける氷のように脆く霧散するかのように溶けた。

その後に、妙な刺激臭が発散される。

「……ここまでとはな……正直冷汗モノだな」

アレを食らった日には瞬時に骨が、肉が溶けて崩れ散るだろう。

超即再生があらうとも食らいたくない攻撃だな。

「なら、俺も行くぞ！」

地面を蹴って、右方からの蹴り……と思わせて、即座に後ろに引き

体を回転させて死角から蹴りこむ。

「っ！ハアッ！」

蹴りを与える直前、手がこちら側に来た。

俺はそれを避けるべく、支えにしていた左足を思いきり蹴って回転し、手を避けつつも拭の側頭部に蹴りを与える。

「……っ！？うおおおおお！！」

拭は衝撃で弾き飛ばされたようだが、空中で体勢を立て直しそのまま飛び掛って来た。

その姿はまるで肉食獣のソレで、殺気も獣染みていた。

……速い事は認めるが、直線的過ぎるな。

「その程度かあっ！ラアッ！！」

正面から向かってくる拭を側頭部への回し蹴りをくらわす。

……感覚的に脳震盪（のうしんとう）確定だな。

ちよっと側頭部狙いすぎたな。

まあ、確実に脳震盪狙いたいなら顎に掠らせて脳揺らすのが良いん

だがな。

「グッ……ガッ……！」

「大人しくしてろ。脳震盪だ。少し休憩しておけ」

そう言っていたら、後ろから声がかかった。

「迅」

「ん？ ああ、詠。どうした？」

「溜まった仕事さっさと進めなさい」

「……………ぬあああああああ！！」

せっかく程よく忘れてたのに！

どういう事だよ！？ 文官増えたよな！？

なのになんであんなに溜まってるんだ！？

アレか！？ 勝手に行った罰か！？

「ほら、行くわよ」

「・・・・・・・・ああ、分かった」

結局逆らえない俺を腰抜けというなら、俺は腰抜けなんだろうな。
でも、どっちかと言えばヘタレか？

・・・・・・・・ヘタレは嫌だな。

・・・・・・・・そうして、もはや目を瞑っても行けるくらい出入りして
いる執務室に着き、7つくらいの地面から頭くらいまでである書類と
の格闘を始める。

「・・・・・・・・」

ただひたすらに無言で書類消化をしていく。

書類消化は気をフル活用し、身体能力、反射神経、動体視力その他
色々を限界まで格上げする。

そのおかげか、俺の手の動きは大抵の者では見切れないと自負出来
る程に早くなっていた。

おそらくは、詠はこの手の動きは見切れないだろう。

そんな事を考えていたら、詠がふと話し掛けて来た。

「迅、アンタの部隊。明日からもう一つ増えるわよ」

「・・・・・・・・へ？」

思わず間拔けな声を上げ、書類消化を一時ストップする。

「すまない。どうやら耳が遠くなっていたようだ」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・。仕方ないわね。アンタの部隊明日からもう一つ増えるわよ」

「・・・・・・・・聞き間違いじゃ無いのか。」

「・・・・・・・・そうなのか」

「ええ。今回は手加減しなさいよ」

「分かった。将と渡り合える程度にしておく」

「それが普通じゃ無いのよ……」

詠に溜息をつかれた。

……そういえば、聞いた話だと俺の部隊は一個人が有名どころじゃない将と互角かそれ以上らしい。

勝手に宗教活動もしてるみたいだし。話によると順調に信者が増えているそうだ。

最近俺の鍛錬でへばらなくなったしな。何処にそんな余力があるか聞きたいな。

拭はどうやらそれなりに上の実力を持ってて、たまに華雄とかと手合わせしてるらしいからな。

「分かった。アイツラと同じ修行は……」
「ダメに決まってるじゃない」……そうだな。分かったよ」

それにしても新しい部隊ねえ……。

今度はマシな奴らだと良いけどな。

どうも俺の周りってなんか変人奇人の部類に入る奴らしか来ないような気がするんだよな。原作キャラは除外してだが。

コレってもしかして生きてる上での俺の業なのか？

「つと、とりあえず再開するか」

そうして俺はまた書類消化を開始するのだった。

ジュン「お久しぶりです！新年初投稿ですね。今年も頑張りたいと思います」

迅「形式挨拶感満天だな」

ジュン「そう言わないでくれ。挨拶の仕方が分からないんだ」

迅「なんだそれ？」

ジュン「いや、友達なら大丈夫だぞ？こういう挨拶の仕方が分からないだけで・・・っと、まあそんな事はどうでも良いんだ」

迅「良いのか？」

ジュン「ああ、良いんだ。今回からT w i t t e rで小説の更新を報告してこうと思うんだ。気分の思いつきだけど」

迅「お前のだらしなさが垣間見得るな」

ジュン「言い方ヒデッ!!」

迅「妥当だろ」

ジュン「……もう良いよ。取り敢えず、IDはJUN―MDです。見てくれるとありがたかったり♪」

迅「音符とかマジ勘弁してください」

ジュン「うん、自分でもどうかとおもったよ……」

迅「ならやめろ」

ジュン「ああ、もう音符は使わん……。取り敢えず、それでは次回!!」

恋姫編・第貳拾陸章 新しい部隊長。……………あぁ、俺人運ねえな……………。

次の日俺は詠の言葉により、鍛錬場にいる新しい軍の下に向かって
いた。

あの後誰から聞いてたのか、うちの部隊のトコに行ったら血の涙を
流していた。

曰く『我らが神の下に新しい部隊が着くなんてっ!!』らしい。
どうやら第二隊とは敵対関係になりそうだ。

「つと、そろそろだな」

それにしても、董卓軍で有名な武将なんていたか？

拭は聞いた事無い武将だったしな。

また知らない武将なんだろうな……………。

……………あぁ、今回はまともな性格の武将が良いなぁ……………。

鍛錬場に着くと、見た事無い部隊がならんでいた。

男女比率1…9くらいか……………女性が多い……………。

扱い辛かったらありやしないな……………はぁ。久しぶりに厳肅に行
くか。

「さて諸君!!俺が此度よりお前らの上官となる王偉守義だ!貴様
らの中で俺に勝てる自信!もしくは一分でもその望みがあると自負

しているヤツは今すぐ前に出る!!」

「……今回は一人だけが出てきた。

女のようなだが、素晴らしく威勢が良いじゃ無いか。

アイツラと比べると他のヤツが異様に威勢が足りないがな。少しは自意識過剰のヤツが多くても良いと思うんだよ俺は。……まあ、うちの奴らは威勢が良すぎたんだがな。

「……ほう。名乗れ」

「私は朱燕。字は武雲よ。貴方が私達の隊長になるらしいけど、私は私より強い相手じゃ無いと認めないから!!」

「……何でコイツは俺を睨む？」

そいつの見た目は赤髪のアート。長さは大体腰程度で目付きは鋭く、眼の色は赤色だ。

クールビューティーといった感じで、性格はツンデレだろうか。

「威勢が良いな。俺は王偉。字は守義。さて、戦いを始めよう」

「ええ」

そう言って取り出したのは、全長1.5m程の大鎌。

ガンダムデスサイズ的な大鎌だ。詳細を細かく言うなら、柄が約1m。残りは全て刃の大きさとなっている。

刃は大きく反り返っていて、色は赤黒くそれでいて幾人もの血を吸ったかのような禍々しさを放っていた。

・・・・・・よくあんな変な武器使うよな・・・・。

たまに漫画などで見る大鎌だが、実はこの武器とても扱い辛い。

斬るにも刃と持ち手の間のトコに斬る対象を入れて引くか、あるいは刃の先端を当てなくてはならず、防御は柄が金属製じゃなければ止められない。どうやらあの鎌は金属ではあることにはあるが純度が低い。または打撃でも柄で突く事しか出来ない。移動速度と体術に自信があるならば扱えない事も無いが、それでも癖が強過ぎる。

一般的知識、または一般的性格があるのならば大体敬遠されるような武器だ。

利点と言えば・・・・・・見た目の派手さか？

これで大概のヤツは怯むからな。それでバツサリいけなくも無いだろう。

「・・・・来い」

拳を構えて間合いに神経を張り巡らせる。

・・・・・・久しぶりだな、こうやって意識を張り巡らせるのは。

何だろう、久し振りに戦場に立ったような気分だ。

最高にHighと言わざるを得ないな。・・・・・・ヤバイ、この思考は危ないな。

よしよし、冷静に・・・・クールになろうじゃないか。

「ハアアアアアア！」

鎌を下向きにしこちらに突っ込んでくる。その加速力はたいしたモノで、霞には劣るが中々の速度だといえる。

また、瞬発力もただの兵卒とは思えない速度だ。それでも、なんかこの速度最近よく見てるな、主に俺部隊の奴ら。

アイツラ気持ち悪いくらいただの兵卒なのに身体能力高いんだよな。アレか？この時代の奴らはチート性を常備してやがるのか！？

「・・・・フッ！」

取り敢えずストレートをその女に当てる。

「・・・・キャッ！？」

・・・・そんな叫び方されると攻撃し辛いのだが。
・・・・取り敢えずは鎌の刃でガードしたようだ。

「さて、続けるか？」

「当たり前よ！！嘗めんじやないわよッ！！」

次に飛び掛かる攻撃は俺の頸を狙った上段の蹴り。

・・・成る程。体術に自信がある方か。

って、そういえば今のとこ一切足を動かしてないな。

・・・そうだ。今回は左足を基点としてその基点から一歩も足を動かさないよう、円を描くようにしてやるとしようか。

「・・・・・・・・ハアッ・!!」

右から来る上段の蹴りを頭を下げて避けつつ、右足で蹴りを腹に入れる。

「・・・・・・・・あぐっ・・・・・・・・!」

・・・うむ。感触的に危ない感じがするな。

その女は体を折り曲げたまま飛ばされ、地面に体を打ち付けて数十メートル飛ばされて、その後ピクリとも動かなくなった。

・・・気絶だよな? いくらHighになってたからって死んでは無いよな?

一応手加減したんだぞ? 一撃死は無い筈だぞ?

「・・・・・・・・」

やっぱり心配になったので近づく。

「・・・・・・・・えっと・・・・・・・・」

転生前の知識をフル活用する。

・・・・・・・・肋（あばら）は・・折れてない。外的負傷は地面を強打した時の打撲のみ。

・・・・・・・・動脈は正常。心臓は・・・・・・・・動いてるな。
なら、ただの気絶か？原因は心臓に過剰な圧迫が入った為に一時的に心停止に陥ったからだろうか。

「取り敢えずは異常なし。死に至る可能性は無いな」

その事にホッとする。詠に知られたら怒られそうだな。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

どうやら意識が覚醒したようだ。

いや、良かった死なくて。

・・・・・・・・とか、そんな事を思って胸を撫で下ろしているのもつかの間。

どうやら俺はーーーーー

「ああ！ご主人様あつ！」

・・・・・・・・どうやら現実逃避を許してくれないそうだ。

「ワタシゴシユジンサマダレカワカラナイヨ」

片言で返事を返す。

「王偉様に決まってます」

「オウ、ワタシオウイジヤナイネ」

取り敢えず全力で白を切る。

「目の前にいる方です」

「オー、ドコニソンナヒトイルヨ」?

「目の前ですッッ!!」

怒気が発せられる。

・・・・・・・・現実を見るしか無いのか?

「・・・・・・はあ。やれやれ、で？何の用だ？」

「いえ、これからよろしくお願いしますね、ご主人様？」

・・・・・・誰かこの頭痛を止めてくれないだろうか？
頭が痛くてならん。多分ってか絶対原因はこの女だ。

「・・・・・・はあ。部隊長は誰だ？」

そいつになんとかしてもらおう。
俺はもう頭が痛くてならん。

「私ですよ？」

・・・・・・モウヤダヨー！。
つと、アブないアブない。現実逃避を勝手にしてた。

「そうそうっ！私の真名は紅です！」

「・・・・・・あ、ああ。俺は迅だ」

「それでは迅様っ！また明朝に！」

そうして朱燕・・・・紅は去って行った。

「・・・・はあ。運ねえなあ俺・・・・」

そう言いながら、俺は詠のトコに政務をしに向かったのだった。

・・・・その政務の後、久し振りに月とデートらしきモノをしたのだった。

その月の癒し効果で、磨り減った精神が幾らか回復したのは言うまでもないだろう。

恋姫編・第貳拾陸章 新しい部隊長。…………ああ、俺人運ねえな…………。

ジュン「四十話達成!!」

迅「もうそんなにいったんだな……」

ジュン「そうなんだよ!見てくれてる方に感謝感謝です!」

迅「これからもよろしくお願いします」

ジュン「ってそうそう。言いたい事があるんだ」

迅「なんだ?」

ジュン「宿題オワツテナイヨー!。タスケテクリー…………」

迅「無理だな」

ジュン「ひ、ヒドいぞ!!」

迅「やらん貴様が悪い」

ジュン「オ、オワタ・・・orz」

迅「まあ、なんだ。・・・頑張れ」

ジュン「チ、チクショーーーー！！・・・取り敢えず、それで
は次回！」

恋姫編・第貳拾漆章 訓練。そして地震

次の日……。

明朝に起き、すぐに鍛錬場に向かう。

流石に嫌だからなどという腑抜けた理由で鍛錬を放棄するほどクズな考えは所有していないのと、俺の部隊である以上、それなりに強くなければ気が済まないからだ。

せめて、一般的な強さまでは上げておきたい。

これは決定事項であり、必然事項だ。

そうしなければ、月達に迷惑が掛かるからな。それだけはなんとしても避けたい。

「よし……強く……強く心を持って行こうか」

鍛錬中は何にも気にするな。

無心にだ。全て、何もかも気にするな。心を平静に保て。心頭滅却するのだ。

「よし、向かうか……」

第二隊の元に向かい、そして着く。

二隊は俺の部隊と違い、まだ連帯感も足りてなく一体感が無い。

よって……

「ざわついてるな……」

もうそれはザワザワと五月蠅いぐらいだった。

心頭滅却しろよ俺。たかだかざわついてるだけじゃないか。罰として、地獄のような訓練をすれば良いだけじゃないか。

……いや、詠に言われてるからそれは無理か。

……他のやり方分からのだがどうしよう。

手加減すれば大丈夫かな？ うん、大丈夫。大丈夫の筈だ。

「私語を慎め！！」

声を張り上げて黙らせる。

……よし、頃合いか。

「今日の鍛錬を開始する！！ 貴様らア！ 鍛錬が終わってもなお、立っ
ていられると思うなア！！」

あれ？ なんでこんな事を？

まあ、気にしないでおこう。

「初日だと思って手を抜く輩は地獄を見せてやろう！！俺の鍛錬はただ一言！死を覚悟しろ！！」

あ、なんかテンション上がってきた！

マジでやってやるぞ！！地獄を見せてやろう！

「貴様ら武器を取れエエエ！！」

よし、アスクレピオスの杖用意しておこう。

「アデアット。死者をも治す医神の杖（アスクレピオスの杖）常時展開」

死にかけたヤツから自動完治で治るように設定する。

こんな事も影で特訓していたりした。

割と楽だったが。

「血祭り開始だ！！」

そうして特訓に全く見えない特訓を始める。

ちなみに、描写の面はカットさせてもらう。

正直、アレは15禁どころではなく、18禁をも超え、20禁ぐらいいってしまうかもしれない。

何故かといえば、この部隊。部隊の大半が女性なのだ。

俺の部隊は100%男だが、今回は大半が女性。

これだけで、大概の人は理解出来るだろう。

女性を痛めつけるなど良心が痛むが、そこは鍛錬で尚且つ傷が残る心配は無いので遠慮なくやる。

阿鼻叫喚というくらい在地獄で鍛錬を行う二隊は端から見たらどう映るのだろうか？

さぞかし可哀想に見える事であろう。

だがしかし、この鍛錬により着実に死への危機察知能力、生きる為の生存本能、作為的に火事場の馬鹿力を扱えるようになってきている。

訓練は苛烈で過酷だが、成果はキチンとあるのだ。

・・・・・・あれ？もしかしてそのせいで俺の部隊脱・人間してるヤツばかりなのか？

どちらかと言えば、コレは獣に当てはめられる様な部類だしな。

これさえ出来れば大抵脱・人間！達成出来るからか。

「これにて今日の鍛錬は終了とする！！」

誰一人として立ち上がる者はいない。

全員無傷ではあるが、精神的に磨り減った事であろう。

明日までに精神をある程度まで治せた者は確実に上へと上がれるだろう。

「以上、解散！！」

その言葉を聞いても誰も立ち上がらない。
相当疲れたらしい。・・・あ！え、詠に怒られる！どうしよう！？

「き、気付かれないようにしないと・・・」

取り敢えず俺は拭達の鍛錬に向かった。

「鍛錬に励んでるな」

俺の部隊は物凄く必死に鍛錬に励んでいた。
その姿に思わず感動を覚える程だ。

『おはようございます!!』

やはりこの統一感だ。
怖いぐらいにハモる。

「ああ、自主練か。精が出るな」

『迅上官の『部隊』ですの!!』

何故だか部隊という言葉を強調する俺の部隊。

「……二隊の事どう思う？」

ふと聞いてみた。

結果は大体想像がついていたりする。

『もちろん敵です！』

「……はあ。お前ら、もう少し仲良くしろ」

『迅上官の特訓を耐え抜けたら考えておきます!!』

良いか？ 考えておくってのは、ようは仲良くする気サラサラ無いって事だぞ？

「つたく、お前らは……。まあいい。それじゃ自主練頑張れよ」

『はい!!』

そう言って書類消化に向かおうとしたら、急に地震が起きた。

「うおっ!？」

多分体感震度は5強くらいだろう。
それが約二十秒程続いた。

「……なんだ一体？」

地震がやみ、取り敢えず俺はそのまま詠のトコに向かった。
途途中色々なモノが倒れていたりして、それを直したりしていた
為、手間がかかってしまったが、それ程の時間はかからなかった。

そしていつもの執務室につき、ドアを開けると書類の山があった。
書類の山はさっきの地震で崩れ落ちた感が満載で、内心『ベタな崩
れ方だなあ』とか思ってしまった俺は悪く無いだろう。

「よっと……無事か、詠？」

書類の山に手をつき込み、引き上げるとやはり詠がいた。

「……ええ。助かったわ迅」

「お安い御用だ。地震はよく起きるのか？」

「……ボクには初めての体験だったけど？」

「どうやら、地震は珍しかったらしい。」

「そうか。珍しい事もあるもんだ」

「そう言ってバラバラになってしまった書類を片付け始める。」

「……それにしてもすごく量多いな。」

「今日こんなによらせる気だったのか？」

「まあ、頑張れば午前中には終わるだろうけどさ。」

「コレは流石に多すぎるぞ？」

「いつもの二倍くらいあるじゃないか。」

「……他の奴ら大丈夫かな？初めての地震じゃ対処も分からんだろ」

「……月のところ行ってないの？」

「・・・ん？ああ、行っていないな」

「はあー・・・。今すぐ行ってきたさい」

詠にため息をつかれて押される。

「いや、書類の山を片付けないと・・・」

「良いから、行ってきたさいって言ってるでしょ？」

顔は笑顔で、しかし目は全然笑っていない。
そんな笑顔で言われ、引き下がる事にした。

「あ、ああ。それじゃ、行ってくる」

・・・なんで詠怒ってるんだ？

そんな疑問を頭の片隅に置き、俺は他のみんなのトコに向かった。

・・・結果として、霞、華雄、恋、陳宮、斗詩、猪々子、馬超、馬岱、ハムさん、人和、七乃は全く動じておらず、月、天和、地和、美羽は慌てていた。

慌てている姿を可愛いとか思ってしまった俺は末期なのかと悩んだりもしたが、取り敢えず全員（袁紹は管轄外・・・いや、寧ろ現状怖いから見たくない。どうせ拭がなんかしてるし）見終わり、また執務室にもどって行った。

この後は、いつも通りまた書類消化に励むのだった。

恋姫編・第貳拾漆章 訓練。そして地震（後書き）

ジュン「宿題に追われて大変だった・・・」

迅「自業自得じゃないか？」

ジュン「そう言わないでくれ・・・」

迅「まあ別に良いがよ」

ジュン「ああ、ふと思い立ったのだが、自分自身のキャラが立ってるとか、変わってるとか思いますか？」

迅「ちなみにお前は？」

ジュン「微妙。立ってるといえば立ってるかもしれない」

迅「曖昧だな」

ジュン「ああ。ちなみにいうと、俺は左目が髪で隠れていて、地味キャラに見えつつも、話すとそれ程地味キャラというワケでもなく、たまに突拍子も無い事を言い出し、ある種の電波キャラ属性と不思議キャラ属性を持っているのだ!!」

迅「……混ざりすぎてよく分からんな」

ジュン「ちなみに、友達の一人にはエロ仙人的イメージを持たれていたのが発覚して軽く涙目だったりもしたのだ!!」

迅「余計わからねえ……」

ジュン「あははは……。で、キャラが立ってるとか、変わってるとか思う人は感想でも書いてくれるとありがたいです! それでは次回!!」

それから一週間……。

いたって平和な洛陽での生活を実感しつつ、毎日ありえない程の激務をこなす生活を送る俺は、珍しく休みを取る事ができた。

「休みだー!」

しかし、仕事ばかりやっている俺は余暇の取り方が全く分からない。
だから――

「久しぶりに屋台でもやるかな」

――結局マトモな休みをとらない。

例えば、スポーツだとかそういうものを余暇として取るにしても、
この世界にはそんなスポーツはない。

あるとしてもあまり面白そうでないものばかりだ。

「よっと……そうと決まれば仕込みでもするかな」

そう言って立ち上がり、屋台を取りに向かう為に自室から出る。

「・・・なんだ慌ただしい？」

下女・・・いわゆるメイドだが、その人達が慌ただしく走り回っていた。

・・・一体なんなんだ？

「・・・・・・・・む・・・・。分からん」

一人頭を捻って考える。

「迅殿――！！！」

遠くから誰か呼んでいるようだ。

・・・・・・それにしても聞き覚えのある声だな。

ホント、一ヶ月前後まで聞き慣れた言葉のような・・・・。

「迅殿！お久し振りです！！！」

「お久しぶりです王偉さん！」

振り返ると其処には愛紗と劉備がいた。
・・・何故に？

「・・・愛紗、劉備殿。何故ここに？」

「えっと、今日洛陽で会議をするって聞いたから来たんですよ？」

「会議？」

そんなもの聞いた覚えないけど？

「はい。呉と蜀と董卓軍で今後の会議をするらしいですよ？」

「・・・へ？あれ？知らないなあ・・・。月と詠がいつの間にか話進めてたのかな？」

心当たりが無くて頭を捻る。

「うーん・・・。そうなんですかね？」

「・・・まあ、良いか。今日は二人だけで来たのか？」

「いえ、まだいますよ？」

「そうか。まあ、来たからには楽しんでいってくれ。俺も取り敢えずもう少ししたら詠達のところに向かうとするよ」

・・・それにしても、何で連絡無かったんだ？

「あっ！はいっ！それじゃまた！」

「また後でお会いしましょう、迅殿」

そう言って二人は月のところに向かって行った。

「・・・今日は屋台はやめだな」

取り敢えずそのまま一度部屋に戻り、準備を整える。

「こんなものか。なら行こうかね」

準備もそこそこに月達のところに向かい始める。

「……慌ただしくしてたのそれだったのか……」

さっきの疑問に納得しつつ歩いていると、また正面から見知った顔が歩いて来た。

「お久しぶりですな、迅殿」

「星か。星も来ていたのか」

「それは勿論」

「……一体誰が蜀に残ってるんだ？」

「……誰が蜀に残ってるんだ？大体来てるんだろ？」

「残っているのは紫苑……いや、黄忠と嚴顔か。その二人が我らが留守の間、蜀を守っておるのだ」

「そうか。なら大丈夫か」

全員で来てるなら流石に手薄すぎるからな。

「・・・そういえば、あのメンマ、私は帰ってから未だに食してないのです」

「・・・へ？何でだ？」

「いや、何と言えはいいのでしょうか。食べるのがもったいない程に美味しいもので。この気持ち、迅殿ならば分かるのでは無いですか？」

「・・・やべえ、全然わかんねえ。」

「いや、俺が思うに食べ物に愛されて食われて然るべきであると思んだよ。例えどれだけ美味しいとしても食べられない、調理されないなら腐るだけだ。だから、味わって「おいしい」と思ってもらえる事が一番だと思うんだよ」

「・・・ふむ。確かにその通りですな。味わってこそ職人の苦勞が浮かばれるというものですか。これは成る程。職人の側から良い意見をいただきましたな」

「いや、そんなものじゃないから」

一般論じゃないのか？

「取り敢えず、私は愛紗達の所に戻りますゆえ、また後でお会いしましょう」

そう言って星と別れる。

「……そういえば、まだ呉の面々を見てないな？」

ふとそう思う。

さっきから出くわしているのは蜀の面々のみだ。

「……まあ、月達んところ行ったら分かるか」

そう言って取り敢えずまた向かい始める。

「じゅんっ！」

「ぬわっ!？」

即座に後ろに振り返る。

「・・・なんだ、雪蓮か」

「なんだってなによ〜!!」

其処には雪蓮がいた。

気分を損ねたのか何だか多少不機嫌気味だ。

「まあ良いわ。久しぶりね迅〜!」

「ああ、久し振り雪蓮」

・・・やっぱ会議あったのか。

あれ〜?なんで俺知らなかったんだろ?

「他の奴らはどうしたんだ?」

「さあ？今は自由行動だから分からないわね」

そう言って雪蓮が笑っていると・・・

「はぁ・・・。雪蓮が歩き回っているだけでしょ。会議なのだから逃げ出さないでもらいたいわね」

・・・冥淋が来た。

・・・やっぱ逃げて来たのか。

「いや、だって冥淋？迅に会いに行くのくらい別に良いじゃない？」

「もう少し待てば会えるでしょ？それくらい待てないの？」

「待てない」

「・・・はぁ・・・。雪蓮はそうだったわね」

その理屈おかしくないか？

「・・・久しぶりね、迅」

「ああ、久しぶり冥淋。具合はどうだ？」

「いたって健康よ。本当に貴方には感謝しているわ」

うんうん、健康で何よりだ。

「取り敢えず、今から会議に戻るのだけど、迅はどうするんだ？」

「ああ、俺も行くよ」

「なら、一緒に行きましょう？」

雪蓮に誘われる。

「ああ、良いのか？」

「良いわよ」

「良いか冥淋？」

「ええ」

冥淋からも了承を得て、俺たちは会議の場所へと向かって行った。

ジュン「ヤバイ……。早く恋姫編終わらせないとネタが詰まる・・
・」

迅「ネタが詰まるとヒドい事になるな」

ジュン「ああ、更新が……。あと三四話程度で大体終わらせて見
せる!!!」

迅「端折るのか？」

ジュン「いや、もうだいたい終わりに近かったぞ？」

迅「ならあんま変わらないな」

ジュン「まあそうだな」

迅「なら別に宣言しなくても良いんじゃないか？」

ジュン「まあ、そりゃそうだが……。ちなみに、拭には活躍してもらおう予定だ」

拭「出番か!!」

迅「何処から現れたんだ!？」

拭・ジュン「いや、作者権限で出て来たんだが？」

迅「わけわかんねー!」

ジュン「ちなみに、拭についての質問が一回来たんだ」

拭「オレの？」

ジュン「ああ、お前何者かってさ？」

拭「フツ……。人間には不思議が幾つかあった方が良いんだ。だから、オレが何者かは個人で考えてもらおうでしょう」

迅「ワケ分からん!!」

ジュン「まあ気にすんな。・・・それでは!!」

それからおよそ数分程で、会議の場に到着した。

「よし、入るとしますかね」

会議の部屋の扉を開け、中にはいる。

会議室には、蜀軍、呉軍、董卓軍の有名な面々に、更に何故だか拭と紅がいた。

相変わらず、二人・・・いや、部隊関係が悪いようで、拭は紅をうざったく思っているようだった。

そうして一通り出席者を見回すと、詠がこちらを向いた。

ちようど良いか。会議について聞いておこう。

「ちょっと迅！！今まで何処行ってたのよ！」

・・・は？

「いや、待て詠。俺はなにも聞いていないぞ？」

「そんなワケないでしょ！華雄に言うておくように頼んでおいたの

よ？」

「……あ」

華雄が『今思い出した』みたいな顔をする。

「ちよい待て華雄。……忘れていたのか？」

「……すまない迅。鍛錬の没頭して忘れていた」

「……謝られたら怒れないんだが。
まあ、怒る気は無かったんだが。」

「そうか。どうだ？成果の方は？」

「いや、よく分からないな。久しぶりに仕合を願えないか？」

「おう。分かった。取り敢えず会議を始めようか」

いや、終わってるんならそれで良いけどさ。

「ええ、そうね」

終わってなかったのか。

「どの位進んでたんだけ？」

「まだ始めていないわよ？」

マジか？

「何故？」

「ボク達の中で現状が一番把握出来ているアンタじゃない。アンタが説明しないでどうなるのよ」

・・・そういう事ですか。

「・・・まあそうだな。仕方ない。今後の説明をさせてもらおうとするよ」

「・・・一体なんの話なんだ？」

冥淋が聞いてくる。

まあ当たり前前の疑問だよな。

「来（きた）るべき戦に備える為の会議だ」

「はわわ・・・敵は魏ですか？」

諸葛亮に限らず、大多数の人間が敵は魏だと思っているようだ。

「いや、敵は魏では無い。それを操る黒幕だ」

「それは魏の霸王、曹操ではないのか？」

「いや、今曹操は捕らえられている」

「なんだと？バカなっ！一体いつから！？」

他の軍師達も驚愕しているようだ。

「恐らくは、呉軍と戦ったよりも前からだ」

「あわわ……。い、一体どうやってそんな事をしたんですか？」

「方法については把握出来ていない」

理由は……。まあ言わないで良いか。

「兵力も不明だが、恐らくは蜀軍、呉軍、董卓軍の全軍と同等か、それ以上である可能性が高い」

まあその気になればそのくらいは引っ張り出せるだろ。

「ちなみに、兵の出どころも不明だ。予想数で言ってるからな」

「中に魏軍の将が入ってくる可能性もあるのではないか？」

「ああ、恐らく出てくるだろう。そいつらと戦う時は、必ず殺すな」

「何故だ？」

「不本意な死に方では嫌だろう？仕えている主を捕らえられ、それを盾に脅迫され、不本意な戦いに望むのだからな」

ほんと気の毒としか言えない状況だよな。

「・・・分かった。雪蓮達にも伝えておこう」

「私達も愛紗さんたちに伝えてきます！」

・・・取り敢えずコレで会議終了か？
端折ったせいか、すぐ終わったな。

そうしていると、向こうから霞と雪蓮が来た。
変わった組み合わせだな。

「おっ、終わったんか？」

「霞か。ああ、終わったぞ」

「へえ。なら、何かしない？」

雪蓮がそう提案してくる。

面白そうな提案だな。

「良いな！俺が出来る事ならなんでもするぞ！」

そう言った瞬間、何故だか背筋に凄い寒気が走った。

「・・・言伝もらったわよう！」

え？え？

どうゆう事だ？

・・・そんな感じにおたおたしている間に話はどんどん進み・・・

「よし！今から始めるわよ！」

「・・・何故こうなった。」

今から始まるのは、鬼ごっこみたいなモノだ。

ただし、俺以外が全員鬼で、尚且つ捕まったら罰ゲームがあるという鬼ごっこだ。

その罰ゲームは『俺が俺を捕まえたヤツの言う事を何でも一つ聞く事』らしい。

その為、下手したら他の軍に引き抜かれる可能性もある。

だから詠は反論していたが、俺の言伝って事で却下されていた。

そのせいか、詠の機嫌が悪い。ものすごく悪い。

「じゃあ、始めるわよ」

「はぁ・・・。逃げ切らないとな」

期限は日没までだ。

完全に気配を消せば出来なくもないだろう。
ようは、誰にも触れなければ良いのだから。

「それじゃ・・・開始！」

開始を告げる合図。

それと同時に俺は地面を強く蹴り、即座に窓から外へと離脱する。

「そう簡単に捕まらんよ」

先程までいた部屋に振り返りながら言うと、何かが飛んでくるのが見えた。

「矢か！」

そのまま反転し、下に踏み込み離脱。

「チッ！」

地面には蜀軍の面々がいた。

そのため、俺は即座に軸足を回転させ、気の壁を蹴って側面に衝撃の余波を使い飛ぶ。

（アイツラ早くね？）

そんな事を思いながらも、更に移動速度を早めて行く。

それでも何故か俺はあいつらを振り切れず、俺は取り敢えず牽制に出る事にした。

(なら・・・行くぞ！)

空気中に気の壁を作り、それに足を付けて限界まで力を溜める。
目標地はあいつらが集まっている俺の下場所だ。

「らあああああああつ！！」

声と共に今まで溜めていた足の力を解放する。
そして、それと同時に多大な空気抵抗が俺を襲う。
更にその空気抵抗は俺の周りに暴風を生み出し、俺の周りは簡易的な台風になっていた。

「退けエエエエツツ！！」

そして俺は誰もいないところに着弾した。
その衝撃で、半径50m弱の巨大な穴が開き、更にその風は周りの木々を押し倒した。

(・・・やべっ！)

即座にまた俺は現場から離れた。
今度は詠に怒られると思ったからだ。

・・・そうして、その後もおよそ三時間程逃げ、残り時間もあと一時間弱となった時、それは起きた。

「っおッッ!？」

全速力で角を曲がった瞬間、月にぶつかった。
思わず俺は月が倒れないように抱きとめてしまった。
その時の俺は、残念なことに忘れてしまっていたのだ。

「大丈夫か、月？」

「はい、大丈夫です」

「そうか。それじゃっ!」

そう言ってまた走ろうとするが、月に服の裾を掴まれた。

「あ、あの・・・捕まえました」

「・・・しくったッ!!」

こうして俺は無念にも月に捕まってしまった。

・・・けど、呉軍、蜀軍に捕まらなかっただけマシなのかなあ・・・。

ジュン「お久しぶりです。検定終わったので投稿しました。そして、検定オワタ＼(＾o＾)／」

迅「顔文字まで使ってたは・・・相当だな」

ジュン「うん、頑張ったけど色々無理」

迅「そうだったのか。まあそこは諦めておくが吉だろ」

ジュン「そうだな。・・・で、質問です！
まず一つ目は、最終決戦の展開は早期決戦か二話またぎぐらいにするべきか。

二つ目は、次の世界は何処が良いかの二つです！」

迅「毎度毎度質問で決めるんだな」

ジュン「それが俺だからな」

迅「まあ良いがよ」

ジュン「おう！それでは次回！！」

恋姫編・第参拾章 戦闘

次の日・・・。

俺は目を覚ますとすぐに着替えて鍛錬場に向かう。

「それにしても昨日は・・・」

昨日の出来事を振り返る。

・・・月は一体何を命令するのか・・・。

まあ、月だから安心できるな。これで雪蓮とか霞とか星とか悪ノリする奴らだと怖くてならん。

「・・・まあいい。いずれか分かるのだからな。出来る限り聞き受けるか」

戦の前の最後の道楽だからな。

「・・・ん？」

朝早くの鍛錬場。普段は誰もいないはずのそこには、今日は先に先客がいたようだ。

ちなみに、昨日の被害の中心地は鍛錬場だったので、治す羽目になったので、余計疲れたりもした。

「あれは……」

「――甘寧か。」

そう言葉をつぐもうとする前に、鍛錬中だった甘寧がこちらに気付いたようだ。

「貴様は……王偉か」

「ああ甘寧。始めまして」

「……ああ。使わせてもらっている」

「ご自由にどうぞ」

そう言ったら、甘寧はまた鍛錬に戻っていった。

（隠密……ね。ようは所謂圏境と同じ境地なのだろう？己を自然と同一とする。中々に興味深いな。いずれ一戦交えたいものだ。甘寧程の人物ならば、俺に気配を感知される程、やわな鍛えはして

はいないだろうしな)

「……よし、俺も鍛錬するか」

俺の部隊曰く『地獄の鍛錬』を開始する。

内容としては、簡単にいえば気の容量を酷使し、更に肉体も酷使する。

そして、一時の休憩を加え、回復したらまたそれを繰り返す。

これによって、気の容量の上昇と、超回復による筋の密度の更なる上昇が見込める。

しかし、この訓練は毎日やるとなると逆効果となるので、この訓練は何日かに一回として、他は通常の訓練をしている。

「……まあ、このくらいか」

訓練も終了を告げ、気持ちの良い汗をかきつつ、タオルでそれを拭(ぬぐ)っていく。

タオルと言ってもほぼただの布だが、俺がタオルだと思えばそれはタオルなのだ。手拭いと言っても良いのだが。

「・・・ふう。疲れも癒てきたか」

相変わらずの自らの回復速度に感心しつつ、未だ鍛錬に没頭している甘寧を見る。

「やはり中々の立ち振る舞いだ。いずれか、是非とも戦いたいものだ」

「・・・ならば手合わせ願おうか」

うおっ！？ 一体何時の間に俺の前に！？

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

中々に血が滾（たぎ）りそうだ。

現に、今現在血がざわめいて心地よい感じになっている。久しぶりに気を使わないでやれそうだ。

「準備は良いようだな」

既に臨戦態勢をとっている甘寧を見ながら言う。

「・・・・・・・・ああ」

俺も全神経を張り巡らせ、来る攻撃を待ち構える。

「・・・・・・・・ふう・・・・・・・・」

ああ、久しぶりの静けさだ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

しばしの硬直。

そして、その数秒後・・・・・・・・

「・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・」

甘寧からの鋭い一閃。

・・・・やはり早いな。

「・・・はあっ！」

それを態勢を低くして避けつつ、甘寧の頸に向かって蹴りを放つ。

「・・・」

が、それは甘寧が後退した事によって避けられた。

「・・・」

またしばしの沈黙。

「・・・はあっ！」

今度は俺から仕掛ける。

まずは近付いての右ストレート。そこから更に回し蹴りを放つ。

「・・・っ・・・」

それでもやはり甘寧は避けた。

やはり速いな。霞も速いが、初動に無駄が無い分、甘寧の方が速いように感じられる。

「うおおおおっ!!」

脚技を主体に連撃を放っていく。

・・・なんだか少しずつハイになってきた。

「まだまだまだあっ!!」

更に先程のスピードの1.5倍程の速さで蹴りを放っていく。

「・・・っ!!」

少しずつ甘寧が防戦一方となっていく。

「・・・はあっ!!」

力を全力で込めた右ストレートを蹴りの間に挟む。

「…………っ！噂は伊達では無いな」

右ストレートの周りを渦巻く風圧のせい、甘寧は間一髪避けられたようだった。

「甘寧こそ。心踊るぞ」

「…………ふっ。そうか」

甘寧は未だ冷静を保ち、何処かしら余裕そうに見えた。

「手数で押し切らせてもらうぞ！！」

「…………そうはせん」

甘寧の剣と、俺の拳がぶつかり合う。

それでも俺の拳が切れないのは、単（ひとえ）に普段の鍛錬の成果だろう。

「行くぞっ！全力全開だ！」

両腕が大きく膨れ上がる。

「らあああああ!!」

先程の右ストレートよりも更に速い速度でその一撃が放たれ、それを避けられないと判断したのか剣で防御する。

「・・・っ!？」

「はああああっ!!」

その剣ごと甘寧を殴り飛ばす。

・・・そういえば、最近対女性が発生してないな。
戦闘においては慣れてきたという事か？

「・・・ぐあっ!？」

甘寧をガードごと殴り飛ばし、甘寧は未だ態勢が治せないまま地面にぶつかった。

やった俺が言うのもなんだが、すごく痛そうで、心が痛い。
やっぱり思い切り殴らなければ・・・いや、手加減されるのは腹が立つだろうから駄目だな。

「甘寧。手合わせありがとう」

甘寧に手を差し出しながら言う。

「・・・ああ。こちらこそ感謝する。王偉」

立ち上がった甘寧と握手をする。

「・・・また、もし機会があったのならまた手合わせ願えないか？」

「・・・ふっ。分かった。次は、私が勝つぞ、王偉」

「おう、楽しみにしているよ。・・・けど、そう簡単にはやられないぞ」

「簡単に勝てる相手などでは無いだろう、貴様は」

「違う！ 気に入った！ 俺の事は迅と呼んでくれ」

拳を交えて、真名を教える。

なんか熱い展開な感じがするな。

熱血漫画とかにありえそうなシチュだよ全く。

「・・・ああ、分かったぞ迅」

「よしっ！それじゃまたな甘寧！」

手で会釈をとって走っていく。

いくらみんながいるからといっても、俺の仕事は減りはしないからな。

そうして、今日もまた俺は書類消化に励むのだった。

・・・書類消化の途中、また地震が起きたが、一体なんなんだ？
最近地震が起きやすいのか？

恋姫編・第参拾章 戦闘（後書き）

ジュン「今日は休みだったので、無事投稿できました！」

迅「珍しいな」

ジュン「そう言わないでくれ……。今日休みだったんで、友達
んトコ遊びに行ったら、なんか『さよならを教えて』だっけ？かを
借りてきました」

迅「なんだそれ？」

ジュン「さあ？因みに、その時の回想を少しだけ……」

――――

友人A「久しぶりだな、お前が来るの」

ジュン「ま、バイトとかで忙しいしな。そっちもフリーター大変だろ」

友人A「ま、それなりにな。慣れてきたし、バイト先には美人いるから苦にはならんさ」

ジュン「・・・相変わらずだな」

友人A「それが俺だってな？で？お前に色恋沙汰はねえのか？良い加減何か無いと本気でホモだと思われるぞ？」

ジュン「うっせ。ホモなわけねーって。非モテ人なの、俺はよ」

友人A「そうかそうか。どうだ？俺の妹嫁にもらうか？」

ジュン「からかうなっの・・・」

友人A「ははは。バレたか。でもま？お前なら妹預けても良いと思うぜ？見知らぬ男よりは断然な」

ジュン「本人の意思尊重しろ・・・」

友人A「ま、そうだな」

ジュン「・・・そだ。ちとゲーム貸してくれ」（話逸らさないと嫌な感じしかない・・・）

友人A「ああ、良いぞ？そのラックに並んでるからよ。適当に借りれば良いぜ？どうだ？ギャルゲーもあるけど？」

ジュン「・・・興味はあるから借りておくとするよ。・・・じゃあこれでも？」

そう言って取ったのは『さよならを教えて』というタイトルのゲーム。

理由は何となく気になったからだ。

友人A「・・・ちょ、おま・・・！？そ、それはおすすめ出来んぞ？」

ジュン「へ？何でだ？」

友人A「パッケージ見ろパッケージを」

そう言ってパッケージを見る。

- 現実と虚構の区別がつかない方
- 生きているのが辛い方
- 犯罪行為をする予定のある方
- 何かにすがりたい方
- 殺人癖のある方

※このソフトには精神的嫌悪感を与える内容が含まれています。
上記に該当する方はご遠慮くださるよう、あらかじめお願い申し上げます。

・・・

ジュン「・・・なんだこりゃ」

友人A「それは・・・何っーか・・・マジでやめとけ。軽い気持ちでやるとマジでキツイから」

ジュン「・・・鬱ゲーって事か？」

友人A「・・・そのジャンルで良いのか分からん。キチゲーかね？」

ジュン「キチゲー？・・・まあ心構えだけ取っとけば大丈夫だろう。だいじょぶだいじょぶ。こう見えてもメンタルは強い方だし」

友人A「そうか？なら良いが・・・気いはれよ？」

ジュン「大袈裟だなA（便宜上）は」

—————

ジュン「そんな事があったわけですよ。基本アイツは口軽い方だから大丈夫だとは思うけど・・・」

迅「ま、警戒して然るべしだろうな」

ジュン「そうか。・・・この『さよならを教える』ってゲームやった事ある人はどんなのか教えてもらえるとありがたいです。自分でも少しネットかで調べてみますし・・・。今回はこれにて！それでは次回！」

恋姫編・第参拾壹章 話し合いと戦いの鐘

・・・そしてその日の夕方。

俺は珍しくも城壁付近に来ていた。

理由は言わずもがな『城壁からの景色を見る』事である。

「・・・何でこんなトコに来たのやら・・・」

城壁から外を見ながら言う。

それにしても、綺麗な夕焼けだな。やはり、空気が綺麗だからか？

「・・・はあ・・・」

どうやら俺は少し感傷的になっているようだ。

・・・あと少しで別れなくてはならないのが、悲しいのか。

コレを永遠に繰り返すのは流石にキツイところだ。

今回の事が終わり次第、俺を吸血鬼の真祖からただの不老に変更してもらうか。

「どうしたのよ、辛気臭いわね」

「ん？・・・月、詠」

振り向いた其処には月と詠の二人がいた。
月はなんかスゴく心配そうだ。

「・・・あの、どうしたんですか？」

「・・・ん、まあちよつとね」

「・・・私や詠ちゃんには言えないんですか？」

「・・・へ？いや・・・」

なんだ一体？

「・・・迅さんはいつも一人で悩み事を抱え込んでるような気がします」

・・・まあ、そりゃこの先の展開なんてここの皆には説明出来ないからな。

「・・・いや、そんな事ないよ」

笑みを作ってその返事を返す。

「・・・そう・・・ですか」

・・・なんでそんなに悲しそうな顔をするんだ・・・。

「・・・迅。なに月を悲しませてんのよ！」

そう言っつて詠が蹴って来る。

なんだ？

なんで俺こんな悪者みたいな目で見られなきゃいけないんだ？

「お、おい。詠、やめろって・・・」

「え、詠ちゃん・・・。ダメだよ・・・」

「隠し事なんてガラじゃ無い事してんじゃないわよ！」

・・・言っつてどうこう変わる問題じゃ無いんだよ、これは。

「いや、だから・・・」

「そんなにボク達が頼りなく見える!？」

「それは違う!頼りなく何か無い!」

「アンタがしてる行動はそう言ってるようなモノよ!!」

・・・確かにそうかもしれない。

けどこれはもう決まっている事だから、変わる事は無いんだ。

けど、それでも話す事で少しは気分が和らぐかもしれない。

でも、今こんな事を言ってしまうんだ。

『俺はもうすぐ消えるんだ』なんて言ってどうなる。

別れを先に告げたら、今と言う時間が楽しめなくなるかもしれない。

それが俺には一番嫌だ。

「・・・でも、だからと言ってこんな事教えてなんになる!」

「アンタが一人で悩んでるより、ボク達三人で考えれば何か出来るかもしれないでしょ!」

「もう手遅れなんだ。もう・・・既に先は決まってしまったんだ。だから、結果は覆らない」

・・・俺はこの世界から離れるしか無いんだからな。

「えっ!？」

「なによそれ!？」

・・・ん？

なんかすごい勘違いをしているような・・・。

「手遅れって・・・。どう言う事なんですか迅さん!？」

「なんでもっと先に言わなかったのよ!？」

・・・もしかして・・・病気と勘違いしてます？

「いや、待て二人とも。重大な勘違いをしているぞ」

・・・ややこしくなっちゃったし、仕方が無い。

話すしか無いんだろうな。

ああ、嫌な事になってしまった。

「なにをですか（よ）？」

「俺は病気には掛かっていない」

そう言うと、二人はホッと息を洩らしていた。

「……なら、なにがよ」

「……はあ。仕方がない、話すよ」

一つ二つ深呼吸をする。

「……俺がこの世界に留まれる期限があと少しなんだ」

「……え？」

「……は？」

二人ともよく分からないみたいな顔をする。

「俺は世界を廻る運命にあってな。この世界の期限は恐らくあと少しなんだ」

そう告げる。

二人は悲しそうな顔をして、こちらを見てきた。

・・・やっぱり言わなきゃ良かった。

「それは決定事項だから、もうどうにも出来ない。・・・まあ、あと少しかもしれないけど、最後までよろしくな？月、詠」

そう言って二人を見る。

そうしていると、向こうから声が聞こえて来た。

「た、大変です！！五胡が！五胡が侵攻してきました！！兵数は不明ですが、かなりの兵がいる模様！！呉、蜀の両軍にも通達しております！！」

「なっ！？」

「来たか・・・。分かった！我々も直ちに隊を整え、対抗する！！」

・ ・ ・ そうして、確かに、そして足早にこの世界に留まれる期限が近づいていた。

ジュン「……今日の投稿ができました」

迅「なんだ？テンション低いな」

ジュン「……いや、ちょっとね。やられたよ……」

迅「なにがだ？」

ジュン「……いや……予想以上にキチゲーでね……やってる最中だけど、色々鬱になりそうだ」

迅「そうなのか？」

ジュン「メンタルに自信はあったんだがなあ……」

迅「なんだ？まあ、頑張れ」

ジュン「ああ、頑張るよ。頑張ってクリアするよ。そして、尚且つ此方も戦闘編に入ったし、二日に一回くらいのペースで投稿させてもらうよ」

迅「そうか」

ジュン「それでは!!」

恋姫編・第参拾式章 決戦直前

その後、直ぐに準備を整え目的地に向かった。

劉備達蜀軍、雪蓮達呉軍は両軍とも一旦兵数の確保に戻り、話を受けてから二日……つまりは今日、敵が通過するであろう此処・并州の太原に集合となっている。

皆、各々今出せる全兵力をこの戦いに注ぐのだ。

「……おいおい……これは……」

俺は今迫り来る敵の軍勢を見てそう洩らした。

「なんや……あれ……」

皆、それぞれ反応は違うが、全員驚いている。

それも当たり前だろう。何故ならそれは――――

「城が……城が動いている……だと？」

―――そう、動きながら此方に進行する城があったからだ。

「嘘でしょ・・・！？あんなのデタラメ過ぎるわよ！！」

この時代の対城兵器は極めて脆弱なものだ。

それに、そもそも移動する城を破壊するなど念頭に置かれていない。この時代にそんなものは技術的に不可能だし、それ以前にそんな発想すら普通ならば思いつかない。

移動要塞など、常人では作ろうとすら考えないものなのだ。

しかし、それが俺の目の前に存在している。

・・・あまりにも非常識過ぎる。

「・・・それより、厄介だな・・・」

皆、異常事態に驚いて気付いていないのだが、あの敵兵の量。

それに、中にいる兵は異常だ。

兵数は見積もって約十万。

その中には、人じゃない・・・土塊の人間がたくさんいた。

呪術かなにかで兵の増強を行ったのだろうか？

「・・・来たか」

向こうから俺達の方面に向かって来る軍勢が二つ。

牙門旗から見ると、呉軍と蜀軍であると分かった。

「……まあなにせよ奴らは愚策を選んだな」

俺としての目的は、まず一つに『曹操達も無事に助ける事』
二つ目に『奴らを斃（たお）す事』だからだ。

「……見るに魏軍の将はいないな」

恐らくあの城の中に魏軍の面々は囚われているのだろう。

どうやら奴ら……いや、あの軍の頭は有能な……且つ、不安
定要素が一部でもある者は信用しない質らしい。

不確定要素を戦線に出さないのは、上等だが愚策とも言える。

曹操ほどの人間を人質にすれば、将達は従わざるをえないだろう。
それが、もし将が裏切ると言う結果になったとしても、王が人質に
なっている以上手出しはあまり出来なくなる。

そういうように通常は活用するものなのだ。

「なんだあれは!？」

「あれは一体なんですか!？」

諸葛亮と冥淋の二人が来る。

「……見てのとおり、城だよ。移動する……な」

「…………頭痛くなりそうだ…………」

そう言って頭を抑える冥淋。

諸葛亮は『はわわ』とか言って慌てていた。

「落ち着け。あれの事は考えるな」

「…………何故だ？」

「アレの陥落は俺がやる。曹操達を助けて…………な」

「は、はわわ。そんな事できるんですか？」

「ああ、出来る…………いや、する」

本気で押し切れれば壊せるだろう。

「…………分かった。なら、迅が彼処に辿り着けるよう、私達は援護しないといけないわね」

「ああ、頼む。兵力はどのくらいだ？」

「私達は二万程だ」

「はわわ……。私達も同じです」

「そうか。俺たちは三万だから、合わせて七万……。敵は大体十万だから、三万程の兵力差があるのか……」

中々に厳しいな。

「出来そうか？」

「……。少し厳しいかもしれんが、なんとかしよう」

うん、そう言ってくれと頼もしい。

――――

そうして話し合いも終え、俺は俺の部隊のところに來ていた。
この世界、最後の戦いになるだろうと考えているからだ。
それは、群雄割拠の時代が終わるという事だ。

『迅隊長!!』

「ああ、おはよう。心の準備は出来たか？」

『はい! 万全の状況です!』

「そうか。よく聞け。この戦、必ず勝たなくてはならない。しかし、
命だけは粗末にするな。死ぬ気で・・・とか、バカな事は言うな。
必ず生きて、帰ってこい。生きる為にお前らは戦うのだ。死ぬ為で
は無い。それをしっかりと理解しろ」

部隊二隊にそう告げる。

『分かりました! 迅隊長!!』

・・・よし、良い返事だ。
さて、俺も気合いれますか。

「よし、やるか!」

そう言っていると、ずいぶん久しぶりに神からの念話が入った。

『久しぶりだな。神影迅……いや、今は王偉か?』

(どちらでも良いさ)

『そうか。分かっているとは思うが、この戦が終わる次第、貴様はこの世界から去らねばならない』

(やはりか……)

『ああ。それと、この間貴様が願っていた事は叶えよう。元より造作も無い事だ。不老にする事などはな』

(……ああ、ありがとう)

そう言うと共に、確かな感覚として吸血鬼でなくなったのが分かった。

これで、人に戻ったも同然だ。

「それじゃ、行きますかね」

俺は戦を始めるために、自分が配置された持ち場に向かって行った。

ジュン「こんにちは。『さよならを教えて』がやってて参ってきたので、軽く現実逃避に走ったジュンです」

迅「・・・ヘタレだな」

ジュン「ヘタレ言うな！！選択肢の場面で色々やられたんだよ！！なんだあれ！？どの選択肢選んでも『そうです。あのコが僕の畏敬する天使様なのです』とか、うわああああああ・・・」

迅「あ、なんかやられた・・・」

ジュン「他にも選択肢で心が折れかけたよ・・・。てか、目を疑った。そして、尚且つ鳥肌モノだった」

迅「内容は知らんが・・・まあ、ドンマイ」

ジュン「ああ、有難う。Aの妹と遊びに行っただけど・・・フラグって中々立たないよね・・・」

迅「なんだそんなしんみりと・・・」

ジュン「ゲームでいうと、イベントばっかあるんだけど、フラグが立たないという涙目な状況なんですよ」

迅「・・・わかる奴にしか分かんような・・・」

ジュン「なんか男として見られてない気がするんだよね・・・。
ああ、マジ鬱」

迅「ドンマイ」

ジュン「取り敢えず次回もよろしくです！」

恋姫編・第参拾参章 戦いその壱

そして、持ち場に着くと向こうから月がやって来た。

「月……」

「迅さん……。絶対、生きて帰って来てくださいね」

「ああ、絶対に死なない。約束する。だから、月は安心して俺達が帰って来るのを待っていてくれないか？」

「……はい、分かりました」

そう言って月は帰っていった。

……あれ？なんか死亡フラグ？

いや、気にするな俺。

そうこうしていたら、戦いの銅鑼が鳴った。

「行くぞ！！お前らの力を奴らに味合わせてやれ！」

『了解です迅隊長!!』

俺達の隊・・・一隊と二隊の両隊が俺に続き戦場に踏み込む。

「おおおおおおお!!!!」

邪魔な土塊（つちくれ）の人形共を拳で破壊し、更に一般兵は気絶するようにしながら先に進む。

「コレなら早めに・・・チッ!？」

破壊したはずの土塊が、バラバラになった破片を吸収し、またその肉体を形作り、俺の腕を抑える。

「しゃらくさいんだよッッ!!この土塊風情がアアア!!」

その土塊を今度は気を纏わせた拳を当てて弾き飛ばす。

「・・・くそったれ!!しつけえ!」

弾き飛ばしたと思っていたのだが、またその土塊はもとどおりに戻り、また俺の前に立ちはだかった。

「拉致があかないぞ、これは！」

何か方法は………そうか。

土塊も残さずに消しされれば良いのか。

「消し飛べっ！」

まず最初に気を纏って土塊を吹き飛ばす。

次に、そのまま気を放出してその土塊の破片も残さず消し去る。

「……よし！ひとまず一体！」

……それにしても、これが何体もいるとなると厳し過ぎる。
これを操っている奴を倒さなくては……。

「……くっ！またかつ！？」

今度は三体、同時に襲いかかってきた。

・・・くそっ！こいつらに足止めされていては、皆が・・・。

そう思い、苛立ちに焦り、焦燥感に憤りを感じていると・・・

『隊長！此処は我等にお任せを！！』

・・・一隊のうちの二人が助けに入った。

「・・・助かる！・・・必ず死ぬなよ！！」

『隊長の望むままに！！我等は必ず死にません！』

その声を張り上げながらも、二人は土塊の腕を破壊し、更に追い討ちを放つ。

『隊長は先に進んで下さい！！此処は我等にお任せを！！』

土塊が再生しようとするのを、更に壊しながらそういう。

「・・・できる限り早めに終わらせるから必ず死ぬな！」

・・・・・・責任重大だな、俺の役目は。

俺は二人を犠牲にしないためにも、先ほどよりも更にスピードを上げて先に進む。

しかし、それをまた土塊が阻む。

「邪魔だ!!」

再生する前に先に進む。

それを土塊共は黙って見ているだけだった。

そして、その作業を繰り返していると、ようやく丁度中腹の位置まで辿り着いた。

「後半分! くそっ! 群がってるせいで進める量が・・・」

そうばやいている俺の頭の中は急がなければ間に合わないかもしれないという焦りだけだった。

その焦りが、俺の判断を著しく低下させているのだ。

「いや、このままだったら・・・行けるか？」

少し冷静になろうと心がける。

このまま行ければ大丈夫なはずだ。

しかし、敵さんはーーーーー

「フム、主が我等の敵か。取るに足らんな」

「私達を倒せるかな、イレギュラー君？」

ーーーーどうやらそう簡単には行かせてくれないようだ。

この男達は、雰囲気、立ち振る舞いからして、かなりのものであると一目で把握できた。

「私から名乗るとしよう。私は？政（えいせい）。いや、秦の始皇帝と言った方が君にとっては分かりやすいかな？そして、同時にこの君が土塊と呼んでいた『兵馬俑』の主でもある。君には此処で退場してもらうよ」

「フム……。有象無象に名乗るのは我としては避けたいところであるが、名乗ってやろう。光栄に思えよ。我は煬帝（ようだい）である」

この二人を速攻で倒さなくてはならないようだ。

「いやいや、隊長は先に行ってくれ」

その声が聞こえてくる方向を見ると其処には拭がいた。

「……。分かったが……。死ぬなよ」

「はははっ。誰に言ってるんですか。オレは死にませんよ、絶対に」

「……。感謝する」

俺はまた走り始める。

「この我が逃がすと思っておるのか愚者が！」

「おい、テメーの相手はこのオレだぜ？」

煬帝が攻撃してこようとするのを、拭は押さえる。

「早く行ってくれ！隊長！」

「分かった！！」

俺は拭に二人を任せて城に向かって行った。

恋姫編・第参拾参章 戦いその壱（後書き）

ジュン「投稿できた！後何話かね・・・」

迅「さあ？後少しじゃないか？」

ジュン「多分ね。・・・ヤバい。死亡のバッドエンドしか思い付かない・・・」

迅「おいおい、バッドエンドは・・・」

ジュン「・・・だよねえ。・・・そうだ。この後の展開、死亡のバッドエンドか、生存のハッピー？エンドかどちらが良いですか？」

迅「何ではてななんだよ！？」

ジュン「気にしたら負けだぞ。・・・感想待ってます！それでは！！」

恋姫編・第参拾肆話 戦闘！Ver拭side（前書き）

今回は拭の戦闘で一話使います。

――拭side――

「こ、この劣等風情がああ・・・」

隊長を先に送り出したのは良いが、どうやら敵はご立腹らしい。

「劣等？ テメーの事だろ？」

それにしても、なかなか厳しいかもしれない。

二人とも中々に強そうな気配をしている。

・・・此処は最初から本気で行くべきか？

「ぬうううう・・・！調子に乗るなよ劣等オオ！！」

「煬帝。落ち着いてください。激昂などしては王としての面子に関わるのでしょうか？」

「・・・ああ、？政よ。そうであつたな。・・・正常

な判断を損ねるところであつた。喜べ劣等、貴様はこの我とここにおる？政の手によって殺してやろう。我に殺される事を光栄に思えよ」

「……なんだこの傲慢男。
スゴクウザい。」

「断らせてもらう。テメーに殺されるなんて真っ平ゴメンだ、この傲慢男が」

「やれやれ、煬帝。貴方の力をこの男に見せつけたほうが良いのではないですか？口論では決着は付きませんよ？」

「そんな事は分かっておる。やれやれ、殺す奴との最後の会話くらい多少楽しませろ。しかし、もういい。我もこの劣等を殺して、即座にあの男を追いかけてはならぬのでな」

「……そうさせるとでも？」

「……こいつはオレを嘗めてるのか？」

「そうさせるのではない、そうなるのだ、結果的にな」

「・・・それが嘗めていると言った」

オレは腕に巻かれた包帯を解く。

・・・溶かし尽くす。

「ほう。毒手か。チャチな玩具を使いよって・・・」

「デメーは溶かし尽くす」

チャチな玩具だと？

オレの人生の一部を否定しやがって・・・。

流石に我慢ならねえ。

「やれやれ、対一では無いのですよ？私を忘れないでくれませんか」

ともかく今の内に溶かす！

「忘れているわけがないだろう？・・・なあ、劣等」

「なにっ!？」

死角からの攻撃をなにも見ずに防いだ！？
俺の経験として、最高のタイミングに攻撃したのだが……まさか勘が鈍ったのか？

「安心しろ。見事な不意打ちだ。だがしかし、相手が悪かった。我に死角は無い」

「なっ！ぐうっ！？」

拳を掴まれた状態で蹴りを入れられた。
かなりの重さだ。

「くそっ！なら！！」

最初から全力全開本気の本気で行く事とした。

「制御……解除！！」

元々……いや、昔蠱毒として身内一同を殺さなくてはいけなかった時から、既にオレの腕は異常になっていた。
毒素があまりにも強過ぎるのだ。

過ぎたる毒は例えどれだけの抗体をその身に持っていたとしても、

オレ自身の体を蝕（むしば）む。

それを抑えるために普段は意識の大半を注ぐのだが、こいつら二人と戦うのはそうも言ってもらえないようだ。

・・・隊長には悪いが、オレはコイツらを寿命を減らしてでも斃（たお）す。

下手したら寿命が底を尽きてしまうかもしれないが、隊長に迷惑をかける訳にはいかなからな。

「・・・なんだと？ なんの手品だ貴様？」

制御を解いたオレの両腕から肩にかけてが毒々しい色に変わる。顔のほうにも多少浮き出てきている。

・・・タイムリミットは・・・何とか5分くらいなら命は保てるな。

「骨の髄まで溶かし尽くしてやるよ。跡形も無くな！」

空気すらも俺の毒に当てられ腐敗し、崩れ散る。

・・・無闇に止まる事は出来んな。

「私を忘れてもらっては困りますね」

「チィッ！溶けろ！！」

？政が攻撃してきたのを手で取ろうとするが、途中で攻撃をやめて後ろに後退していった。

毒が効かないワケではないようだ。

「・・・なるほど。すごい毒ですね。これは私も・・・・・・・・武器を取る必要があります」

「フム、我も武器を取るとしよう。感謝しろ、劣等」

？政は細身の刀・・・日本刀に近い黒い刀身の刀を、焔帝は鉄甲を装備した。

「この『無楽』のサビとなってもらいましょうか」

「ならねえよ！うおおおお！！」

その刀を溶かし尽くす為に、オレはその刀に拳をぶつける。
いや、ぶつけるのでは無く触れる。

それによって刀は雪のように脆く溶けるはずだったのだが・・・・・・・・。

「馬鹿な！？溶けんだと！？」

「管理者である私がただの剣しか持っていない訳が無いでしょう？」

「……どうやら、有利性は一転、対等に……いや、敵は二人なので不利な状況に戻ったらしい。」

「なら力で押し切るまでだ!!」

普段制御に使っている力を全て攻撃にまわす。

「ぬ、ぬうつ!?!」

「うおらああおああ!!」

右足の蹴り込みからそのまま回転し、左足で後ろ回し蹴りを行う。

「チツ……」

焔帝はギリギリよけたようだった。

そして、焔帝がこちらを向く前に追撃として右のストレートを打つ。

「ぐ、ぐううううう!!」

確かな手応えを感じた。

これは大分効いたかもしれない。

「やったか!？」

「だから、貴方はバカですか?二人いるんですよ?」

「なっ!?!ぐうっ!!」

横からの?政の蹴りをくらい数十メートル弾き飛ばされた。

そして立ち上がろうとすると、
焔帝が視界に入った。

「……劣等オオオオ!! 貴様よくもこの我に傷を負わせおって
えええ……」

「……オイオイ、マジかよ……」

ある程度のダメージを負わせていると思っていたのだが、出てきた
煬帝は頬に掠り傷がついているだけだった。

「・・・・・・・・ぐっ!？」

立とうとしたのだが、何故だか足に力がうまく入らない。
今の蹴りが効いたのか？ いや、違うな。

「・・・・・・・・まさか、もう毒が回ってきたのか？」

「なんですか？ もう終わりなのですか？ 呆気の無いモノですね。そ
れでは、さようなら」

？ 政の刀が俺の首に向かって来る。

くそ・・・・・・・・。

隊長に大口叩いてこのざまか・・・・。

そう思っていたら、予想外の人物が助けに入った。

「アンタバカでしょ。なに諦めてんのよ」

そいつは二隊の部隊長である朱燕だった。

「ほら、助けに来てあげたんだから感謝しなさいよね」

「……誰が助けに来いと言った」

「うわっ……。むっか！普通お礼くらいするでしょー！！」

「……あの程度、自分でなんとか出来る」

「……こいつは基本的に苦手だ。」

なんでこんな奴にたすけられてしまったんだ……。

「立てもしないのに大口叩いてんじゃ無いわよー！！」

「うるせエクソアマ。テメーは邪魔だ。弱いくせにでしゃばるな」

「うわっ！なにこいつムカつく。良いわよ！あの刀男は私が斃すからアンタはあの余り者斃してれば？」

「……邪魔したら溶かすぞ」

早く去っていてもraithたいな。

……いや、この間に少し仕込ませてもらうかね。

「分かってるわよ！あんたに言われたくないわよバーカ！」

……勝ち残ったらあいつ絶対溶かす。

「ってわけで、刀の人。こっちに来て」

「……やれやれ、仕方ありませんね。女子供を手にかけるは気が咎めますが……。まあ良いでしょう。煬帝？後は頼みますよ」

「フン……。余裕に決まっているであろう。貴様もその女を早く殺すのだな」

「はい、分かりましたよ」

？政は朱燕と共に向こう側に向かっていった。

「さて、我らもそろそろ終わらせるか。私の勝ちという幕引きでな」

「いや、死ぬのはテメーだよ」

手遅れになるまでのタイムリミットは後一分……。

俺は先程の話をしていた間にしかけておいたネタを使う。

「なにを……ぐうっ!? き、貴様アア……… 図りおったな
アッ!」

そのネタとは、実に簡単な事である。

焔帝の周りの空気を腐敗させ、一步でも動いた時点で腐敗した空気を吸う事となるというものだ。

腐敗した空気は様々な有害な毒素を含んでいる為、一息でもしたら即目眩吐き気、頭痛などの症状に見舞われるのだ。

「おのれエエエエ………。貴様アアアア………」

焔帝は見るからに苦しそうな顔をしていた。

「じゃあな、焔帝。油断したのが運の尽きだったな」

煬帝の皮膚に手を触れる。

「ぬぐあああああ．．．。おのれおのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれえええええ！この我に！この
煬帝に嘗めた真似をしておつてええええ！許さぬ！！絶対に許さぬ
ぞ貴様アアアア！！」

煬帝は四肢を毒に蝕まれ、肉が腐りながらもそうのたまう。

俺はもう限界に近かったので毒を抑えて、また制御を開始する。

「我を！我を殺したなどと思ひ上がるな劣等風情がアアアア！！貴様に殺されるほど我は柔では無い！」

半身が腐り落ちているのにも構わずそんなコトを言う煬帝。

「貴様に殺せれるぐらいならば！我は！我自身でこの命を断つ！」

そう言うと同時に煬帝は自分の首を掴み、引き千切る。
煬帝の首と胴体がブチブチブチと嫌な音を立て離れ、更に肉体から鮮血が噴き出す。

するだけだ」

地面に座り込んでそう言った。

周りには敵兵一人もなく、ホントに戦場か分からなくなるようなそんな情景だった。

ジュン「無事投稿!! 今日分です」

迅「ああ、そうだな」

ジュン「恵方巻き割と美味しかったね、うん。……それにしても、最初の構想変わったなあ……」

迅「ちなみに、最初の構想は？」

ジュン「拭は、敵二人と相打ちで毒殺という展開だったんだよね。……ああ、迅どうしょ……。シリアスパートじゃ死ぬ道しか……思い付かん」

迅「お前どんだけ俺を死なせたいんだ!？」

ジュン「限りなく!」

迅「テメエが死ねエエエエエ!!」

ジュン「いやいや、嘘だよ。それにしても、あと十日程でバレンタインという行事が……。くそっ！本命チョコもらえるリア充マジモゲロ」

迅「く、黒いオーラが……………」

ジュン「もう一度言います。本命チョコもらえるリア充モゲロ」

迅「私怨が凄いな……………」

ジュン「ふ…………非モテ人種の俺の気持ちは迅などには分からんさ」

迅「な、なんだこの敗北感はっ!？」

ジュン「それではまた次回!！」

恋姫編・終章 戦いの終わり。そして、甘い褒美

そして、ようやく城に着いた。

その間、敵はいた事にはいたが、土塊ばかりで、さほど時間は掛からなかった。

「取り敢えず中に入らないと!!」

城壁を見回す。

・・・彼処に通路があるな。
少し飛ばば入れる・・・か？

「ふっ・・・!!」

脚に力を込めて約3メートル超ある入り口まで飛び上がる。

「よし!曹操達を探さない!!」

とは言っても、この城の地理など知っているワケが無い。
だから、こういう時は定番通り下にあるはず!!

「よしっ！行くぜえっ！！」

「……………」ありました。

「……………おいおい、マジか……」

思わずノリノリで探し始めた俺ですらビックリしてしまう。
……ホント、まさかだよ。

「……………まあいいか」

取り敢えず、良い方向に進んだので考えない事にした。

「助けに来たぞ！」

そう言って檻の前に立つ。

・・・だが、何も返事が無い。

「おい？」

返事がない、ただのしかばねのようだ。

「・・・じゃなくて。何でこんな葬儀場みたいな雰囲気？」

空気が限りなくどんよりしていた。

「・・・助けに来たのか」

・・・あ、やっと喋った。

「そう。よつと・・・」

檻を引っ張り、壁ごと剥がす。

「もう出て来ても良いぞ」

「すまない。助かった」

「いや、助けるのは当たり前だ。……って、一刀君は？」

「一刀は……奴らに……殺された」

悔しそうに言う夏侯淵。

……だから、葬儀みたいな空気だったのか。

「……そうか。動けるようになったら出来る限り早く脱出してくれ。敵を倒し次第、ここは破壊するからな」

「……分かった」

落ち込んでいる魏軍を置いて振り返る。

……そうだな。

「……………そうだ、曹操よ。今のお前達を見て一刀はどう思うだろうな？ 悲しみに打ちひしがれ、自分がするべき事、なすべき事を見失っているお前を。情けなく思うだろうな。堂々としている筈の王であるお前がそんな有様ではな。……………それに、一刀はお前達のそんな顔を望むと思うか？ 現実を受け止める、お前にはお前を支える優秀な部下達が集まっているだろう？」

「……………ッ!!」

「それではな」

「……………待ちなさい!」

……………?

何だ？

「……………感謝するわ、王偉」

「なにに、思った事を言っただけだ。感謝される事はしてはいないよ」

そうして、俺は今度は上に上がって行く。
理由は

お山の大将は高いところが好き!!

←

なら、一番上に于吉達はいるな!!

という考えに辿り着いたからだ。

そして、やっぱり結果は――――

「来ましたか。神影迅。・・・いや、王偉守義」

―――いましたよ。

いちゃったよ。

思わずビックリだよ。どんだけ短絡な精神してんだ？

「貴方には此処で死んで貰いますよ」

「そう簡単にはいかんさ。俺には掛けるべき誇り、守りたい人がいるからな」

義務心でやってるやつなんかには負けるワケが無いさ。

「それでは・・・行くぞ!!」

地面を蹴り、瞬間で于吉の懷に潜り込み、速さと重さで更に強化された拳で撃ち抜く。

「ーーーーっ!??」

于吉は武闘派ではなかったようで、その一撃を食らった後、盛大に吐血混じりの嘔吐し、痛みで気絶した。

・・・血も吐いてたから、危ないかもしれないな。

「・・・ふう。終わったか」

思わずこんなに早く終わった事に拍子抜けしそうになる。

「・・・城を破壊しないとな・・・ツツ!!」

急に殺気を感じし、そちら側を振り向いて防御の体制をとる。

「ぐうつ!」

何もない筈の空間。

そこから突如、先ほどまでいなかった筈の男。

左慈が突然現れた。

「チッ！しくじったか！」

・・・まさか幻覚か！？

「幻覚か！？」

「・・・ふふふ・・・。よく気がつきましたね。貴方の思った通りですよ」

「ならば・・・ふんっ！！」

気を爆発させて幻覚を粉碎する。
擬音で『パリーン』とか聞こえてきそうだ。

「・・・は？」

思わず于吉は呆れて呆然としていた。

「油断大敵！！」

今度こそ于吉の腹に全力の右ストレートを打ち込む。

呆然としていたからか、反応が鈍くなっていた于吉はモロにその一撃をくらった。

「ーーーーっっ!!??」

今度は内臓でも吐き出すぐらいの勢いで血を吐き、くの字になりながら倒れて散る于吉。

「えと……大丈夫か？」

思わず心配してしまった俺は悪くは無だろう。

「……よし!次はお前だ!左慈!」

「……仕方ない。行くぞ!!」

左慈は殺気のこもった蹴りを放ってくる。

「食らわんわアア!!」

クロス気味で蹴りを仕返すと、上手いぐらいにクロスが入り、左慈の側頭部に蹴りが入り、そのまま地面に打ち付けた。

「・・・ぐっ!？」

左慈の頭は地面にすっぽりと埋まり、二三痙攣した後、左慈は動かなくなった。

顔が見えない状態で倒れるとは敵ながら哀れな奴だ。

「・・・それにしても早く終わったな」

やはり冷静になったからだろうか？

コメディ―な倒れ方をしている二人を見ながらそう考える。

「・・・つと、さつさと壊さねえと!」

・・・曹操達はいないみたいだな。
いや、いるのか？

「・・・えっと・・・あ、いたな」

外を覗くと、その姿が確認できたので、壊す事にした。
あの二人は…………。

「よいしょっ！…………ふんぬっ！！」

人間槍投げで于吉と左慈は星になりました。
多分これがギャグパートなら生きているだろう。

「幸運を祈る」

思わず二人が星になった先に敬礼をした。

「よし。壊させて貰いますかね」

最上階の窓の部分から外に飛び上がり、気を溜める。
その気を溜めて、拳が大体直径一メートル程になった時点で、それを放つ。

「消し飛ばえええええ！！」

そして、腕から出た所謂ビーム的気の流れは、城を丸々包み込み、

城を消し去った。

「・・・・・・・・よし！終わったか」

戦場を見渡す。

・・・・・・・・土塊の兵も、敵の兵もないな。

何故だか、もうすでに戦いは終焉していた。

立っているのは、蜀、呉、董卓軍、俺の部隊・・・・・・・・そして、魏軍の面々だけだった。

「・・・・・・・・よっと」

地面に降り立つ。

「・・・・隊長！終わったのか！」

「拭！生きてたか」

思わずホッとため息をついた。

「勿論だ！隊長の副長なんだ。そう簡単に死なないって」

「そうか。良くやったな、拭」

拭の健闘を讃（たた）えていると、向こうから紅がやって来た。

「迅様！！！ご無事で！！」

「・・・チツ・・・！」

嫌そうに舌打ちをする拭。

「アンタ何なのよさっきから！！さっきもそうだけど、ケンカ売ってんの！？」

「ああ？ケンカ売って欲しいんならいくらでも売ってやるよクソアマが」

「上等よ！！アンタ表に出なさい！！」

「は？何処が表か言ってみろバカ。此処が既にもう外だろうが。理

解できないのか?・・・ああ、それくらい頭が残念なんだな」

口ケンカを始める拭と紅。

「・・・殺す。殺すわアンタ」

「上等だァ!やってみやがれクソアマァ!」

ついに殴り合いに発展した。

ある意味この二人は仲が良いのかもしれない。

「「仲良いわけ無いだろ（です）!!」」

（うおっ!? 思考を読まないでくれ!!）

そんな事を考えていると、向こうからみんなが来た。
魏軍の皆さんもくるようだ。

「や!無事帰還したぜ!」

務めて明るく振る舞う。

コレから去るのだから、最後の最後は笑って別れるハッピーエンドが良いからだ。

「迅さん……」

「迅……」

月と詠はやはり何処か暗かった。

「どうしたんや月、詠？」

霞も気になったようだった。

いや、董卓軍の大半が気になっていたようだが。

「……………そうだな。皆、聞いてくれ。今からいう事がある」

全員が俺の方を見る。

さっきまでケンカしていた拭と紅も見ていた。

……………なんか緊張するな。

「コレから、皆で仲良く手を取り合ってお互いに助け合っていて貰いたいと思う。それは、本当に難しい事かもしれない。それでも、

俺は此処にいる全員の可能性を信じている。争い、虐げる世界ではなく、手を取り合い、より良い、皆が笑い合えるような世の中に出来ると。きっと皆なら出来ると俺は信じているから、だからこの世界を平和な世に導いてくれないか」

「……何故そんな事を急に言うんだ？まるで迅はそこにいないような言い方だな」

冥淋から物凄く鋭い指摘が入る。

思わず心が読めてるのかと思ったくらいだ。

「……まあ、その通りだ。……もう期限だな」

もう既に足元から消え始めていた。

『ッ！！』

そこにいる全員が息を呑む。

初めて見る現象だからだろうか？

「皆、ありがとう。本当に……本当に楽しかったよ。またいずれか、もしこの世界にもう一度来れたら会おう」

「……迅さん。少しこっちに來て目を瞑（つむ）ってくださいませんか？」

いきなり月にそう言われ、取り敢えず月の元に行つて目を瞑る。

直後に、俺の頬に感じる暖かく柔らかな感触。

「……ふえ？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまったが、仕方が無い。
あの感触は……まさか……。

そう思い、瞼（まぶた）を開ける。
其処には、顔を赤くして笑っている月がいた。
そして、周りの全員は啞然として、ほうけていた。

「月……？」

「迅さん。必ず歸つて來てくださいね？これが、この前のお願いで
す」

「・・・ははっ。なら、必ず帰らないとな。お願いは受け入れない
とダメだし。それじゃ、また会おうみんな」

そうして、俺はこの世界を去った。

頬に、甘くも暖かい感触を感じながら。

恋姫編・終章 戦いの終わり。そして、甘い褒美（後書き）

ジュン「一日遅れましたが、なんとか恋姫編終了です」

迅「・・・終わったな」

ジュン「ああ。恋姫なのに、砂糖吐かせるような展開無かったな・・・」

迅「俺相手でどう砂糖吐かせるんだよ・・・」

ジュン「ちよっぴり役得はあったけどな？」

迅「そりゃ・・・まあな／＼」

ジュン「くそっ！憎い！この男が憎い！」

迅「なんだよ急に！？」

ジュン「いや、問題ない。次からは・・・フェイト編だっけか？」

迅「いや、俺に聞くなよ」

ジュン「・・・それだとしても、絶対サーヴァントになるよな。
この展開だと。恋姫編終わってからだし」

迅「そりゃそう・・・かなあ？」

ジュン「それより、今悩んでる事があるんだ」

迅「なんだ？」

ジュン「いや、拭達を宝具にするかだな」

迅「それはしらねえ」

ジュン「考えないとダメか・・・。それでは次回!!」

「・・・またか。懐かしいな」

また久しぶりにこの狭間を彷徨う事となった。

「またどうせ巻き込まれるんだろうな・・・」

他人事のようにそう呟く。

「ぬっ!？」

また、いきなり体を引っ張られる感じが襲った。

「うおあああああ!!?」

やはり、この感じには慣れず、俺は叫び声をあげながら、空間に出来た狭間に引きずりこまれた。

それから、何分たっただろうか。

いや、何時間、もしかしたら何秒かもしれない。

この狭間は時間が曖昧な故に、時間がどれほど経ったのかはわからない。

しかし、俺の体感としての時間は結構な時間だと感じていた。

「場所わからねえ……。どうするべきか……」

ここは暗く、それでいて深かった。

光も何も無い暗闇。

それが今の場所だった。

「……。ん？」

暗いと言いたいようなない視界に、一筋の光が差し込んだ。

「行く……。か？」

俺はその光に向かって歩き始めた。

光に近づいて行くにつれ、どんどんと明るさが増していく。

そして、だいたい感覚的に五分が立った頃。

視界は光で明るくなっていた。

「やっと着く・・・のか？」

そして、更にもう一步踏み出すと、景色が変わった。
其処は、ステンドグラスが張り巡らされた変わった部屋で、目の前には人形のようなモノが一体と・・・遠坂凜がいた。

「・・・マジで？」

思わず目をこすってしまったが、多分この展開でいくと・・・俺サーヴァント？

「アンタが私のサーヴァント？」

・・・どうやら、そのようだ。
ってか、どうせならアーチャー風に「問おう。貴様が私のマスターか？」ぐらいは言いたかったなあ。

「ん、多分そう」

「はあ？多分ってなによ？」

いや、知らないモノは・・・ねえ？

「ま、その話は後って事で。取り敢えず目の前にいる敵をどうにかしないとな」

人形を指差す。

敵は律儀に待っててくれたようだ。
紳士的な奴だ。

「さて、もう良いぞ。やろうか」

声にならない声を上げる人形。
待っててもらったのに申し訳ないが、速攻で退場をお願いしよう。

「はあっ!!」

人形の顔面への右ストレート。
それは人形の顔面を叩き潰し、数メートル先へと吹き飛ばした。

「すまん。お前は紳士だったが、弱かった。強くなって出直してきてくれ」

壊れてしまった人形にそう言う。

いや、ホントにコレで帰ってきたら、この人形めっちゃ強くなってるパターンじゃないか？

「っと、それで？なんだっけ？」

「……まずアンタ誰よ？」

どっちで言えば良いんだ？

普通にもうそろ神影迅って名乗りたいんだが、やっぱりまだ王偉として名乗るべきか？

……ここは王偉って名乗っとくか。

この名前結構愛着出来たし。

「俺は王偉。字は守義だ。君は？俺のマスターよ、名前を教えてくださいませんか？」

名前知ってるけど。

形式的に聞いておくべきなんだろうな。

「ええ、私は遠坂凜よ。……もう一回名前言ってくれない？」

「俺は王偉。字は守義だ。何かおかしいところでもあるか？」

・・・なんで固まるんだ？
怖いんだが。

「・・・よしっ！コレで勝ったも同然よ！！」

・・・why？

何故そうなの？恋姫から来たんだぞ？

「よし、オツケー。落ち着こう」

肩に手を置きながらそう言う。

「え、ええ・・・。なにかしら？」

「まず聞こう。・・・三国志の将の性別は？」

「・・・三国志？」

・・・三国志を知らない？　どういうコトだ？
なら、質問を変えようか。

「・・・なら、劉備、孫策、曹操・・・董卓の四人の性別は？」

「・・・なにを言ってるの？　女性に決まってるじゃない」

・・・はい？

もしかして恋姫の世界とリンクしてる？
ってコトは、今聞けばどうなったか分かるのか？

「すまない。聞きたいコトがある。中国は今どうなっている？」

「・・・中国？」

中国も知らない？
一体どうなってんだよ。

「・・・言い方を変える。劉備、孫策、曹操、董卓、この四人が生きていた国は分かるな？　その国は今どうなっている」

「・・・ああ、民和連邦ね」

・・・なにそれ？

「どういう意味？」

取り敢えず国の名前の意味を聞いてみた。

「『民との和（輪）を大切とする』連邦は四つの国から出来てるかららしいわ」

「そうか。分かったよ」

取り敢えず仲良くできて嬉しいな。

「・・・で、クラスは？」

クラス？・・・最大のピンチだ。
分からない。

そう悩んでいたら、例の如く念話が入った。

『今回は一つだけ言いに来た。お前のクラスはマーシナリー――（傭兵）だ。宝具はお前のその暗器だ。じゃあな』

もう本当に一方的になつて困る。

それにしても・・・傭兵ね。

別に良いけど、なんだかなあ。

「クラスは・・・マーシナリーだ」

「・・・イレギュラークラスね。このセラフの聖杯戦争にイレギュラークラスが出るなんてあるの？」

「いや、俺に聞かれたってなあ。あと、俺の昔の名前は神影迅だから、迅とでも呼んでくれ」

迅は呼ばれなれてるからな。

マーシナリーとかで呼ばれるより色々秘匿性も高いだろ。

「昔の名前?・・・まあ良いわ、よろしく迅」

「よろしく凜」

こうして俺は凜のサーヴァントとなった。

F a t e / e x t r a

a c t. 1

次は俺はマーシナリーのサーヴァントに

ぬはぁ・・・。

まさかこれがスランプなのか・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3178o/>

転生した格闘家の世界探訪

2011年2月13日19時14分発行